

289.3  
cG66Tg

007664-000-2

289.3-cG66Tg

ゴルドン将軍伝

徳富 蘆花/著

M34

ACM-0082



282

T

ON

教 育 基 市 及 生 學 本 日  
書 叢 同 會 車 齊

13

徳 富 健 次 郎 著

# ゴルドン 將軍傳

東 京 警 醒 社 書 店

日本學及市基督教  
青車會同盟叢書

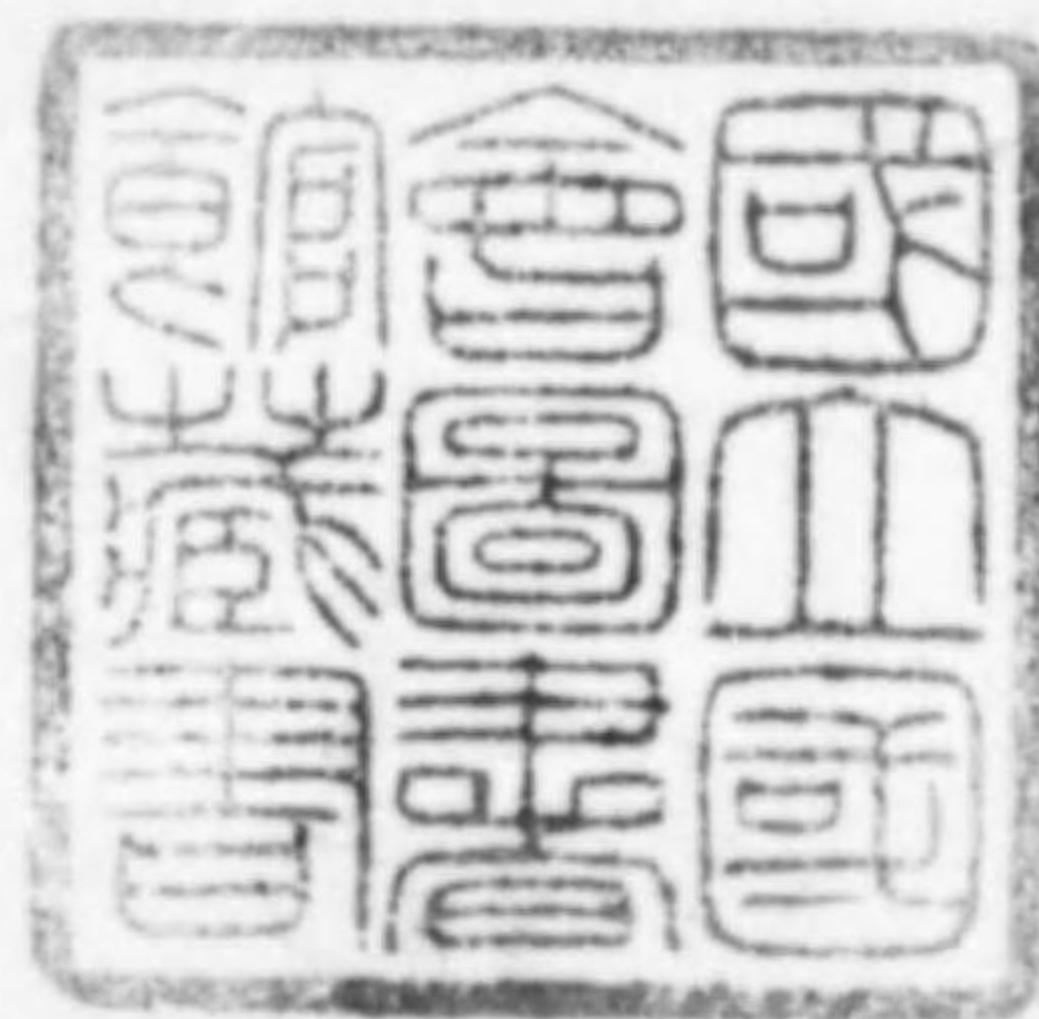
徳富健次郎著

ゴルドン將軍傳

東京 警醒社書店



軍將 ンドルゴ



“Warrior of God, man's friend, not laid below,  
But somewhere dead far in the waste Soudan,  
Thou livest in all hearts, for all men know  
This earth has borne no simpler, Nobler man.”

TENNYSON.

31254

287.30966 Tg.

ゴルドン將軍傳序

往年日清戦争の際、日本基督教青年會より軍隊慰問使を清國に送りし時、其費用として集めたる義捐金に若干の剩餘を生じたれば、これをもちてゴルドン將軍傳を刊行して軍人に頒ち且つは一般讀者に頒たんとす、君爲めに稿を起さむか、と基督教青年會の丹羽清次郎氏より囑せられ、余は欣然として斯小冊子を編みぬ。

ゴルドン將軍は近世の一名將、腕を歐洲中原に揮ふの機會なかりしと雖ども、支那に於て、蘇丹に於て、兵を督しては土偶にも英氣を吹込み、其兵を行るに當つては疾風迅雷常に奇兵を以て奇捷を奏し、不識庵を欺くの概あるは、何人も知る所、然れども將軍は攻城野戰の英雄よりも更に大なりき、其前後七年蘇丹經營の跡を見るも、濟世の志を懷き、經綸の才を具へ、御し難き民を御し、混沌界中に秩序を造り出すの手腕實に侮

Ch. Gordon.

As I am quite happy, thank God, a like Lawrence, I have "tried to do my duty"

此はゴルドンがカアツームの籠城中より英國の姉に寄せし最後の書翰の末節なり。

「尙々、神に謝す、生は頗る快活、而してラウレンスの如く、生は「吾責任を盡さんことをなつこめ」たり」この意。

ラウレンスは英領印度の教主と云はれし十九世紀の賢太守。吾責任、云々はラウレンスの語、つこめの附線はゴルドンの施せる所。飽くまで謹慎抑權、善に伐らず功に居らざるの襟懷は、此への一抹にあらはれたり。

る可からざるものあり。將軍をして假りに我國に生れしめば、臺灣總督他に其人を求む可けんや。

長髮賊討平、蘇丹經營、五十二年の生涯に於て、ゴールドン將軍が殘したる事蹟固に少あしとせず。然も余輩をして殊に欽慕措く能はざらしむるものは、五十二年の生涯を一貫して時に應じ事に觸れ清泉の迸るが如く花香の薫するが如く流露せる其人格にあり。人の斯世に於ける、事業は往々蘇丹の砂漠に印する駝跡の如く、風散雨消久しきを経て終に其跡を認め難きものあり。然れども其人格は死に従つて死せず、永く空中に浮游して、眼見る能はざるも、實に宇宙間の一大勢力たり。即ち事業は往々一時なり、人格は毎に千載不磨あり。古今偉人の傳を繙く毎に、余輩は其然るを痛感せずんばあらず。

抑もゴールドン將軍は何人ぞ。余輩をして一二名士の公論を引用せしめよ。

グラッドストーン氏曰く、ゴールドン將軍は上帝と親密の交通をなせる人なり。

目下ロバート卿と共に英國陸軍の二大柱石たるウルズリー將軍はゴールドン將軍同年の友なりき。十六年前カアツームに籠城せるゴールドンの救援に赴く途中、英國の一知己に書を寄せて曰く、余はゴールドンの親友、且つ尤も熱心なる嘆美者の一人なり。余常に云ふ、余が一生の間に於て親しく相識れる英雄は唯二人のみ、一は米國南北戦争に於ける南軍のロバート、リーなり。他の一人はゴールドンなり。斯回の遠征につきては、職分の感念以外、更に彼の如何にも勇々しくカアツームを守れる其人に對する個人的親愛の情と、其生命を救はむが爲に自ら人間の敢てする限りを盡さんとの切望ありと。

サリスベリー侯曰く、近代我英國の人傑中、ゴールドン將軍の如く人々の愛着を惹ける者無し。

ラウレンス、オリファント氏曰く、ゴールドン將軍の人物に於て、非常に余をして愛着措く能はざらしむるものは、其心根の温順にして、皇天の用をなす器械として、の外常に自己を卑うせることなり。一切虚飾のなきと同時に、如何に卑小の事なりとも常に力を致さんとの願望の熾烈なる、余をして曾識の人物中ゴールドン將軍こそは尤も基督に似たる人なるを感せしめたり。

寥々たる評言も、以て其人を想見するに足る可し。余輩がゴールドン傳を繙き來りて、殊に快よく感ずるは、主人公の動機の如何にも清きにあり、其動機を何處までも押通し行く勇氣にあり。天資潔烈、利欲に淡くして義に勇む、加ふるに省察涵養の功夫を以てす、其宇宙間に畏るゝ所は唯一の上帝、樂む所は人世の爲め力を致すにあるのみ、心私なく、眼に偏僻なく、利害に迷はず、情實に感はされず、生を吝まず、死を恐れず、知己に感じては鞠躬盡瘁餘力を残さず、志合はされば即ち飄然袂を拂つて去る。

武士と云は、眞正の武士、俠を云は、眞個の大俠、其心事去就明々白々、酸素の如く、古刀の如く、人をして爽然たらしむ。而して此皆自然に其天真の流露せるもの、其間に半點の矯飾を見る能はず。君自天成好男子、何曾一點愛名心とはまさにゴールドン將軍の眞面目を道破したるものなり。

若し此婉曲なる世の中を思ふさまに眞直に歩める者あらば、ゴールドン將軍は其一人あり。直進は衝突を豫想す。將軍の一生は滑らかなる生涯にあらざりき。凡俗は將軍を變物と呼び、少狂漢と目しぬ。夫れ豕は極羅の白きを嘲り、信天翁は金鳩の日を睨むで弄るを笑ふ。輕薄の眼に熱誠は變物あり。凡庸の眼に非凡は狂なり。世は道行きに汲々として道路に日を暮らし、天才は即ち往々飛躍して目的に進む。將軍の一生を見るに、其兵を行り、事を策る、當意即妙、直覺的にして、往々中間の道程を省けるが爲めに、人の誤解を招けること實に少なからず。五十二年の生涯は凡



俗が非凡を窺めたるの歴史なり。カアツームの悲劇は凡俗が天才を殺せるなり。而して斯戦闘の一生を経て、心中甚だ滋味を帯びず、見すく犠牲とありて然も甚だ憤怨窘蹙の態なく、吾血を以つて國民の罪を贖はんとする殉道者の熱情眞に燃ゆるが如きを見る。何に由て歎然りし歟。其の日夕聖經を誦して深く味へる基督の模範に私淑する所ありしが故にあらざるか。余輩はこゝに到りて、ゴルドン將軍の高風を欽すると共に、將軍を生める（更に他の千百の偉人を生める）基督の偉大を今更に感ぜざる能はず。

將軍は神を信する不識庵乎。意氣を重んじ、金錢を輕んじ、氣を以て機を制し、疎中に精細なる所あり、髣髴として一個古風東洋風の英雄を想起し來る。唯謹慎抑樽、絶えて疎放の態なき耳。其支那に於て、蘇丹に於て、一外人の身を以てよく人心を得土宜に合したるもの、素より一誠字の貫通する爲なりとは云へ、斯一種非歐人的氣味の契合したるありしが爲

めなるなからむや。若し夫れ其武士的氣節と共に非常に着實なる事務的才幹を具へて、毫も空疎迂遠の氣なく、一種神秘的空想質と共に精細明晰寸毫も摸稜を容さずダントの如く天國の城壁をも測量しまた埃田の地位をも圖にせずんば已まざる底の頭腦を並有したるが如き、父に蘇格蘭武士の子あり、母に英蘭豪商の娘あり、軍用工學は其専門的學問にして、聖書と宗教書類は不斷の嗜讀書なりしは、實に偶然ならざるを見る可し。

其殊に異とす可きは、天下攘々利の爲めに來往する今代にありて、殆んど己と云ふものを忘却せるにあり。世界第一の國自慢の國に生れて、加之籍を軍人に置いて、然も狹隘なる國的偏僻を有せざりしにあり。素より英人としては英國を愛しぬ。英國軍人としては國防自衛の策は其注意せる所。其の英帝國の慮る可きは、中央亞細亞にあらずして却て極東にありと論じて英清同盟説を唱へ、一八八〇年伯林條約意見書を草し

て伯林條約は土耳其に益せず、歐洲に無限の害を與へたりと論じ、アフガニスタン戦争に關する意見書を草して、印度の防禦は側面の交通自由なる峽路の出口に於てす可し、側面の交通不自由ある峽路の入口に於てす可からずと論じて、カンダハール占領は政治上、戰略上、道義上不可なりと論じたるが如き、地中海東サイプラス島買入を建言したるが如き、印度洋の防備を考案したるが如き、時に應じ問題に觸れ國防に關する劃切の建策をなしたるもの固に少なからずとす。然も其第一動機は、國民にあらすして人間にありき。利害にあらすして是非にありき。其の個人にありても、己を忘れて人を思へる如く、支那に於て、蘇丹に於て、其第一に思ふは英國の利益よりも支那人蘇丹人の利益ありき。倨傲なる白人が世界は唯ア、ルヤ人の爲めに存在すと思惟し揚言するに引かへて、ゴルドンは蘇丹の奥の一布肌を覆はざる土民も己が同胞なるを痛切に感じたり。即ち其言を引用すれば、斯等土族の矇昧無智なる一蠻婦も

エリザベス女皇も共に人生の一位を塞ぐ者として待ちたるなり。蓋しゴルドンの上帝は甚だゴルドンに近かりき。其廣大無量の光明に照らし見れば、天に父あり地に同胞あるのみ、常に人の視力を錯る貧富、貴賤、強弱、國民の隔障、人種の相違、文明の相違、乃至信仰の相違の如きは、殆んど融けて無かりしあり。故によく理を見る極めて分明なりき。故によく直往勇進したりき。故によく謙遜ありき。

ゴルドンは偏僻を惡くみぬ。余輩をして偏僻に陥らざらしめよ。如何なる假面を被るも偏僻は偏僻なり、真理にあらす。鳥は隻翼を以て飛ぶ能はず、真理は常に中間に存す。大局の上より打算すれば、人として神の子にあらざるなく、事として攝理の一部にあらざるあり。余輩は濁流中に清水を汲み、塵芥の中にも遺玉を見るを務めざる可からず。然も語に曰はずや、義は國を高くし、罪は民を辱しむと。余輩をして、英國の大なるは、單にシシル、ロオヅチャムバレーンあるが爲にあらす、また實にゴルド

ンジョン、ブライイトの如き變物(世俗より見て)あるが爲なるを記臆せしめよ。天は全才を降さず、ゴルドン豈に完全無缺ならむや。其清廉狷介に過ぎて、或は清濁併呑の量を缺ける、あまり性急氣早にして餘裕を缺き、毎もあまり早く橋を絶ち舟を沈むるが爲め後に到りて往々事の破れを來せる如き、缺點と云はゞ缺點なり。余輩は其功名に淡く、貨財に廉潔に、其常に己を没して人の爲にするを欽仰すと雖も、人面の異なる如く稟性も亦異なるを、強て同一模型の中に壓搾するの可なるを知らざる者なり。要するに大我小我もと二にわらず、善惡は畢竟程度の論のみ。自己ある以上は、利己の一念存せざる能はず。國を立つる以上は、帝國主義もまた己むを得ざる可し。献身博愛も皮相に誤れば經國處身の道に於て害なしとす可からず。然れども自己中心主義、自國中心主義の餘弊は、嘗に此に止まらざるものあり。多言を須ひず、自國中心主義の結果は、之を、去年北清に於ける列國の舉動に見よ。自己中心主義の結果を見んと

欲せば、遠く海外に去るを要せず、坐して一葉の我日刊新聞を通讀せよ。腐敗せる空氣は、酸素の注入を要す。余輩はゴルドン將軍の殊に今日我日本に必要なるを見るあり。あゝ將軍は十六年來蘇丹の黃砂に埋れぬ。今故紙をあさりて、拙筆其面目の片影を傳へむと欲するも、豈己むを得んや。

明治三十四年十一月三日

東都西郊菊花香しき處に於て

著者識

目次

第一章	二十以前	一
第二章	クリミヤの初陣	一一
第三章	清國出征	二四
第四章	長髮賊征討 (一)	三九
第五章	長髮賊征討 (二)	五一
第六章	長髮賊征討 (三)	六六
第七章	グレヅゼンドの慈善家	八〇
第八章	赤道州總督	九五
第九章	蘇丹總督	一三二
第十章	東走西奔	一七七
第十一章	蘇丹引拂	二〇〇

第十二章	カアツーム籠城 (一).....	二三一
第十三章	カアツーム籠城 (二).....	二八〇
第十四章	不死の死 .....	二九四
書翰拔萃	.....	三〇八

# ゴルドン將軍傳

徳富健次郎著

## 第一章

二十以前

チャールズ、ジョルジ、ゴルドンは西暦一八三三年一月廿八日を以て、英國ウリツチ市に生れぬ。ウリツチは倫敦を東へ距る八哩、政府の造船所、造兵廠、製鋼所、武器陳列館、要塞砲兵、練兵場の所在地にて、先づは英國の横須賀なり、喇叭の音と、大鐵鎚の響とは、實に斯健兒の誕生を迎へ祝するの鼓樂なりき。

ゴルドンは殆ど先天的軍人なり。ゴルドンの姓、元來「鎗」を意味す。名詮自稱、ゴルドンの一族は古來蘇格蘭に名高き武門にして、十七八世紀の英國戰鬪史を繙けば、ゴルドンの姓氏は星の如く紙上に散点するを見る。十八世紀の頃、此一門にデビット、ゴルドンと云ふ武士ありて、米國カナダに移住せり。此をゴルドンの曾祖父とす。祖父を井リアム、アウグスト、ゴルドンと云ふ。十四歳より軍籍に入り、後英國に歸住し、老ビットのチヤタム伯などとも交際ありき。父を井リアム、ヘンリー、ゴルドンと云ふ。砲兵士官より累進して陸軍中將に到り、一八六五年に没しぬ。醇乎たる軍人肌の、平居滑稽洒落事に當つては即ち嚴毅軍職を無上の光榮と心得、軍人の體面を命にかけて守る好個の武夫ありき。後年ゴルドンが支那政府の爲めに常勝軍に將として長髮賊を撃ち、累りに功を擧ぐるに及び、父は其子の手柄を誇りたれ共、併し苟くも英國軍人たる者が外國に雇はるゝなどは以ての外ありと謂ひぬ。ゴルドンの母をエリザベス

と云ふ。倫敦の豪商サムエル、エンデルビーの女。此サムエルまたかいなでの商人ならず。其所有せる幾隻の捕鯨船は比較的航海術の幼稚ありし當時にありて、北冰洋より南洋を乗り廻りて、地理學上の發見と殖民事業に資する所少なからず。且其所有船二隻は、曾て英政府の御用船となり、茶を搭載して米國に赴き、ポストン人士の爲めに暗夜土人に扮して船上の茶箱を盡く海中に投棄せられ、かたゞ、以て獨立戰爭を促すの一因となりたるを以て有名ありき。此商人の娘あるゴルドンの母は如何なる人なりし乎。くわしき事は傳はらざれど、クリミア戰爭中、三人の吾子及び近親の甲乙を戰場に出しあがら、少しも惡びれたる容子なく、よく家を理し、内外の務に當りて綽々餘裕ありたるを見れば、蓋し夫の妻たり子の母たるに負かざりしなるべし。剛健ある蘇格蘭武士の血は、大膽にして、且堅實なる南部英吉利商人の血と混じて、夫妻の間に五子六女生れ出でぬ。ゴルドンは第四子なり。

父は砲兵將校として、任に諸處の要塞に就きたりければ、ゴールドンも亦或は愛蘭に、或は蘇格蘭に、或は遠く地中海東コルフ島に、其生の初十年を過しぬ。ゴールドンは至て虚弱なる童なりき、神經過敏にして、毎に大砲の響に愕きしと云ひ傳ふ。神經過敏は必しも人の剛臆を定めず、而して烈しき魂は往々弱き体に宿ることあり。九歳の年、コルフ島にありける頃、ゴールドンは少しも游泳をよくせざりしが、年上の友の引きあぐるを待みに、しばし身を躍らして深水に飛び込みたりき。またウリツチにありける頃、あらぬ咎を蒙りてかねて約束の倫敦曲馬見物を許されざりしかば、ゴールドン深く其冤を憤り、其後は何と誘はれても頑として終にまた曲馬を見ざりき。

十歳の年タウントンの小學に入り、十六の年ウリツチ陸軍士官學校に入りぬ。學校の生涯は、あまり幸福にあらざりき。千里かく可き駒に羈絆はつらきものぞ。校長はヲオトルルーの戦に隻脚を失へる老武者なりしが、權威をふり廻はし規律を課する往々過嚴なりき。後年に及びゴールドン毎に斯く云ひぬ、一肢なき者を青年の上に立たしむるなかれ、短氣にして無理多きものなりと。ゴールドンは誠實に學びぬ。然も身体兎角虚弱に、且實力の倍かけて教場の成績を街ふの術なかりしが爲め、所謂出來のよき學生の部には屬する能はず。殊に其頭容易に下からず、苟も壓制に似たる事を蛇蝎の如く忌めるよりして、時に反抗の舉動あり、なべて温良にして教場の出來よき學生を愛する教師にはうけ甚だ宜しからざりき。

(註、ゴールドン士官學校在學中の生涯に就ては、其詳細を知る可からず。唯一、一八八三年ゴールドン五十一歳の夏、其姉に寄せたる書翰に左の一節あり。

「昨夜生は恐ろしき夢を見申候。またく士官學校にありて、試験に出ると云ふ夢！に候。學びし所を悉皆忘れて仕舞ひし(文典と)舞踏は終

に學び得ず候」と云ふだけは半醒半睡の間に覺へて、もう全くの士官學生になりすまじ、やつと氣がついて自分は陸軍少將なる事を知りたるは餘程たつての事なりし。試験と申すもの何等の苦みぞや！我々は試験を受けねばならぬ氣の毒な青年の人々に對して思ひやりが足らず候云々」

或時教師某、ゴールドンの成績よからざるを罵つて、「到底士官は覺束なし」と放言したれば、ゴールドンは吾肩章を捻切り教師の足下に投げつけたりと傳ふ。されば其卒業も、或校規違反の廉によりて六ヶ月遅延し、在學四年にして一八五二年六月學校を出でぬ。時に十九年六ヶ月なり。即ち工兵少尉に任じ、エールスあるベムブローク要塞勤務を命せらる。父毎に云ひけらく、「彼が士官學校にゐる間は、余は宛ながら火藥函に座する思ありき」と。ゴールドンは窮屈なる軍籍に入るを好まざりしも、父は其子の就官を見て胸を撫で下ろしぬ。

二十未滿の神經質なる新任少尉、中春にして瘠せ、(其衷に始終いらく)と燃へしものあり、脂肪を焼き盡して肥ふる能はざらしめぬ。眉宇に一點の暈あり。人生固に憂多し。青年殊に不平多し。曾て士官學校に屈を忍び、今またベムブローク砦に日常勤務の鬱陶しきを忍べる。ゴールドンは滿腔の悶々を感じ、而して慰藉を宗教に求めぬ。此には其姉アウグスタの感化與つて尤も力ありたるが如し。時としては兄弟は父よりも父たり、姉妹は母よりも母たることあり。ゴールドンの父母はよき父母ありき。然もよき父母必しもよき知己にあらず。加ふるに子女十一人の多き、自づから及ぶ所薄きを免れず、敬虔にして情愛深き姉アウグスタの同情と感化とは、蓋ゴールドンの心の欠陥を滿たし、其生涯に非常の影響を及ぼしぬ。工兵少尉の當初より、カアツームの最後に到るまで、三十年間ゴールドンが本國の要塞合營より、支那、印度、阿布利加の舟の上より、駱駝の背より、彈雨の中より、隨處隨時ペン鉛筆を走らしてアウグスタに書き



送りたる一部「ゴルドン書翰集」を繕けば、姉弟の間如何にも親密に、始終信仰の事精神的修養の事に關して互に切磋せる有様を想見するに足る。余輩をして卷頭的一篇を節譯せしめよ。此は一八五四年ゴルドンが二十二歳、猶ベムブロークにありける時の書翰なり。

親愛なるアウグスタよ……………懇切の御手紙今日接手、萬謝々々……………幸ひ十一聯隊の大尉にてドリウと申す仁、至て信心篤き人にて、其室の暖爐縁に「無價の金剛石」(註蓋宗教師子の名)在りたれば、生も御寄送のがまだ着せぬ前に該書を一讀仕候。生は可成速に「法師ア、ル、マツクチエ」の遺文と申す一書を御送り致すつもりに候。此は屹度御氣に入り可申候……………我々の牧師はあまり譽め兼ねた人物にて、此は俗物に候。説教程の實生活を不致候。併し生はスコットの聖書註釋を手に入れ申候。曾て君が幾冊もなく同書を買ひ給ひし頃は、生も笑ひし事、今もよく覺ゆ居り候。併し神に謝す、今は左様に無之候。生は従前に比

して餘程愉快に且満足を覺ゆ候。もとはベムブロークが嫌なりしが、今は此れより立派な場所望ましくも思ひ不申……………何卒愛する父、上母上も永遠の事を御考へあり度ものに候。何か生より御二た方へ致して、若くは申上げて御爲めになるやうな事可有之や、如何……………生も今の職にありて、好きな人々と親しくするを得、同僚士官と交るにも彼歩兵聯隊などの様を誘惑に會はぬは、非常の幸福に候。罪の増す所には恵も彌増せりと申せば、斯様な事は云はれぬ次第なれど、併し生は實に仕様のなきや、つかれば、屹度誘惑に陥るべし。最愛のアウグスタよ希くは生が爲に祈れ。

獨り此に止まらず、一部の「ゴルドン書翰集」を通じて、殆んど一篇として、上帝を云ひ、基督を説き、心靈修養の功夫を説くものにあらざるはなし。維れ將軍ゴルドンの書翰か、寧ろ聖徒ゴルドンの書翰にあらざるかを疑はしむ。

風變りなるゴルドンよ、多くの人は青春の夢見心地に世を面白く浮き  
て過す。二十代の血氣盛りを恐ろしく眞面目に酒を嗜まず、骨牌を弄  
せず、婦人を顧みず、職務の暇を偷むでは聖書を讀み、宗教書類に耽り、祈  
禱をなす偏屈者よ、度す可からざる變物よ……然れども靜に願へば、  
爾が力の根底は確かに此處にあり、其志す所を察し、其養ふ所を見れば、  
南清の名將、蘇丹の英雄、豈に空より湧いて出でしならん哉。

十

## 第二章

### クリミヤの初陣

陸軍士官學校卒業後、ゴルドンは引つゞいてペムブロークの要塞にあ  
り、一八五四年二月、工兵中尉に進みしが、間もなく東歐にクリミヤ戦争  
起りぬ。出征の數に漏れたるゴルドン中尉は、ペムブローク砦にありて、  
鉛筆と三角定規を手にしつゝ、新聞紙上に花を咲かす戦報を見る毎に  
氣をいらち居たりしが、やうく其年の暮に到り、遠征軍用木造舎營を  
督して、戦地に赴く可き命を受けつ。恰も一八五五年の元日を以てクリ  
ミヤに着きぬ。

年少多血の中尉が眼を先づ射たるは新聞に讀みし花やかなる戦闘の光景に引かへ、慘絶なる裏面の悲劇なりき。大敵奈破烈翁一世の没後、英國が兎角陸軍を輕忽に附して、周到なる準備なく、完美なる兵站組織もなく、漫に遠征軍を出せる結果、數萬の精英は敵の露軍よりも猶恐ろしき饑寒の襲撃に會ひて、風冰る黒海の濱に蠅の如く餒へ、凍へ、病み、死して、實に名状す可からざる艱苦を喫しぬ。經驗なき年少中尉が眼にも、當局者のぬかりは著しく映せるならむ。然も下僚士官は議す可き權無ふして、盡す可きの職分あり。新來の工兵中尉は、口を閉ぢて、一意其職務を盡し始めぬ。

到着即下は専ら本國より齎らし、木造舎營の組立に従事せしが、一ヶ月ばかりして初めて戦場に出で、塹壘の務に服しぬ。總じて工兵の職掌は、冒險多く、勞大にして、他の戦闘員の如く功名手柄を輝かす。機會多からず。別して中少尉は躬自ら士卒に先んじて、事に當るの責あり。ゴルド

ンの書翰は其危険の如何を示す。

二月十四日の夜、私も塹壘に出勤……………其夜佛蘭西軍の方にては、同軍及び我軍の塹壘の前面に於て同軍右翼の哨兵と我左翼の哨兵との間に聯絡をつくることに決定致したれば……………私事色々肝煎り、鍾木鍬及鋤を携帯せる工兵八人を連れ、前部塹壘指揮官第四聯隊の某大尉に、前方へ出し置く爲め哨兵五組與へられんことを請求致し候。同大尉も當所の勤務は今回が初めてなりし由、私事は黙つて何とも申さざりしも、實は是迄一度も參りしこと無之次第に候。偕私は一、行の先頭に立つて、右哨兵を引率し、進み見候得者、昏黒後は洞穴に居る可き筈の先頭哨兵更に不居申されば、其の洞穴には露兵が潜み居るも知れぬ仕儀に候。併し私は猶進み、いやながら、殆ど一人にて、右の諸穴を搜索仕候。偕洞穴の上の丘に哨兵二名殘し置き、其れより廻りて二名の哨兵を洞穴の下に置かんと戻りかけ候處、私共洞穴の外、洞

穴の下に出るや、ボン々々と二挺のライフル鳴りて、彈丸はつい私共  
 近くの地を打申候。連れ居りし哨兵等は駭きて引込み、工兵共もかけ  
 出し候を、やうくの事にて引きどめ申候。實狀は左の通りに候。右は  
 露兵の追撃致したるには無之、私が洞穴の上に据ゑ置きし二名の哨  
 兵が、私共へ向け發銃し、銃管を失ひ、さては塹壘へかけ出したるにて  
 候。此からは何と申しても哨兵共は穴を出で不申、其故私は工兵を連  
 れて進み候。露軍の哨兵線は百五十碼ヤードを距るに過ぎざりし故、私共の  
 銃聲を聞きつけて、雨の如く彈丸を送り申候。私は工兵共に仕事を始  
 めさせ、然る後壘の底に下り候處、佛蘭西方も大分の人数にてせつせ  
 と働き居候間、我々は英軍の者あるを告げ、其れより塹壘に歸り、歩兵  
 第一聯隊の某大佐に會ひ候。私は大佐に、出で行かば必ず味方の哨兵  
 か若くは露軍の爲めうたる可しと注意致候得共、大佐は聽かずして  
 出で行かれ候處、間もなく胸をうたれ候。但し彈丸は軍服を貫き、少し

く肋をかすりしのみ、別に怪儀もなくして、再びぬけ申候。私は終夜工  
 兵の側に附添ひ、非常に疲れて歸營仕候。

ゴルドンの戰場に出でたるは、水禽の水を得しなり。士官學校の試験教  
 場に、教師の眼に隠れし實力と、瘦せぎすの肉に包める烈々たる英雄魂  
 は、忽ちに其端緒を顯はし來りぬ。

斯くてゴルドン中尉が家書を認むるインキ氷りてペン尖折れし嚴冬  
 の節は過ぎて、春とありぬ。セバストーポルの前面八哩の長きにわた  
 りて英佛同盟軍が頻りに塹壘を築けば、露軍も劣らじとマラコフマメロ  
 ンの諸壘を築き、彼築きて進み、此進みて築き、斯くてセバストーポル附  
 近の野は、宛あがら新に黒土を盛りなせし土饅頭だらけの一大墓地を  
 見るが如くなりぬ。塹壘、胸壁築造、地雷敷設、敵軍突貫防禦等、ゴルドン中  
 尉はしばし危険を冒し、常に繁劇の勞に耐へぬ。斯くて春去り夏來り、  
 敵味方一千門の大砲一時に鳴りて黒海の水風なきに震ひたる六月六

日の大砲戦に、ゴールドンは砲丸の飛ばせし石片にした、か前額を傷けしが、創をつゝひで直に持場に返りぬ。同月十七八日の大砲撃大進撃にも先頭にありき。同じ戦場にありける其兄の家信に曰く、尙々チャアリにも無事、あらふる榴弾砲丸の恐ろしき驟雨の中にありながら無難に免れ申候、其安否を承知致す迄の私が心配御察し可被下候、猶同人は昨日も午前一時より午後七時まで大砲撃中絶えず塹壘に勤務致し、今日も午前零時卅分より正午迄勤務致し、目下天幕に熟睡致居候間書狀認兼申候云々。此れよりセバストーポルの陥落まで、ゴールドン中尉が塹壘の勤務約四十回、毎回三十時間の長きにわたりぬ。ゴールドン家書に認めて曰く、一ト月の餘も立ちづくめ、随分退屈に候、併し何か事があれば格別構ひも不致候と。當年の虚弱なる少年は、如斯劇務に堪ふるの士官となりぬ。

(註) 左は斯劇戦の隙々にゴールドンの書き送りし家書の數節を摘したるものなり。

○敵彈危く頭上を掠めしを報じて曰く、露兵の射術は甚だ巧妙に候、其彈丸は大にして尖り候、著者云、弱体は鍊つて鋼鐵の体格となり、少時砲聲におのゝきし過敏の神経は實戦に鍛ひて、斯くの如き沈勇となりぬ。

○敵を評して曰く、露人は勇なり、私の考にては佛人よりも優れり、佛人は大分恐れ出せる様子に候。

○英軍司令官の病没を報じて曰く、ラグラン卿は辛勞衰弱の爲め没せられ候……最期の用意はかねて致し居られしからん歎、著者云、宗教心の一刻も此青年士官の胸底を離れざるを見よ。

○同僚が賞勳に漏れし時の家信に曰く、ジョーンズ將軍が石坑攻撃の際に於けるブラオンの戦功を推舉せざりしを、私共一同失望仕候、尤も私は死後、悼惜せられるなど申す事を別に望みも致さず候、私は

名譽心を懷き不申候。併し彼氣の毒なるオールドフィールド如き眞に  
 恩賞に與る可き人々は何ものも得ずして、中にはC、B(註コムバニオン、  
 英國に於ける士)や佐官など如何に容易に手に入る者の有之候ぞ  
の第三等勳章

や、私はオールドフィールドの爲にかなしみ候。著者云、ゴルドン中尉は  
 賞罰の必しも功罪に伴はざるを見て、世間の所謂名譽光榮あるもの  
 如何にも空しきを感じ、今後は人間を相手にせず、上帝を相手にせ  
 んと思ひしなるべし。故に私は、名譽心を懷き、不申と云へり。名譽心は  
 高尚なる人物の最後の弱点とミルトンも云ひぬ。其名をだに望まず  
 と謂ふ青年は畏る可き哉。南洲翁曾て云ひき、錢もいらす、名もいらす、  
 位もいらぬ人物は始末にいけぬものなり。斯様な男が天下の大事を  
 ば成す者ぞと、ゴルドンの如きは實に、斯始末にいけぬ男の適例なり。  
 露軍は幾回か同盟軍の猛烈なる攻撃をよく支へたれど、勢漸く盛まり、  
 英軍にレダンの砦をば渡さしめし、佛軍にマメロンマラコフの二壘

を陥されては、流石に支ふ可からざるを知り、表には盛に砲撃をつゞけ  
 て裏に潜かに浮橋を作り、堅守三百二十六日にして九月八日の夜終に  
 セバストーボルを放棄したり。ゴルドン書翰の一節に曰く、

八日の夜、私は恐ろしき破裂の響を聞き、翌朝四時塹壘に下りて、眼さ  
 ましき光景を見申候。セバストーボルを舉げて火焰の中にあり、時々  
 恐ろしき破裂起り、旭日之を照らして、非常の莊麗を極め候。露軍は浮  
 橋にて續々同市を退去致し居、三甲板艦は盡く沈めあり、汽船のみ殘  
 居候。爆發されし火薬は實に幾噸と云ふ事を知らず。八時頃私は砲臺  
 の圖取を始む可き命令に接し、レダン砦に赴き候處、實に恐る可き光  
 景を見申候。死骸は濠に埋められ——露兵も英兵も一同に——ウラ  
 イト氏其上に葬式の祈禱文を読み居候。

セバストーボル陥落後、ゴルドン中尉はドニール河口キンブルンの  
 要砦砲撃に赴き、やがて又セバストーボルに歸りて、同所の要砦、船渠、倉

庫、舎營などの破壊に従事したるが、翌一八五六年三月平和條約の調印濟みて、ゴールドンが初めて硝煙を嗅ぎしクリミヤ戦争はこゝに終を告げぬ。此役に佛軍がマメロンマラコフ諸壘を陥れたるに引易へ、レダン砦を陥し得ざりしを英軍擧つて遺憾に思ひぬ。まだ若年血氣の士官家書に認めて曰く、概して申せば、私共は今一ト合戦致し上ならでは構和も嬉しからず覺ゆ候……私も多分三四年は外國に滞在致すことゝなるべし、一個の感情を申さば、私は右の三四年を平和よりも寧ろ戦争に送り度候、戦争には云ふ可からざる壯快の所有之候と、ゴールドンも猶若かりき。

此役ゴールドンは戦功によつて、同盟國の佛蘭西政府よりレジョン、ドノール勳章を受けぬ。然も更に貴き勳章は、同僚上官間の公論なりき。ジョーインズ將軍の報告書中にゴールドン中尉の勇壯なる働を擧げ、先例あらば昇進す可きものなりと推薦し、また戦場に於て毎にゴールドンの働を

目撃せるチエスニー大佐は評して曰く、

工兵の一小士官たる下賤の地位にありて、ゴールドンは上官の注目をひきぬ。精力あり活潑なるが爲のみならず、すぐれて軍事の伎倆を示せるが爲なり。即ちセバストーホルに對する塹壘の邊にあつて發達せる其伎倆——敵の動靜を察知するの妙は到底他士官の及ぶ能はざる所なりき。我儕は毎々彼を遣はして露人の運動を偵察せしめたり。

要するにクリミヤの一年はゴールドンを鍊りぬ。火は金を試し、事は人を試す。到底好士官となるの見込なしと教師に罵られたる當年の士官生徒は、實地の試験場に臨むで、クリミヤに雲集せる青年士官中にも有數の好成績を擧げたりき。

斯くてクリミヤ戦争は終りぬ。戦争の結果、露國はダニエーブ河口に接するベツサラビアの地を割くことゝあり、従つて此方面に於ける國境

改定の必要起り、關係諸國をめぐり、委員を出し、が、ゴルドン中尉はクリミアの成績すぐれ殊に測地に長せるの廉を以て、特に撰拔されて英國委員補助となり、クリミアより直ちにベッサラビアに赴き、約一年が程地圖更正境界劃定の事に従ひぬ。在任中の成績また殊にすぐれたれば、任果つるや更に小亞細亞のアルメニアに赴き委員を助けて同地に於ける露土境界の劃定に従事す可き命を受けつ。歸心矢の如きゴルドンは電報にて辞したれ共、其筋よりゴルドン中尉は是非共赴任す可しとの返電來れり。ゴルドンに代る可き適任者は容易に發見されざりしなり。ゴルドン是非なくアルメニアに赴き、また面倒なる劃界の事業に就きぬ。閑にはアララツトの山にも登れり。さて在任約七ヶ月にして、暫時英國に歸り、またアルメニアに赴きて任にある九ヶ月、一八五八年十一月任全く果て、いよいよ本國に歸りぬ。廿二歳の冬クリミアに出征して、二十六歳の秋に歸る。此間四年、其一年は戦争に過し、三年はバルカ

ン半島及びアルメニアを乗り廻りて異郷の風物人情を見、さまざまの人に交り、殊にアルメニアに於ては全く歐人とかはれる半開種族の氣風を呑込むの機會を得たり。体は瘠せ、たれども鐵を鍛ひたる如く健やかに、面は鬚を生じ、智見はたれどなび、最早出征當時の乳の香猶残れる青年士官にあらずして、毅然一個の人となれり。

歸國後はケントのチャタムにありて野戦堡壘教官となり、また副官となり、一八五九年四月工兵大尉に進み、而して一八六〇年七月清國出征の命を受けぬ。



## 第三章

## 清國出征

今や余輩はゴルドンの足跡を趁ふて支那に移る可き時となりぬ。支那問題も久しきものなり。近今のトランスヴァール戦争と共に十九世紀の二大不義戦として永く英國史の汚点たる可き對清鴉片戦争の起たるは、一八三九—一八四〇年の際にして、ゴルドンは猶十歳未滿の童なりき。斯戦争の結果は一八四二年の南京條約となつて、清國は香港を割き、上海廣東等五港を開きぬ。即ち支那問題が世界問題となるの端緒にして、清國を開くと共に其瓦解を促したる發頭人は終に英國に歸せざる可からず。斯く清國は力屈して地を割き金を納れたるも、墳墓の念

鬱積して禁じ難く、終に爆發して一八五六年廣東地方に於ける排外運動とあり、廣東總督南京條約を無視して外人の廣東居住を禁じ、英國旗を掲げし汽船に踏み込みて乗組の清人を押へ英國旗を水中に投げ棄つれば、清民も競ひ起つて洋館を焚きぬ。然も弱者の怒は即ち強者の乗ずる所、廣東事件はたま／＼英佛聯合對清戦争（一八五七—一八五八年）を惹起す理由とあり、廣東陷ち、總督捕はれ、次で太沽砲臺の陷落となり、果ては一八五八年六月の天津條約となり、清國は南京條約を更めて更に牛莊外四港を開き、英佛政府に各二百萬兩の償金を拂ふこととなりぬ。此はゴルドンが小亞細亞の山地に露土境界劃定に従事せる程の事なり。

外に押強き白人あり、内に憤激せる輿論あり、兩者の間に板挟みとありて恰も我幕末當局者の地位に立てる清政府は、天津條約をば締結したるも、素より釋然たる能はず。天津條約批准交換の爲め北京に赴かんと

して、一八五九年六月英佛二邦の使節白河口に到るや、太沽砲台は砲口を見はして、使節の進行を拒みぬ。兩使節大に怒り、護衛艦を進めて砲台を陥れむとせしに、彼太沽附近の遠淺に進退自由を得ずして敗北を取り、即ち上海に引揚げて各本國に其旨を急報しつ。英佛政府はこゝに再び問罪の師を起し、一八六〇年七月下旬聯合軍は北塘河口より上陸して終に白河砲台を占領し、八月下旬には英佛兩國の國旗天津に翻りぬ。所謂歴史は繰りかへす鴉片戦争より最近列國對清交渉に到るまで、清國外交史は常に同一頁を反覆せるなり。

英國はます／＼兵を發して清國に向はしめぬ。此増遣軍中に加はりたるゴルドン大尉は、七月に英國を立ち、香港に着してこゝに太沽砲臺已に陥落したるの報に接しぬ。九月天津に到れば、聯合軍は已に進むで通州の附近にあり。是より先き太沽陥落に膽落ちたる北京朝廷は、匆惶和議を申込み、休戦媾和の談判にかゝりたるも、甚だ要領を得ず、加ふるに

表面和を乞ひつゝ、實は盛に兵備を修めて其情測られざる者あるより、聯合軍は終に北京進軍を始めぬ。清廷再び和を乞ふ。聯合軍は即ち委員を通州に遣はして談判せしめしが、歸途一佛人と滿兵の間に喧嘩起り、其結果清將僧格林秘は英佛談判委員の一行廿七人を捕へて北京に送致し、圓明園に禁錮して非常の虐待を加へぬ。此報聯合軍に達するや、英佛大使赫焉として怒り、媾和談判は北京城壁内に於てす可しと清廷に通知し、全軍を警しめていよ／＼合戦の用意をなさしめつ。ゴルドン大尉は恰も此時を以て聯合軍に來り投じぬ。

斯くて聯合軍は行く／＼僧格林秘の兵を破り、十月六日には已に北京城外に押寄せて、安定門前に主力を集め、一面清廷に向ひて十三日の正午迄に開門せずば、直ちに砲撃を始む可しと通知し、一面急に砲壘を築きて開戦の準備をなしぬ。ゴルドンは工兵大尉として砲壘築造の監督に非常の多忙を極めしが、壘成りて間もなく、十二日の夜半に到り清政

府は終に門を開きたれば、聯合軍は一彈を費やさず直ちに入りて北京を占領したり。是より先き清帝は聯合軍寄すと聞いて熱河に蒙塵し、恭親王踏みど、まつて北京朝廷を代表し、談判の衝に當りしが、たましく狡猾ある露國大使イグナチーフの双方に恩を賣りて斡旋するあり、清政府と英佛兩大使の間に北京條約の締結こゝに成り、清廷はさきに圓明園に錮したる英佛談判委員一行の生存者十七名を引渡し、死者に對して一千六百萬兩の償金を拂ふととなりて事局は一と先づおさまりぬ。然もれさまらぬは聯合軍の胸の中なり。今に始めぬ清人の不信不義、殊に休戰の旗を無視して、神聖なる使者の一行を拘幽し、猶其上に無慘ども何ども云ひ様あき虐待をするとは何事ぞ、其恨決して忘る可からず、此妄狀決して看過す可からず、此方の腹慰せ、彼方の見せしめには、如何せば可ならむ、彼一行の幽されしは圓明園―圓明園を燒拂へどの號令は聯合軍喝采の中に下されつ。佛軍先づ入りて奪掠を始め、英軍之に

次ぎ、斯くて火は圓明園にかゝりて黒煙雲の如く遙かに北京城を壓せり。時に十月十八日なり。ゴルドン家書の一節に曰く、

私共出で、圓明園を奪掠し、然る後盡く燒き拂ひ申候、四百萬磅かけてももとの通りにはあるまじき非常に貴重なる品物をば亂暴至極に破壊致し候。私共は分捕賞金として人毎に四十八磅の餘を得申候。私は別人程には得申さず、併し此は吾ながらよくしたりと存候。D―の如きは、十六志にて獲たる一連の眞珠翌日五百磅！にて賣り申候。私共が燒拂ひし場所の莊嚴美麗は中々想像も及ばぬ位、之を燒き拂ふは胸いたく相成候。

兎に角宮殿は大なり、時間は促る、仔細に奪掠する暇も無之様なる次第にて、夥しき金の裝飾も眞鍮の積りにて燒き棄てられ候。實に軍隊の規律も何もあつたものでは無く、皆々氣違ひの様になりて分捕仕候……………此離宮の莊麗、佛軍の大亂暴は、御思案に及ばぬ程に候。帝座

及び其室は、驚く可き彫刻を施したる黒檀をもて張りつめ、萬種萬様の  
の大鏡、自鳴鐘、袂時計、人形つきの自動樂器、あらゆる見事の陶器磁器、  
あらゆる色絹、刺繡物の類は山また山をなし、彫刻したる象牙屏風、珊  
瑚屏風夥しき財寶等、我井ンゾル宮にて御覽になる様な莊麗と開化  
とはこゝに備はり居申候。佛軍は何もかも無暗滅法に粉碎致し候。乱  
暴狼籍の模様は實に私の筆に難及候。

所謂文明も皮二重、復讐懲罰の名の下に聯合軍は火つけ強盜の舉動を  
行へるなり。

圓明園の燒拂は一八六〇年の十月なり。其十一月に聯合軍は冬營の爲  
め天津に引揚げ、翌年一部の駐屯軍をどめて餘は盡く北清の地を引  
き拂ひつ。ゴルドン少佐(註所謂北京戰役の功に依てゴルドンは心に  
あらわぬ勳章を受け程なく工兵少佐に進みぬ)は駐屯  
英軍の工兵監として一八六二年の春まで天津に滞まりぬ。此の間閑を  
偷むでは、しばし四近の地理風俗を視察せり。一八六一年の十二月に

は、鶏卵氷る寒を冒して、他の一士官とともに、通辯の支那少年一人連れ、  
萬里の長城見物に行き、北京の西北二百哩なる宣化府より、長城に沿ふ  
て大同府に到り、太原を経て歸りぬ。此行獨り長城の工事の工兵少佐の  
専門眼に興味深く研究されたるのみならず、地形を観察し、露領より北  
清に通ふ道路の如何を視察するなど、得る所少なからず。太原府に泊せ  
し時、宿の主人無法に宿料を貪りたれば、此は事面倒になるべしと見て  
とりたるゴルドン少佐は先づ荷物の車に通辯の少年を添へて先發さ  
せ、餘程行きたる頃を計りて、相當の宿料と思ふ程の金額を出せしに、主  
人頗として受取らず。馬にのらむとすれば、大勢立ちかゝりてのらしめ  
ず。然らば官司に行きて是非を決す可しとて、兩士官は馬をひきつゝ、大  
勢に取まかれて官司へど行きけるが、門近くありたる頃ゴルドン少佐  
は同伴の士官に胸してひらりと馬に打乗り、呀と云ふ間もなく馬首を  
引めぐらして一散に逃げ出せり。欺かれたりと主人は宙を飛び追ひ

かけたれど、洋鬼の馬の足早くして、終に及ばず、足すりして口惜がりしも笑止なり。

北清の地にゴルドン少佐が斯く探險旅行をせしめて退屈をまぎらせる間に、南清には長髮賊の勢焰また熾んに燃へ上りぬ。由來南清地方は革命の苗床、而して滿清の社稷を危ふしたるは、長髮賊の乱に過ぐる者なし。首魁洪秀全はもと廣東の落第秀才、米國の一宣教師に私淑して耶穌教の大意を聴けり。身生の不遇に滿々の不平あり、野心を懐いて久しく時を睨ひけるに、恰も好し鴉片戦争以來滿清政府の鼎大に動き加ふるに南清地方頻年年飢へて民は官司の稅政に苦み、乱を思ふの人心宛ながら枯薪の火を待てる有様なれば、洪は獨り笑みして次第に黨與を集め始めぬ。總じて革命運動の恐る可きは宗教熱を加味したる時にあり。斯南清のマホメットは基督教を捏ねて別に一種の宗旨を作り、自ら耶和華上帝の子にして耶穌の弟と稱し、上帝を天父、耶穌を天兄と稱へ、眞

言實語を作つて新舊約聖書に擬し、其教に入る者は一切姉妹兄弟を以て之を呼び、萬人平等、財産共有、滿清政府を覆して有明亡國の恨を報じ民を暴虐より救ひ第二の救世主たる可き旨を宣言したれば、斯宗教的政治運動は、夥しき味方を得て、終に一八五一年六月(清曆道光三十年)廣西省桂平縣の金田邨に兵を擧げぬ。洪時に年三十八、其徒皆辮髮を廢して髮を長ふするを以て、長髮賊と稱せらる。斯くて長髮賊の勢は頓に猖獗を極め、長江に順ふて東北に押出し、一八五三年(咸豐三年)南京を攻落し、數年を出でずして城を陥る、大小六百、蔓延十六省に及ぶ。成功は益ます其膽を大にし、洪は都を南京に定め、朝廷を立て、國號を太平天國と稱し、自ら天王と號し、親戚股肱を封じて東王、西王、忠王、英王、侍王、天徳王などの稱を與へ、先づ清朝を倒して果ては世界を統一す可き使命を帯びたりと宣言し、南京宮城の門前に英佛露其他西洋諸國をも其一隅に小嶋の如く畫きなしたる太平天國の一大地圖を掲ぐるに到れり。滿

清政府は全力を舉げて其勦討にかゝりぬ。曾國藩、曾國荃、左宗棠、劉坤一、李鴻章、劉銘傳、湖林翼以下の諸名臣が戮力の功空しからで、征戰幾年を経て洪の勢力は揚子江下流一帶の地に押つめられしが、北清に對英佛葛藤起りて、北京朝廷の注意専ら其方に向へる間に、長髮賊の勢また振ひ、おさく、上海の外人居留地までも迫り來らむする勢を見せれば、北清に駐在せる英佛聯合軍の大部隊は速やかに上海に下りて劇戰數次敵を上海の三十哩以外に追拂ひぬ。ゴルドン少佐も一八六二年の五月に天津より上海に赴きて卒先戰鬪に従事し、敵已に退きたる後も上海より三十哩四方の地を残る隈なく駆け廻りては、脚手の如き河川運河市邑の布置形勢を視察測量して、圖などひける折から、突然托されて常勝軍の指麾を握ることゝなりぬ。

一八六〇年英佛聯合軍が北京に迫れる程の事なりしが、髮賊の勢焰また燃へて上海危くなりたれば、同地居留の外人は清官と相計りて匆々に土兵を募り、米人ワアドに指揮を委ねたり。ワアド將才あり、よく戦ひ、新募の兵を率ゐて常に勝を制したれば、北京朝廷其勦を嘉賞して、常に常勝軍の名を與へぬ。不幸にしてワアドは戰没し、米人ブルゲギン代りたれども、浮浪者の本性、不法の行ありて解雇され、其後任の撰擇を江蘇巡撫李鴻章より在清國英軍司令官スタエリー將軍に依頼し來れり。將軍即ちゴルドン少佐を推薦して曰く、セバストーホル、このかたゴルドンは毎に忠實にして信頼す可く、且毎に成功せり、北京に於て上海に於て彼は恰も目下必要の資格をば具ふることを示しぬ、此人未だ司令の任に當りしとなきも、必ず其任に堪ふるに到らん、今日の場合此人を措て他に適任者を知らずと。然も英軍の將校を他國に貸與するには、先づ本國陸軍省の免許を受くるの必要あり、而して棊子を握る前に先づ盤面の觀測を必要とせるゴルドンは其爲しかけたる江蘇の測地を終へむと欲したれば、かたく、以て一時常勝軍の指揮をホルランド大尉

と云ふに委ぬることゝあしつ。大尉戦ふて屢々利を失ひ、常勝軍の威名地に落ちむとす。ゴルドンの観測もはゞ終を告げ、本國陸軍省の免許も來れり。即ち一八六三年三月廿四日、松江(上海の南方二十哩)に到りて、常勝軍の指麾を握りぬ。時に年三十一。

ゴルドン少佐が清政府の爲めに常勝軍を指揮することゝなりたるに ついては、英國軍人は唯英國の爲めに戦ふ可きもの也と謂へる軍人氣質一徹の其父は固より、洪秀全が一種の基督教を看板にかけたるの故をもて此に同情を寄せ、其運動を以て純然たる清國の改革救済の運動と做したる本國の人々は、ゴルドンを以て漫りに滿清政府の爪牙とありて折角の革新運動を殺す者として頻りに非難を下しぬ。然もゴルドンは實際洪等が當初の宣言に似もやらず、暴横淫虐到らざる所なく、其過ぐる所殆んど人煙を絶つの有様を見、一日其命脈を長ふするは、一日民の疾苦を長ふする所以なるを思ひぬ。其家書に曰く、

私事熟考の上、斷行仕候。何人にせよ。此叛亂鎮定に盡力するは即ち仁事を成す所以にて、亦大に支那の開明を促す所以とも相成る可くと考へ申候。私も決して向ふ見ずのやり方は致し不申、不遠英國へ歸り可申と信じ候。………兎に角私にして若し指揮を引受け不申候は、常勝軍も屹度分散可致、而して叛亂も猶幾年か其災をつゞけ可申と存じ候。(私引受けし上からは)最早其様な事は無之と信じ候。………私此たびはよい仕事を致すかと存申候。

ゴルドンの心事實に如斯なりき。

ゴルドンが常勝軍の指揮を引受けたる時は、髮賊の亂發頭より已に十有三年を経過し、勢や、衰へたれ共、勢力の根據は猶江南數省に跨り揚子江は官軍の手にありたれ共、下流江南一帶の地は僅かに上海附近些少の地を殘して髮賊の手にあり。南京蘇州杭州太倉崑山金壇を初めとし、富裕肥沃の地はよく其命脈を養ふて、やゝもすれば四方に蔓延せむ

とす。其地は水路縦横織るが如く、其城市は要害堅固にして攻むるに易からず。利敏き上海の外商がさきに續々兵器彈藥を賣渡したる爲め彼方は兵力猶熾んに、此方は常勝軍すらやゝもすれば敵に同情を寄せむとするあり。然も胸中に成竹あるゴルドン少佐は李鴻章に告げて曰く、江蘇の賊軍を一掃せむこと十八ヶ月を出でざる可しと。

## 第四章

### 長髮賊征討 (一)

一八六三年三月(清曆同治二年)ゴルドン少佐は上海より松江府に赴きて、初めて常勝軍の指麾を握りぬ。常勝軍も近來の敗北に沮喪し、加ふるに從來無規律不体裁髮賊其者と擇ぶ所なき有様にありたれば、新來の主將はさしより軍隊改造の必要を感じ、號令を嚴明にし、規律を正し、一定の俸給食糧を給與して随意の分捕を禁じ、要するにゴルドン一たび將とあつて常勝軍は忽ち其面目を一變せり。總じてゴルドンが將麾を握れる間、常勝軍の兵員は三千乃至五千、盡く清人にして、下士官も盡く清人、唯約一百五十名の士官は皆歐人なりき。兵卒下士官は皆暗色の



絨地の洋服に緑帽をいたゞき、英國製の滑口銃及施條銃を持ち、英式英語の號令によつて運動し、大砲は野砲及攻城砲を合せて五十二門何れも大口徑のもの、戦地は河川溝渠蛛網の如き土地あれば、武装せる小蒸氣小砲艦ありて其用に供せられ、大河には浮橋架設兵あり、小川には板橋を架するの設備あり、當時江蘇には程學啓、李鴻章、李恒嵩其他の官軍征戰に従事し居たるも、常勝軍は一團獨立の游擊隊にして、何れの節度もも受けず、士卒の黜陟制裁、軍隊の行動一に主將の手にあり、任を受くるの初め、ゴルドンは李巡撫どかたく右の條件を約しぬ。

ゴルドン已に常勝軍に將たり、先づ手初にかけはなれたる地方を攻めて、敵を驚かし、官軍の元氣を引立て、部下の信任を博するの必要を感じ、三月下旬歩兵一千人砲兵二百人を二隻の汽船に搭載して、五十哩の北に當る福山縣に向ひぬ、福山の西南十哩に常熟昭文縣あり、賊の忠王李秀成之を圍む甚だ急、ゴルドンは常熟の圍を解かんと欲して、所謂圍魏

救趙の計を用ゐて先づ福山に向ひしなり、四月三日福山に着して、附近に籠れる官軍の牽制射撃の下に、難なく敵前上陸を終へ、夜に乗じて砲を据へつけ、翌日三時間の砲撃の後突貫して一舉に福山を陥れぬ、死傷僅に八名、福山已に落ちたれば他の官軍と共に、直ちに進んで常熟の圍を解きぬ、初陣の一勝、常勝軍新司令官の威名頓に振ひ、清帝勅して、江蘇省總兵(註少相常官將)の位を授けぬ。

常熟の圍解けたる後、ゴルドンは常勝軍を率ゐて一と先づ松江府の本陣に引揚げつ、地理案内はよく知つたり、作戰の經畫もはゞ決する所あり、即ち從來の官軍が爲せる如き小攻小守は到底賊勢剿滅の手段にあらず、一撃深く其肺腑を衝かざる可からずと思惟しぬ、而して南京にツイで賊の根據地は、蘇州府なれば、之を攻落すは賊勢の瘡隨骨を挫く所以、然も蘇州の地は水路四通八達の要衝にありて、要害甚だ堅固に、敵の主力は此處にあれば、蘇州を陥れむには、先づ其枝葉を茹つて然る後其

幹に及ぼさざる可からず。さればゴルドンは髮賊の、武庫にして彈藥製造所たる崑山の要害を先づ取らんと欲せる折から、飛報あり、太倉の賊僞つて降を乞ひ、官軍の一隊城中に入るや直ちに門を閉ぢて之を掩殺せりと。是れ速かに撃たざる可からず。太倉は松江の北三十哩にあり。太倉——崑山——蘇州と通せる街道の要衝なり。四月廿九日ゴルドンは常勝軍三千人を率ゐて電馳太倉に赴き、南方より西に廻りて、崑山街道を扼する外郭を奪ふて敵の通路を絶ち然る後砲楯を設けし巨砲を進めて盛に砲撃を始めぬ。太倉には一萬の敵兵あり、其砲兵士官には英佛米の浮浪ありて、是までは寄手の官軍却て逆襲に困むの有様なりき。然も今やゴルドンの率ふる常勝軍は到りぬ。既に巨砲をもて城壁の一部を毀ち、突貫之につき、賊軍殊死して防ぎたるも、ゴルドンが味方の突貫隊の頭上越しに放たしめし巨砲彈は其効を奏して、太倉終に陥りぬ。常勝軍が松江の本陣を出でしより、四日、目なり。此役常勝軍の死傷二百五

十に上りぬ。然もゴルドンは捕虜の七百名を取めて其欠を補ひたり。太倉の一勝、常勝軍の名再びあがり、主將ゴルドンの威は敵味方に振ひぬ。ゴルドン家信に認めて曰く、清國の諸將も大きに喜こび、常勝軍の事をさましく譽めそやし候。私事も今や總兵と申す官に相成、大分勢力も出来申候。斯様な事は別に左程有り難くも無之候。得共、兎に角、常勝軍の司令官とありしは吾ながらよくしたりと。信じ申候。若し叛徒の殘忍なる有様を御覽なされ候は、あなた方も御同意被遊事と存じ申候云々。殘酷は獨り髮賊に止まらず、官軍も太倉の陥落後は頗る殘忍の舉動あり、ゴルドンまでも英國人士の非難を受けぬ。其實ゴルドンは極力寛仁の處置を主張したれど、殘忍は御互の官軍の諸將は更に客將の諫言を聽かざりしなり。

ゴルドン已に太倉に勝ちたれば、息をもくれず直ちに賊を追撃せむと欲したれ共、從來戦へば即ち分捕し、分捕すれば即ち休息して分捕物の

處置をするに馴れたる部下の兵は、勇は勇なれども愆に目のなき土兵の常として、太倉の戦にも主將の目を掠めて分捕物をあしたる結果、例の休息を迫りて已まざれば、業を沸せるゴルドンも是非なく松江に引揚げてこゝに三週餘の休養を命じつ。五月下旬、歩兵二千三百、砲兵六百を引率して、さきを目させる崑山に向へり、崑山は太倉と蘇州の中間にあり、東の方太倉へ十哩、西の方蘇州へ二十哩、一高丘の腹に據り、城壁厚く、一百二十呎の濶濠ありて之を繞り、約一万五千の敵兵之を守る。然もゴルドンは地形を視察して、其弱點を見破りぬ。崑山より蘇州へ通ふ街道は唯一筋、往々甚だ狭き所あり、街道に沿ふて一帶の運河通ず。水深ふして、小蒸瀛小砲艦を行る可し。此處に兵船を浮べて蘇州街道を扼せば、崑山の血管は塞がれたるなり。即ち程學啓等七千の官軍及部下常勝軍の大部隊をして崑山の三方を包圍せしめ、ゴルドンは武装せる瀛船ハイスン號に善射の銃手三百人を載せ、小砲艦數隻を伴ふて、迂迴して蘇

州街道に沿ふ運河に出で、蘇州崑山のおよそ半途と覺しき一村を奪ふて此處に三百の銃士をといめ、守を失へる賊兵の蘇州の方へ逃ぐるを追撃する程に、其とは知らぬ蘇州城の賊兵が崑山の急を救はむと街道を驀地に駆け來るにはたと行逢ひつ。此處ぞと砲艦瀛船より大小砲銃を打出したれば、狼狽したる竄兵と周章したる後詰の兵と狭き一筋街道に芋の子を攪る如くに混雜し、砲銃の雨を浴び、水に落ち、互に踏み合ひして、死傷其數を知らず、終に大崩れに崩れて蘇州を指して敗走せり。ゴルドンは瀛船砲艦を指揮し、逃ぐるを追ふて落日の頃直ちに蘇州の城門近く押寄せ、一發の砲丸を後日見參の引出物に城中に射込みて、棍を轉じて崑山の方へ引還しぬ。時に日暮れて夜は墨よりも黒きに、さきに部下の兵をといめ置きたる村の邊りには火光銃聲頻りに起りて、戦まさに酣なりと見ゆ。崑山の賊軍が夜に乗じて蘇州へ走らんとして、端なく中途の柵に出會ひ、一場の劇戦とはなりたるなり。ハイスン號は他

の砲艦と共に直ちに砲門を開きぬ、思はぬ障礙に出會ひて已に狼狽せる賊軍は、今また紅燈の眼、漁笛の叫喚、小山の如き黒怪物の間中より夥しき砲彈を吐き出すに膽落ち氣死し、息を切つて崑山へと逃げ戻りぬ。而して此日の戦に勢挫けし崑山の賊は、翌日數時間の砲撃を受けて、終に降りぬ。此役髮賊の死者五千人に上れりと云ふ。

崑山の奇捷はいよ／＼、ゴルドンの名を敵味方に轟かしぬ。然も困難なるは客將の身の上なり、ゴルドンの功名高きにつれて、嫉妬も多く、程學啓の如きしば／＼、ゴルドンと争ふて、過失と稱して常勝軍に發砲するに到れり。此猶可あれ共、部下にもまた紛擾あり。崑山は要勝の地、水路縦横、蘇州太倉常熟松江皆一輩を浮て到る可し。ゴルドンは此處に根據を据むと欲せり。然も松江の本陣に歸りて一勝毎に優游をきはむるの例をなせる常勝軍は、多く之を好まず。令下るや部下の砲兵先づ騷擾を起して、隊伍に就かず、士官を砲殺せんと脅嚇し、檄文を掲ぐるなぞ容易な

らぬ形勢となりぬ。ゴルドン更に騒がず、事の起りは下士官(註前に述べし人なり)にある可きを猜察し、盡く砲兵下士官を整列せしめて、檄文の起草者を問ひぬ。皆知らずと云ふ。知らじとあ、知らずば汝等の中五人毎に一人を銃殺す可し。皆大に叫ぶゴルドン。其中の尤も烈しく叫ぶ一人を手づから引ずり出し、側に立つたる二人の歩兵に命じて其場に銃殺せしめ、餘は盡く禁錮し、一時間内に檄文起草者の名を告げずば、いよ／＼五人毎に一人を銃殺す可しと云ひ渡しぬ。思の外に手強き主將の態度に、一同屈して檄文の起草者を告白するを聞けば、果してさきにゴルドンが銃殺せしめたる者なりき。然も危険あるは規律なき他邦の民、しかも勝誇りたる兵士に規律を課する事なり。ゴルドンが下士官一名銃殺せしめたる其夜、三千の兵士の二千は脱走して翌朝常勝軍は僅に一千人となりぬ。ゴルドン更に動せず、崑山の陥落に捕虜となりたる髮賊二千人を抽いで直ちに其缺を補ひつ。支那人はと融通の利く民はなし。昨

日の變賊、今日は官軍となりて、誰も怪まず。賊となりてさまざま艱苦窮乏を経たるだけ、驕慢ある従前の兵士に比して新兵は更によき兵士となりぬ。騷擾は獨り兵卒下士官に止まらず、白人のみを以て組織せる士官の中にも、互に嫉妬あり、隠謀ありて、ゴールドンもいたく制取に困じぬ。曾て一士官を重用せる時、之に服せざる多數の士官連署して辭職を申出でしが、ゴールドン平然と其辭表を受納したれば、案に相違の彼等は今更主將の毅然たる態度に一驚を喫し、勿々に其過失を陳謝しつ。ゴールドンも復職を聽して其罪を問はざりき。要するに常勝軍の兵士下士官より士官一同皆主將ゴールドン少佐の獨り戰術に長けし名將たるのみならず、其人物の信賴す可く畏敬す可きを飽くまでも知り得て心より服しぬ。獨り常勝軍に止まらず、李鴻章以下凡そゴールドンと交渉したる程の者は皆彼に畏敬を拂ひぬ。

崑山に駐まりて、兵を練り、兵を養ふこと二ヶ月、其大目的たる蘇州省城

を攻むる前に先づ其股肱を截ちて之を孤立せしむるの策を以て、七月下旬ゴールドン少佐は常勝軍を率ゐて蘇州城の西南十哩に當る嘉湖を攻めて之を陥れ、更に南方三哩の吳江を攻めて之を略しぬ。今や蘇州城の四近は大半官軍の手に落ちて、敵の根據地は心易ふ攻め得らる可き時となれり。然も重ねて困難なるは客將の位置なり。ゴールドンの勢名隆々として日に盛なるにつれて、内外の媚嫉甚しく、白人仲間にもゴールドン排斥の隱謀流言頻に行はれ、ゴールドンの知人にも役無き事に異邦の將となつて盡瘁するの不得策を鳴らす者あり、加ふるに程學啓等が約に背いて降伏の賊兵を殺しゴールドンの言を反故にするあり、一定の俸給を約して纔かに部下の侵掠を制する所に清政府が兎角違約して其仕拂を怠るあり、内外上下不快心の事夥しく、今は勘忍なり難しと流石血性男兒の腹に据へ兼ね、いよく辭任と心を決して、常勝軍をば崑山にどいめ置き、單騎上海に歸りぬ。然るに八月三日上海に歸着して見れ

ば、容易ならぬ事こそ起りたれ。ゴルドン以前に常勝軍を指揮し不都合の行爲ありて解雇されし米人ブルゲギンと云ふ者、ゴルドンの聲名高きを妒み、北京に行きてゴルドンを擠し再び常勝軍に將たらむと隠謀せしが、流石人を識る李鴻章がゴルドンの功績拔群上下の信任極めて厚きを述べ決して他人を以てゴルドンに代ふ可からずと奏したる爲め、事終に成らず、ブルゲギンは隠謀失敗の腹立まされに、上海に歸るより早く小蒸瀛一艘を奪ひ、歐人の浮浪三百人を引率して蘇州の髮賊に投じたるなり。此は容易ならぬ事あり、惡黨と云へ、ブルゲギンは驍勇戦を善くする者、浮浪とは云へ、三百の歐人を率ゐて蘇州の賊を援けなば、此は由々敷大事なり。常勝軍もゴルドン無くてはまた賊に走るまじとも限られず、兎に角、此大事の時に、臨み一身の不快を顧みる可きにあらずと、ゴルドンは忽ちに心を決し、直ちに馬首を引きめぐらして、また崑山に馳せかへりぬ。

## 第五章

### 長髮賊征討 (二)

崑山に引返し見れば、形勢甚だ穩かならず、即ち攻城砲を一と先づ太倉まで引揚げ、吳江に援軍を派して賊の來襲を防ぎ、暫らく守勢をとりて銳を養ひ、九月下旬程學啓等の官軍と共に進むで蘇州城に迫りぬ。

蘇州は由來漢土の樂園と唱へられて、風物絶美、西に太湖の水あり、東南西北に金鷄湖沙湖あり、城壁の周圍十二哩、城形は長方形にして、六大門は湖に向ひ、六大門は陸に面し、大小運河縦横に通じて、舟船輻輳、魚蝦活潑、地肥えて家富み、刺繡絹織物の美、紅燈酒綠の賑合、宛ながら東方のニヌたり。髮賊の之に據る既に四年、官軍之を克復せんと苦心百方すれ

ども、其甲斐なくて今またゴルドンを擾はすことゝありぬ。城中には慕王、納王、康王、比王、寧王等約三萬の兵を率ゐて之を固守し、またブルゲギンが三百の浮浪白人を帥ゐて城中にあるあり、而して無錫には蘇州の急を聞いて南京より來援せる忠王李秀成が四萬の大軍を擁するあり。此方は常勝軍及程學啓等の官軍を合せて約一萬四千。さればゴルドンは斯二萬未滿の軍を以て、三萬の敵を圍み、同時に四萬の敵を牽制せざる可からず。唯幸なるは、ゴルドンがさきに施せる荊枝枯幹の策行はれて、蘇州は已に孤立の地にあり、加ふるにゴルドンが將麾を常勝軍に握りしより官軍連捷して蘇州の賊も肝胆寒く、而して忠王四萬の軍も南京の形勢危きが爲めに回顧の患あるを免れず。九月二十九日ゴルドンは城の東南太湖の鎖鑰たる寶帶橋を略取し、翌日家郷に書を送りて曰く、此次の次、若くは次の次、の郵便には、必ず蘇州陥落の御報知を致し、申す可しと。

こゝに蘇州の賊軍に投じたる米人ブルゲギン以下浮浪三百名は、非常の優待を期し居たるに引易へて、到れば兎角に猜疑の眼もて睨まれ、加ふるに困苦窮乏甚しく、今更其輕舉を悔いて、早くも二心を生ずるに到りぬ。寶帶橋頭一區の地は、宛ながら一種休戰地の如く、城中の歐人と寄手の中の歐人と戦餘の閑に此處に出會しては烟を吹き語を交へあそぶるに、城中の歐人皆降心ありと云ふ。ブルゲギンも亦ゴルドンに面會を求めぬ。元來浮浪の本性、其情固に測られざるものありたれ共、心を推して敵の腹中に置くゴルドンは其申込に應じて會見を許しぬ。初度の會見に於て、ブルゲギンは自身及部下の白人一同其罪を問はざるの保証だにあらば、城を脱して降伏す可しと云へり。ゴルドンも至極其申條を尤もなりとし、其一部は常勝軍の士官に採用す可く、餘は無事に支那を去る様計らふ可しと答へぬ。然るに再度の會見に於て、人を識らざるブルゲギンは浮浪の本性をあらはして、咄々怪事の申込をなしぬ。其は

他にあらず、天下の英雄は君ゴルドンと吾ブルゲギンなれば、二人協同して蘇州城を奪ひ、官軍も髮賊も共に之を撃破し、二万の軍を組織して直ちに北京に進み、滿清朝廷を覆して、新帝國を建立し、ブルゲギン皇帝となり、ゴルドンも副皇帝となりむと云ふにあり。あまりの馬鹿々々しさに、ゴルドンも呆れ果て、取り合はざりしが、俠骨愛腸に満ちたる彼は猶ブルゲギンに與へし一諾を忘れず、後程なく城中の歐人がかねて定めし手筈により突貫の体にて脱奔し來れるに際し、ブルゲギン外數名は逃げねくれて城中に押へられたれば、ゴルドンは手づから一通の書を認めて蘇州城中の慕王以下の首魁に送り、ブルゲギン等を放たんとを求めぬ。書中に云ふあり、

其意にあらずして戦はしめらるゝの人は、獨り劣惡の戰士たるのみならず、即ちまた危険なる者なり……若し蘇州に數多歐人の殘留するあらば、敢て諸王に請ひ問ふ、其欲するがまゝに去らしむるは、寧

ろ諸王の利にあらざるなきを得ん乎……諸王或は謂はむ、刎首せば即ち可なりと、然れども斯の如き罪過は早晚其果を結ばざるを得ず。余が部下の軍に於ても、將校士卒往來唯其意に任ず、時に不便を感ずと雖も、之が爲に未だ曾て内顧の患あることなし……王請ふ、渠曹が王の内情を漏らさんことを憂ふる勿れ。王の勢力、兵員、砲數は、余久しく已に之を知る。また渠曹の通告を須ひざるなり。

此書に接したる蘇州城中の賊魁は、慇懃の一書を以て之に答へ、即ちブルゲギンを恙なく城中より放ち、米國領事の手に渡しぬ。ゴルドンは爲にとりなして、刑辟を免れしめぬ。然も後に知れたる所によれば、彼は實に陽に降を乞ひつゝ、實はゴルドンを係蹄にかけむと圖りしなり。數年の後ブルゲギンは復ひが事を仕出來して清軍の手に捕へられ、變死を遂げぬ。清官の報告に曰ふ、渡船覆りてまことに不慮の死を致されたりと、ゴルドンが右の書狀を蘇州に送るや、巨魁慕王は頻にゴルドンの事



を使者に問ひ、ゴルドンを買収する事は出来間敷やと問へり。使者答へて曰く、否。慕王重ねて問ふて曰く、ゴルドン果してよく我蘇州城を陥れんや。使者答へて曰ふ、然。慕王憮然之を久ふせりと傳ふ。

蘇州の外人は概ね出で降りつ。ゴルドンは加勢にもなれば、また往々手足纏ひにもある程等諸將を相手に、一方には南京より來援せる忠王の大軍を防ぎ、一方には蘇州城の東方及南方を扼する外壘を次第に略取して太湖に到り、他の官軍に南方を守らせて、自ら部下の一隊及汽船ハイスン號を帥ゐて城北に向ひ、十一月一日進むで蠡口の營を陥れ(此時突貫隊を率ふる一士官ゴルドンの側に斃れぬ。斯士官はつい其前に頗る怪しかる叛逆の舉動ありけるを、ゴルドンが宥して親しく使へるなり)十二日黃埭の堅壘を突貫を以て陥れ、(斯時ゴルドンの率ゐたる兵員の一部は、一週間前まで髮賊なりし者なりき)數日の後諸將と進むで澹關、虎邱の各營を陥れぬ。今や城の四邊の外壘は悉く落ちて、陸には勝誇

りたる陸兵あり、水には連檣の水師あり、蘇州は全く包圍の中に落ちぬ。李鴻章も蘇州の陥落を目撃せむと上海より到れり。

蘇州城中の賊氣大に沮むと雖ども、強硬なる老慕王の必死と防禦の手を盡すあり、落ちむと欲して未だ容易に落ちず。十一月二十七日ゴルドンは城東に廻りて、自ら二隊の兵を率ゐ、夜襲を試む。殊死隊已に外壘を突貫し、本軍まさには従はむとする時、突然敵の放ちたる榴彈銃雨の如く下りぬ。ゴルドン直ちに應砲を命じ、自ら殊死隊の先頭に立て、呼喚して胸壁に突進す。彼方は老慕王己れ真先に兵を指揮して必死に防ぐ。ゴルドンの左右には士卒紛々と斃れて、後陣續かず。三時間餘の激戦の後、ゴルドンは切齒して退きぬ。然も蘇州の陥落は今短少ある時日の問題となれり。ゴルドンの夜襲より二日を経て、十一月廿九日の朝城東奠門外の石壘に向つて總攻撃を開始し、ゴルドンの砲兵は盛に石壘の砲撃を始めぬ。壘崩るゝと十數ヶ所、此處ぞと常勝軍は北岸に沿ふて直ちに突

貫し濠を涉り、胸壁を攀ぢ、肉薄して上りぬ。斯朝隙に乗じて城に入りたる忠王及び慕王等萬餘の兵を帥ゐて必死と守りたるも、常勝軍はいよ／＼進んで已まず。例の如く、真先に進むだる。ゴルドンは斯時僅々數名の兵士と共に、覺ぬず深入して、敵中に陥りたるが、素より退くを欲せず、また退く可くもあらず、其まゝつけ入りに進むで、唯有る柵を突貫し、終に石壘に達せる時、やゝ後れたる常勝軍の本隊追ついで直ちに石壘を占領せり。總じてゴルドンが常勝軍を率ゐる、毎に身を以て率ゐ、己れ真先に危険の衝に立つて、部下を導きぬ。客將の身を以て軍事の訓練日淺き異邦の兵を率ゐる、勢斯くの如くならざるを得ざりしなり。戰に臨むに、ゴルドンは劍を佩びず、短銃を携へず、不識庵の如く、唯一枝の竹鞭を執つて向ふ所を指揮するを例としたり。竹鞭の向ふ所、勝利毎に到る。故に人皆稱して「ゴルトン勝利之魔杖」と云ふ。部下の兵士は、主將の毎に陣頭彈丸雨飛の中に立つて然も微傷だに負はざるを見て、殆んど神人の

看を倣し、其魔杖あるが爲に彈丸も彼を傷る能はずと思ひぬ。ゴルドンは實に運強き人なりき。さきに寶帶橋を取れる時、一夕斷橋の欄干に据して、靜かに煙を吹きつゝ、城の方を眺めてありしに、主將の其處にありとも知らず部下の兵士が放てる銃丸二發までゴルドンが坐せる石にあたりぬ。ゴルドン素早く橋を下りて、繫き置ける小舟に打乗り、本陣に歸つて何故に發射せしかを糺さんと、今しも橋を漕ぎはなれたる時、轟然百雷の落つるが如き響頭上に起つて、さきにゴルドンが坐し居たる橋の斷片一時に崩れ落ちぬ。

常勝軍已に蘇州城の死命を制する石壘の要害を陥れたれば、今は支へ難しと忠王先づ遁れ、餘の諸王は降を議せしが、獨り倔強ある慕王は死守説を執りて従はざれば、他の諸王謀つて之を刺殺し、終に城を舉げて降りぬ。時に十二月四日あり。是より先き、ゴルドンは官軍のしば／＼降を殺し暴を擅にするに困じ

果て、嚴しく李程等に談じ、少なくもわが戰場にある限りは、戦はずべ  
 て泰西の法に則り、決して蠻野の舉動ある可からざる由を誓はせ置き  
 ぬ。蘇州陥落の時に臨むでも、ゴルドンは再三再四李鴻章等に釘をうち  
 て、諸王の罪を宥む可き事、決して降者を殺戮せざる事、蘇州降るも堅く  
 奪掠を禁ず可き事等を誓はせ、李の斷乎たる保證を得て賊の諸王に其  
 旨を通じ、自分が常勝軍の將として官軍にある限り決して諸王の身に  
 事わらせじ安心して降られよと保証し、諸王も其旨を領して即ち降伏  
 の條件は成りぬ。いよく降伏の式を行ふ前日、ゴルドンは程學啓より  
 重ねて李が降伏者一同の罪を宥したりと云ふ事を聞いて、やゝ安堵し、  
 其翌日規律を保ち奪掠を禁せん爲め常勝軍を崑山に引揚げ、引返して  
 蘇州城に入り、納王の家に到れば、諸王いよく李に面して城門の鍵を  
 渡し降伏の禮を致さむ爲めまさに馬に上らんとしつゝ、あり、ゴルドン  
 納王を引きのけて様子を聞けば、萬事好都合なりと云ふ。ゴルドン心を

安んじゆる。慕王の埋葬を檢分し了りて、東門に到れば門外運河の  
 對岸に、李鴻章の乗船繫がれて、其邊に官軍大勢何事にや立集ひてあり  
 偶々程學啓出で來り、ゴルドンを見て大に狼狽し、諸王未だ李の許に到  
 らずと云ふ。ゴルドンや、怪しひで、引返へして納王の家に到れば、官軍  
 已に奪掠を始め、勢危ければ、納王の叔父はゴルドンに家眷を保護して  
 其家に到らむことを請へり。ゴルドン諾して、其家に送り届け、出でむと  
 するに忽ち數千の髮賊外庭に群がり、門を閉ちて一夜ゴルドンを出さ  
 ず。ゴルドン未だ諸王の成行を知らず、髮賊も未だ知らず、ゴルドンを人  
 質にして諸王の安全を計らむと欲せしなり。曉に及びて、髮賊を説き、伴  
 へる通譯官を城外に出し、ハイスン號の船長に汽船をまはせ、李鴻章を  
 押へ置け、且崑山の常勝軍を呼び來れと命じぬ。使は中途に官軍に抑へ  
 られて達せず。外には奪掠始まりて外庭に屯集せる髮賊今や忍ぶ能は  
 ざらむとす。ゴルドン辛ふして髮賊を宥めて己を放たせ、南門を出でむ

として官軍の爲め賊軍の歐人と錯られて抑留さるゝこと暫時免れて吾護衛兵の屯せる東門に到り、一面約に従ひて保護の爲に護衛兵を納王の叔父の家に送り、一面李鴻章を抑へむと汽船の到るを待ちぬ。此時ゴルドン未だ諸王の成行を知らず、程學啓不圖來合はしたれば、ゴルドン程が約に背いて部下の奪掠をなさしめたるを散々に叱す。程蒼くなりて去り、砲兵士官ペーリー少佐を遣はしてゴルドンに陳謝し、何も李鴻章の命を奉行したる迄なりと云ふ。ゴルドンペーリーに諸王の所在を問ふ。ペーリー納王の子を連れ來る。彼少年運河の向ふを指して、父も諸王も死して彼處にありと告ぐ。ゴルドン直ちに小舟に乗じて對岸に渡り見れば、中斷横斷脰の如く切りさいまされたる六個の死体其處に横はり、納王の頭顱も梟されてあり。昔から喰へぬ男の李は最初より毫も降王を宥すの意なく、世にも眞實なる面地にて、快よく講和の條件を諾したる時も、實は降らば直ぐに勿ねん心算にて、借こそうまく直性の

ゴルドンを欺き、諸降王をも欺きたるなり。血塗れの六個の死骸を見るより、ゴルドンは潜然として落涙し、勃然として怒り、軍に従ひし初より手にだに觸れざりし一挺の短銃を提げて直ちに李鴻章を追ひぬ。ゴルドンの爲人を知れる老獪の李は蘇州城中に逃れて、潜伏して出でず。ゴルドン追ふて城中に入りたるも、李の所在を知らず。即ち常勝軍を呼びて、隈なく搜索したるも、其甲斐なければ、今は心を決して常勝軍を率ゐて直ちに崑山に去り、麾下に告げて曰く、英國の將校たるものは到底李鴻章等と事を共にする能はず、常勝軍は解散せず、然も在上海英軍總督ブラオン將軍の指揮を待つ可しと、斯くてゴルドンは一面蘇州に於ける降王殺戮及び一般の虐殺に關する、李鴻章の責任につき北京朝廷の審問を促し、一面ブラオン將軍に蘇州保護以外一切官軍に加勢す可からずとの指令を要求し、一兵を動かさずして崑山に屯し、以て一八六四年二月の末に到りぬ。

蘇州の陥落は北京朝廷を雀躍せしめぬ。朝廷は蘇州事件に關する李の辯疏を諒として、肯て之を罰せざりしも、ゴルドンの殊功を嘉賞し、勅して一月一日權授江蘇省總兵戈登に頭等功牌(註、勳一等)並に銀一万兩を賜ひ、常勝軍一同また賞金の賜給あり。ゴルドン怒解けず、部下の賜金は受納したるも、吾勳章賜金は峻拒して受けず。李の使者來り、賜金を盛りたる盃を捧げて其室に入るや、ゴルドン例の竹鞭をどつて使者をたゝき出し、譯文の勅諭に左の裏書して之をつきかへしぬ。

少佐ゴルドン謹ひて奏す、皇帝陛下の御嘉獎を蒙り、感荷に堪へず。惟眞に憾む、蘇州陥落後出來せる事情に因り、ゴルドンは皇帝陛下の御賞賜を拜戴する能はず。故に恭んで陛下に願ふ、幸に聖旨を謝し且辭するを得せしめ玉はんことを。

支那二十四朝の史を翻しても、斯くの如き勅諭の裏書は惟ふに比類を見出し難かる可し。余輩は叙して此處に到りて、斯奇男子を愛するを禁

する能はず。

## 第六章

## 長髮賊征討 (三)

蘇州の出来事に烈火の如く怒りたるゴルドンは、常勝軍を崑山に引揚げ、觀望已に七十餘日に及びぬ。斯間に蘇州を失して大に沮喪したりし賊勢またやう／＼に振ひ來り、官軍の運動はか／＼しからず。部下の將士は閑に倦むでやゝもすれば規律の保ち難からむとするあり。上海の外人を初め、北京政府及び李等もまたゴルドンの再起を促して止まず。一たび手を鋤につけては後を顧みざるゴルドンの本性として、折角やりにかけし事業を半途にさし措くは不本意なるのみならず、近き頃賊の忠王李秀成が蘇州より落ち來れる味方二千人を養ひ難しと稱して盡く

勿ねしなど、總じて支那人の風習として人を殺すを草刈る様に心得、刑罰處分の最便法は殺して了ふにありと云ふ様なる事は敵も味方も同然にて、此は泰西の感情作法を以て律す可からず。李が蘇州の舉動も不信不義はさる事ながら、此も支那人の癖と思へば左まで執念深く憤る可きにもあらずとやゝ心解けたるゴルドンは、こゝに分別を仕直し、在北京英國公使に再び戰鬥に従事するの決心を報じて曰はく、小生も此までカスリ疵も負はず、不思議に功をも建てしことなれば、私意に従へば、今が去り時に候、小生戰場に出で候は、叛亂も六ヶ月とは、いついさ申間敷、若し今小生はづし候得者、或は六年もつゝいさ候は、ひ歎と。英公使も之に同じて、凡そゴルドン所在の地に降伏の事あらむ時は、ゴルドンの同意を得ずば何事も行はずと云ふ保證狀を清政府より取り、且つ李鴻章も蘇州事件の顛末を公にしてゴルドンが毫も降王殺戮降賊虐殺に干繋なき旨を公表することありて、一八六四年二月十九日ゴルドン

は二百の守備隊を残し、常勝軍を提げて、雪中に崑山を出でぬ。

此時南京には別に一軍の官兵ありて之を攻め、杭州府は清軍と佛人と協力して攻めつゝあり、ゴルドンの作戰經書は、太湖の西に當る宜興及び深陽を略取し、賊勢を兩分して孤立せしむるにあり、常勝軍も今は幾多の激戦を経て、士官の用に立つ者は概ね死傷し、兵卒には新に募填せるもの多く、兵力また舊に比す可からず、然も變らざるは、主將の勇氣あり、三月一日ゴルドンは進むで宜興を攻め落し、同四日更に進むで深陽を降し、戍兵一千人及砲艦二十五隻を収め、同所に山積せる糧粟の幾分を預つて餓孚野に滿つる附近の村落を賑はしつ、賊勢兩分の經書は思ふ通りに行はれたれば、是れより西の方南京を指して次第に押寄せむと、先づ金壇に向ひぬ、三月二十日金壇に着して、翌日まさに攻撃を始めむとする時、一警報李鴻章より到りぬ、ゴルドンが側面の掩護を托し置きつる官軍頼甲斐なく手ぬかりて、常州府を突出せる髮賊七千人、官軍

の翼を廻りてゴルドンの背後に出で、蘇州城西五十哩の無錫を脅かし、次第に東してゴルドンが常勝軍の指麾を執つて初めて勝ち軍したる福山を攻め、常熟に迫れりと云ふ、所謂腹背の敵を受けたるゴルドンは兎も角も一舉に目前の金壇を陥れて然る後電馳背後の敵を拂はむと咄嗟に思案をきはめ、直ちに砲門を開いて三時間の射撃を加へ、城壁の少しく崩るゝを待ち兼ねて突貫の令を下しぬ、賊兵必死と防ぎ、突貫隊利あらずして卻きつ、此回はゴルドン自ら第二の突貫隊を指揮して、肉薄して上りぬ、偶々一弾あり、ゴルドンの脚部を貫通し、流血淋漓たり、然もゴルドン退かず、我主將傷きぬと叫ぶ兵士を叱して黙させ、竹杖を揮つて進撃を令して止まず、血はいよゝゝ流れて、ゴルドンまさに昏倒せむとす、軍醫走せ來つて、他の將士と強めてゴルドンを昇きて舟中に横臥せしめぬ、ゴルドン已に傷つきたれば、傳令使ブラオン少佐代つて、三たび突貫したるも、此亦負傷し、今は攻撃を中止する外なく、同二十四日

を以て全軍深陽に引揚げたり。ゴルドン負傷の報傳はるや、清帝は李鴻章をして特に慰問せしめ、英公使もゴルドンが年壯氣鋭命を輕んじて功勳を重んぜむとを憂ひ、書き送りて曰く、貴下已に勇將妙帥の名を贏ち得て餘あり、鄙官等一同能く頑固の支那人と共働し、よく上海の大干繫を委托するに足る可き者、貴下を措いて他に人なしとする者、貴下の生命と、貴下の健在にして戰場に臨むを得るとは、清國に於ける一市一城の略取よりも重要なるを記臆せられよと。

ゴルドンの傷は致命傷にわらず、唯靜養を要すと軍醫は云ひぬ。然も賊の忠王已に福山を奪へりと云ひ、常州府より常熟に到るまで渾て髮賊の蹂躪に委せられたりと云ひ、髮賊まさに蘇州を冒し上海を覗はむと揚言すと云ふ警報の頻に到るに當りて、ゴルドン何條靜養を甘んず可き。脚部の貫通銃創により、起立し得ず、況して歩行は思も寄らぬと、ゴルドン元來横臥して居ても戦ふの人なれば、金壇の役に困憊せる常勝軍

の大部隊を深陽に残し置き、さきに深陽にて収めたる新降兵及び輕砲兵を併せ約一千人強の小勢を引いて二十五日無錫に達し、同所の守兵がわづかに髮賊を撃退せるを見、此處に其兵の一部を駐め、身は小蒸、汽の甲板に仰臥しつゝ、僅に砲兵及四百の歩兵を提げて、髮賊の群がる地方に闖入せり。

且つ進み、且つ戦ひ、百五十哩を二日にうたせて賊地深く進入しつゝ、熱々賊軍の形勢を察するに、賊の中心は華市にあり、華市を衝かば左右翼は、自づから萎縮す可きを見て取りたれば、ゴルドンは無錫に残せる兵を呼び寄せて、こゝに手兵を二に分ち、部下の士官某々に歩兵を率ゐて陸路より進ましめ、自ら砲兵を指揮して水路より進み、華市の附近に於て出會し、兩面合撃して一舉に華市を陥るゝの策を定めぬ。然るに陸路の兵が避けて往く可き賊營に鈍くも蹶きて、思ひかけなき賊の騎兵に駈け惱まされ、終に大敗虜を招ける爲め、豫定の策略合期せず。ゴルドン



の水師は獨り華市に攻め寄せて非常の困難を極め、辛ふじて船艦を全ふして退きぬ。時に三月卅一日なり。ゴルドン屈せず、部下を勵まし、更に兵を招き、四月三日更に進む。李鴻章の軍と聯絡を通じ、華市を陥れぬ。華市陥りて、其他の敵、巢前後に陥り、圍解け、東常熟より、西常州城外に到るまで、沿江腹地また雙騎の敵を見ず、江蘇の官軍是れより、後顧の患なきに到れり。

四月下旬ゴルドンは常勝軍の全部三千人を引率して常州府に向ひぬ。同府を攻めて勝たざる李鴻章を援けん爲なり。廿七日先づ砲撃を加へて城壁を毀ち、官軍及び常勝軍力を戮せて突貫二回に及びたるも、賊の護王よく防いで、寄手は死傷夥しく、終に其日の攻撃を中止しつ。ゴルドン即ちセバストーホル以來の伎倆をあらはして、官軍に敵の城壁近く塹壘を穿つの術を教へ、李鴻章また城中の賊を誘ふて之を招降し、五月十一日即ち常州府の賊手に落ちし滿四年の日をトして、大舉城に向ひ

ぬ。官軍先づ突貫城に上りしが、激烈なる防戦に會ふてやゝ疲まひとす。るを見て、脚部の銃創已に癒へしゴルドンは自ら常勝軍の一部を帥ひ、大呼して赴き援く。官軍色を直して城中に突入し、大殺一陣護王以下巨魁を捕獲し、常州城は終に陥ちぬ。是れ常勝軍最後の、一戦なり。常州陥落の二時間後、ゴルドンは一紙片をとり鉛筆もて走り書きに左の短簡を認めたり。

### 親愛なる母上

本由午後二時、崑山の軍(註、常勝軍の事)と官軍と突貫して常州府を陥れ申候。死傷は少なく候。私も五月十三日に崑山に歸り、最早戰場には出でざる筈に候。賊はもう駄目に候。唯丹陽と南京を有つのみにて、丹陽は多分一兩日中、南京は約二ヶ月の中には落ち可申候。幸に私も無難に免れ申候。

### 親愛なる君が兒

シー、ジー、ゴルドン

常州府の陥落は叛亂の背骨を挫きぬ。是れよりさき杭州府已に陥り、曾てゴルドンが劊を受けし金壇も陥り、今また常州も陥ちたれば、叛亂は已に片息になりて、餘は唯どいめを刺すまでなり。而してゴルドンの此預言は違はず、丹陽直ちに落ち、七月南京落ちて、太平天王洪秀全妻孥と共に自殺し、忠王以下捕獲せられ、自餘の賊軍も間もなく亡び、十五年間支那を荒らし、三百萬餘の人を殺したる長髮賊の亂は茲に終を告げぬ。ゴルドンさきに常勝軍の指麾を執る時、李鴻章に向ひて、江蘇の賊を夷げんこと十八ヶ月を出でざる可しと云へるが、一八六三年三月下旬ゴルドンが松江に赴きて常勝軍に將たりしより、一八六四年七月南京の落城に到るまで、實に十七ヶ月を経たり。

常州府の落ちたる後、ゴルドンは軍を引いて崑山に歸り、六月一日を以て全く常勝軍を解散せり。ゴルドンが其指麾を手に採りしより、十有四ヶ月、大戰三十餘回、小戰無數、大市を陥るゝ四要害を陥るゝ十數處、約十

五倍の敵を戰鬪力なきに到らしめ、一百三十餘名の外國士官中死者三十五名、傷者七十三名、約四千の士兵中死者五百二十名、傷者九百二十名を生じたる程の惡戰して、常勝軍及び其主將の名は官軍に元氣を與へ、賊軍の胆を寒からしめぬ。其ゴルドンの下に運動し始めし時は、髮賊の勢焰猶熾んに、北京朝廷をして憂慮措く能はざらしめしが、其解散せる時は、叛亂は已に致命の傷を受けて纔かに最後の一息を剩せるのみなりき。ゴルドン清帝國を救へりと言はむは、過ぎたりと雖も、其常勝軍に將として戰場にありたるが爲に、所謂官軍の「作戰經畫に力を與へ、謀議に思慮を與へ、運動に迅速を與へ、全軍に勇氣を與へ、以て清民塗炭の苦を短からしめたるの功は何人も否む能はざる所なるべし。將其人をだに得なば、支那人は以て有力なる軍隊を作す可き事を、ゴルドンは實例を以て示しぬ。彼の部下は、歐人土人に論なく皆彼に心服せり。常勝軍の一士官の言に曰く、ゴルドンの支那に於ける經歷中にて尤も顯著なる

事實は、部下の支那兵が全然信服して、彼に事へ、彼が躬から臨める戦には、必ず勝つと信じ切りたる事なり、彼等の眼には、ゴルドン將軍は、全能なる一個の魔法者と見え、彼は一種妖的生命を有てり、と信じぬ……此は、ゴルドンが癖として、戦に臨む毎に、從伴をもつれず、突然と陣頭にあらはれ、彈丸雨飛の真中に冷々然と佇めるにもよるなるべし、彼は得意の竹鞭の外、唯、双眼鏡を携へたるのみ、劔を帯びず、短銃を携へず云々。

然れども、常將軍の名將として、贏得たる武名よりも、ゴルドンの人格に對する内外の尊敬は、尙高かりき、一八六四年の始、ゴルドンは家郷に書を寄せて曰く、私事は官位の昇進や世間の評判などは塵ほども思ひ申さず、貧にして支那に來り、貧にして支那を去り可申候と、彼は已に吾俸給を擧げて、常勝軍の用に宛てぬ、常勝軍の解散するや、北京朝廷は大にゴルドン中佐(註) ゴルドンは一八六四年の初工兵中佐に進みぬの功を褒し、其勞をねぎらひ、勅して提督(註) 陸軍大將 相當官の官を授け、黃馬掛有眼花翎の特典を賜ひ、提督の

官服四襲を贈り、且つ莫大の賞金を贈與せり、然もゴルドンは固辭して、終に一錢をも受けず、官服官帽は辭するを得ずして受けたるも、忸怩として曰く、斯帽の扣鈕には、三十磅四十磅の價格あるものあり、ざる餘裕もなき、北京政府より之を受くるは心苦しき事なり、兎に角、余は彼等が氣の毒なる貧乏の中より、賞金をば受けざる可し、此にて少しは氣安き心地すと。

ゴルドンは自から謂へる如く、貧にして支那に來り、貧にして支那を出でぬ、然も内外人の好意と尊敬とは山の如く、其背に積まれぬ、恭親王清政府を代表して、英公使に送れる公文に、辭を盡してゴルドンの功勞と人物を稱賛し、英國政府より恩賞の沙汰あらんことを促し、が、英公使は其公文を本國の外務省に送るとて、書き添へて曰く、

ゴルドン中佐は、慥に女皇陛下の御恩賞を受く可き者に候、中佐、今回の手際及び勇氣は、姑らく之を措き、其清廉潔白は、支那人の眼中に我

大英國民の品格を高からしめ候。

七十八

上海居留外商一同連署してゴールドンに感謝狀を贈りし其中の一節に曰く、

貴下一個の御所行に對し、某等一同の尊敬及び歎美を表白せずして、斯好機會を逸するは、貴下に對しまして、また某等自身に對して、齊しく相濟まざる次第に候。貴下は實に無類の困難なる位置に立ち、あらゆる繁累に圍まれながら、拔群なる俠勇と組織銃馭の才能とは申すに及ばず、また忠實なる且徹頭徹尾清廉潔白なる行爲によつて、外國士官が名譽ある信實と一徹の謹慎を以て當國政府の爲めに盡すの實例をばよく支那國民の眼前に示し玉ひぬ。

清國政府はゴールドンに於て初めて信頼す可き外人を見出しぬ。ゴールドンが短銃提げて追ひかけたる老獪なる李鴻章其人も、事を共にしたる二年未滿の間に於て、ゴールドンの心腹を熟知し、まさかの時には外人に

して國家の大事を托せむ者、斯人の外にあらざらむと思ひ込みつ。ゴールドン自身また曰く、清國政府は從來外人に例なき程余を信任せり。余は終に何人にも誣はせず、また屈せず、而して彼等はますます余を尊敬しぬ。爾來こゝに三十七年、髮賊よりも恐る可き外患頻に臻りて、滿清の國歩日に艱み、屈辱又屈辱、割讓又割讓、存亡の機測る可からざるものあり。憐れむ可き支那よ、誰か來りて爾を援けむ歟。爾が懷には外來の客多し。皆爾の肉に宿つて爾の肉を喰ふ者なり。爾が爲に戰ふ者は、爾が金の爲に戰ふ者なり。爾が爲に策を建つる者は、爾を陥れんとする者あり。保全分割、門戶開放、恐嚇、甘言、何れか利の爲に非ざる。憐れむ可き支那歟。爾は曾て眞に爾の爲に力を致せる一人の友を白人の中に有したりき。今や再び爾の爲に彼を起さむとするも、俠骨土に入りて已に十六年なるを奈何。

七十九

## 第七章

### グレヴゼンドの慈善家

一八六五年の初、ゴールドン中佐は五年の多事なる生涯の後、満清帝國及居留外人一同の感謝と歎美を負ふて支那を去り、驩呼に迎へられて英國に歸りぬ。支那戈登の名は英國に高く、彼はC.B.を授けられ、また工兵大佐に進みぬ。然も斯變物は名を好まざると夥しく、グレヴゼンドに埋れて交際社會には顔だに見せざりき。グレヴゼンドは倫敦を距る二十哩、テームス河の南岸にあり。ゴールドンは同所に於ける工兵監として、テームス河口要塞工事の監督を命せられ、此處に静かなる月日を送ると六年に及びぬ。

クリミヤの初陣より蘇丹の最期に到るまで、約三十年間東奔西走人の爲に力を致して維れ日も足らず、兵馬の塵、行路の汗にまみれて殆んど安息を知らざりしゴールドンの一生を觀察して、グレヴゼンドの六年に到れば、風濤の荒海を乗切る船のしばらく港に入りて錨を卸せる感あり、彼に無限の活動あり、戦争あり、此に無限の平和あり、彼には電光によつて、兵を用ふる風雨の如き名將を見、果斷勇往の統治者を見、此には煦々たる春日の光に照らして、慈眼愛腸の君子を見、恭謙質朴の紳士を見る、戎服も平服も共に、彼に似合へり。

然もゴールドンの所謂平和は無爲を意味せず、不休不息の其精神は、常に活動せざれば、即ち不快を感じぬ。嘗て曰へるとあり、天國の生涯は、惟ふに活動の生涯なる可し、幸福は獨り活動に存すと。活動は實にゴールドンの生命なりき、彼は工兵大佐として、テームス河口防禦工事の監督をなす餘暇を擧げて、盡く慈善博愛の事業に投じ、長髮賊を討ちたる氣力を以

て耳目に觸るゝ限りの罪惡を撃ち、不幸を救ひぬ。ゴールドン甚だ小兒を愛せり。彼は幾多の貧兒孤兒を街巷汚泥の中より拾ひあげて、其家に衣食せしめ、私宅學校を設けて自ら餘暇に読み書きを教へぬ。彼は此等の兒童を吾王と稱せり。王とは蓋し長髮賊の事より聯想し來れるなり。ゴールドンは此等兒童に一時の小慈小善を施すを以て足れりと思せず。さきまさまで世話をやきて、彼等を有用なる社會の一員たらしむるまでは肯て休せざりき。其世話により船舶の乗組員となれる兒童も少なからず。ゴールドンの家の暖爐縁上に一面の世界地圖あり、地圖に幾本のピンを挿みあり。一日人ありて其故を問ひぬ。ゴールドンの曰く、此ピンは吾王達の航海の路筋を表するものなり。兒曹が航海の進むかつかつ、ピンを此處から其處へど移し、日々彼等の爲に祈るなり。とされば兒童が其恩人を愛慕し、グレッヴゼンドの壁上に大文字にて「大さばんざら」C、Gはゆかないしとだ」など、樂書せるは無理あらむや。

ゴールドン此頃は三十代の男盛り、然も身材は中人に及ばず、且つ瘠せて、少しも英雄らしき風采はなかりしが、強健活潑にして筋力よく發達したり。顔立尋常にして、褐色の髮廣額を縁どり、口は堅く結び、其沈黙せる時は、一種沈鬱悲哀の相浮びて見ふれど、人と語れば、忽ち消へて快活の相にかはりぬ。忘れ難きは、澄みて明らかある碧灰色の其眼、低くやさしくて清亮耳を喜ばず其聲ありき。ゴールドンと親しかりし一人は記して曰へらく、

ゴールドンは尤も面白き談話家なりき。彼が興に乗じて話すや、其眼宛ながら倍大となり、其話には主題に通ふ類例比喩續出して聽者をして彼が描く繪畫を眼のあたり睹せしむ。彼は余が友人中尤も快活なる人なりき。グレッヴゼンドの庭園にては、驚に唧筒の水を注ぐなど、愉快に戯れの限りを盡しぬ。彼尻を振るは、某公爵夫人、此傲然と頭擡げたるは、某の若親王などを、驚はそれづくに名をつけられて、ゴールドン

の可笑しき話により、たのく、人間の弱點短所を代表せり。  
 他人の動機を見るに驚く、可く速かなりし彼——彼の如き正直漢に  
 して如何なれば世路の千曲万折を斯くは容易に洞見し得たるか、實  
 に驚くに堪へたる事なり——は、世間一切の政略を了解し看破せり、  
 然も彼は目的に達するの最捷路は直線なるを知りぬ、彼は唯一の動  
 機を有てり、曰く正理彼の祈禱若くは彼の天性は彼を利己野心其他  
 人間を眩して終極の目的を見ざらしむる凡百の事物より彼を救ひ  
 ぬ。

またゴールドンを識れる他の一人は記して曰く、

救貧院慈善病院は、彼が不斷の往來場所、近在にて彼の恩給を受くる  
 者は無數なりき、瀕死の病人、多くは牧師よりも寧ろゴールドンを招き  
 〔て臨終の慰を請ひ〕ぬ、而してゴールドンもまた天氣の如何、距離の遠近  
 を問はず、招かれては直ちに赴きて之を見舞へり。

飲食の事には一切無頓着ありき、一日午後晚く彼と余等と打連れて  
 其家に到るに、恰も茶の用意をなしあり、茶と云ひても如何にもまづ  
 そうなふるきバンド、一瓶の茶のみ、余、其バンドの乾硬なるを云ひしに、  
 彼、バンド——小なるもの——をどつて水こぼしの中につめ込み、其  
 上に茶をうち注ぎ、斯くすれば最早食ふに差支なくなる可し、また半  
 時間もたてば何を食ひたりしとて別段の干繫なしと云ひぬ、

彼毎によく一種奇妙なる滑稽的の言葉を用ひて、其全体の談話に風  
 味を添ふ、記す、兒童多くはゴールドン大佐の家に寄宿すれば甘い物を  
 食ひ贅澤を盡すこと、思ひ居たるに、大佐自ら彼等と共に食卓につ  
 くに及びて、馳走は唯鹽漬の牛肉及びはんの必要なる食品丈なるを  
 見て、皆々興醒顔なりしと云ふ事を余等に語れる、其眼の笑を帯びて  
 かゝやきしを。

ゴールドンはまた貧民學校日曜學校にも關係せり、彼と共に日曜學校教

師たりし人の某宗教雜誌に投寄せる逸事一篇あり。

日曜學校教師の職務を世界一の高尙なる事業と思へる青年男女の人々、グレヅゼンドの町はづれに、傳道學校を創めぬ。學校は小なれども、校長は往々外助を假るの已む可からざるに會ひ、うつかり來合したる者情け深き人などの役に立ちそうなるをばいきなり引捉ふるにいと巧みなりけり。斯る事情の下に、ゴールドン大佐もおり、余等の日曜學校を見舞ひぬ。夏の午後、餘程皮膚の厚き者ならでは半熟にもなりかねまじき熱さに、人群がれる室の低く硬き長椅子に腰かけて、彼は一群の腕白連を教へぬ。如何に有名の人なりとも外來の人に上級即ち年長者の級を渡さぬが定例なりければ、大佐の受持ちたるは最幼少の子供なりき。唯一度、彼は迫られて全校の生徒に演説せり。學校は二階と下と唯二室なれば、演説者下にて演説すれば、二階の生徒は、聲を聞けども演説者をば見る能はず。成る可く此不都合を減

せむと、ゴールドンは階段に立ちぬ、猶少しも己を見る能はざる聴衆にせめて少しなりとも近からむ爲め。

其折學校に於て彼と共に働きし一人は、其演説と、演者の風采とを、今も宛ながら昨日の事の様に記臆す。余等は當時彼が支那に於て如何なる事業を爲したるか、如何なる名聲を博したるかを知らず、唯要塞官舎に住む大佐として、凡そ善事とし、云へば進むで力を盡す人として、彼を識りたるのみ、併しながら彼の事業名聲を知り居たりとて、余等は、大佐の威光に畏縮せむこと思ひも寄らず、彼は小兒の如く謙和なりしなり。然も普通英國紳士の質素なるモーニング服に身をつゝみたる英雄のこゝに斯ぐらつく階段に立てるを見るに、其立派なる顔毅然たる顯し、つかりとしたる体格、實に一個のたゞならぬ人物の佇めるを認めざる能はざりき。彼が小形の聖書を開きて、「誰にても耶蘇を神の子と告白する者は、神彼に居り、彼もまた神に居る」と云ふ語



を説教の主題として此奇妙なる説教壇上より讀める時しも、西に傾ける夏の日の光は粗造なる校堂の帷無き窓を透して、十分に彼の上  
に落ちぬ。

其短き説教をば彼は徐々に、且つ頗る逡巡の態もて演べ、しばしと  
いまりては適當の語を索めぬ。音聲は嬉しくも美にして且低かりき。  
演説には花やかなる譬喩もなく、また直言すれば子供の氣にふさわ  
しきものども云ひ難かりし、然も演説者が吾説く聖經の文句に教へ  
られたる真理の高大なるを驚嘆して吾を忘れし様に恍然としたる、  
其まなざしを、聴者の一人は二十年後の今も猶よく記憶す。  
演説終り、彼は合掌し、最簡最單なる祈禱をなしぬ。蓋し「神に居る」と云  
ふことの眞意を知れる其人に、言葉は無用に思はれしなり。

ゴールドンがグレヴゼンドに住みける時、一文人あり長髮賊の事に關す  
る著述をなすとして、來りてゴールドンの家に寓し、種々材料を貰ひぬ。ゴル

ドン或時不圖其草稿を瞥見するに、己が事をしたゝかに譽めありたれば、憤然として其部分を引き裂きぬ。富豪貴顯の宴會等に招かるれば、辞して曰く、願くは貧者病者を招け、余の如く不足なき者を招く勿れと。曾て基督教を信する一淑女に謂て曰く、君己に基督を信す、其金の鎖を帯び玉ふ權理なし、貧者の爲に賣り玉ふ可きなりと。己に無ふして人を責めず、ゴールドンの財囊は常に空虚なりき。ヘーキ氏のゴールドン傳に記して曰く、ゴールドンは莫大の勳章を所持せり、素より願みもせざりしが、中に一個の金牌あり、清國皇后の與ふる所にして、特別の銘を刻しあり、ゴールドンも大きに之を好み居たり。然るに此金牌突然紛失しぬ。何處に行きしか、如何にありしか、何人も知る者なかりしが、數年の後奇妙なる事によつて偶然其行術を發見せり。即ちゴールドンは其金牌の銘辭を削り去り、マンチエスタアに於ける綿饑饉罹災者救助の爲め、匿名にて牧司ミルラアに其金牌を送りしなりきと。他の傳記者バットラア氏は曰く、

ゴルドンは常に平坦に、着實に、眞面目に、慈善を、あすにも、感情に、流れず、確固としたる常識に満ち、支那の城砦を撃ちたる如く、痛快直截に貧と惡とを撃てり」と。

一日ゴルドン貧家の戸前に醫師の馬車を見、貧と病と、斯家にある可きを察し、馬車の去るを待ちて其家に入れば、果して妻子ある男の瘡に悩めるを見、直ちに須要の物を與へて曰く、此回は永居せざれど、其内再び來らん、余は卿に遣されしなり」と。病者驚いて問ふ、遣されしとぞ、然、神に遣されたり、斯る事は偶然起るものにあらず、卿は弱りて恰も余が與へ得る物を要し居たれば、余は恰も醫師の出る其所に卿が戸口を通りかゝる様にせられしなり、斯等は皆物として知らざる所なく、意に随つて事を處し玉ふ上帝の斯くくばりあはせ玉ふを卿は見ずや、病者頭を揮つて應せず、ゴルドン其日は其まゝ去りしが、其後しばらく、來りて、宗教談をなしぬ、病者快癒して再び仕事に就きたる時は、其人物はさながら別人となれり。

ゴルドンの親しくしたる年若き鍊瓦職人重き病に罹りぬ、ゴルドン之を下宿に送りて、丁寧看護させ、下宿料、醫藥の費、其他一切の料を支辨しやりしが、程なく病は急性の肺患となりたれば、醫師の勸により慈善病院に移しぬ、移るに臨み、病者潜然として曰く、大佐閣下、病院に參りても御目にかゝり可申や、無論なり、病院には大勢の余が朋友あり、時々行いて訪問すれば、私最期も遠からず覺へ候、併し卿も今は吾は復活也、生命也と宣ひし基督を知れば、恐るゝに及ばず、病院にありても此處にありても齊しく基督は卿の近くに在し、死しても生きても齊しく卿の近くに在す可し、誠に左様に候、私今は基督を知り候、彼は笑を、含んで病院に送られ、笑を、含んで病院に死しぬ。

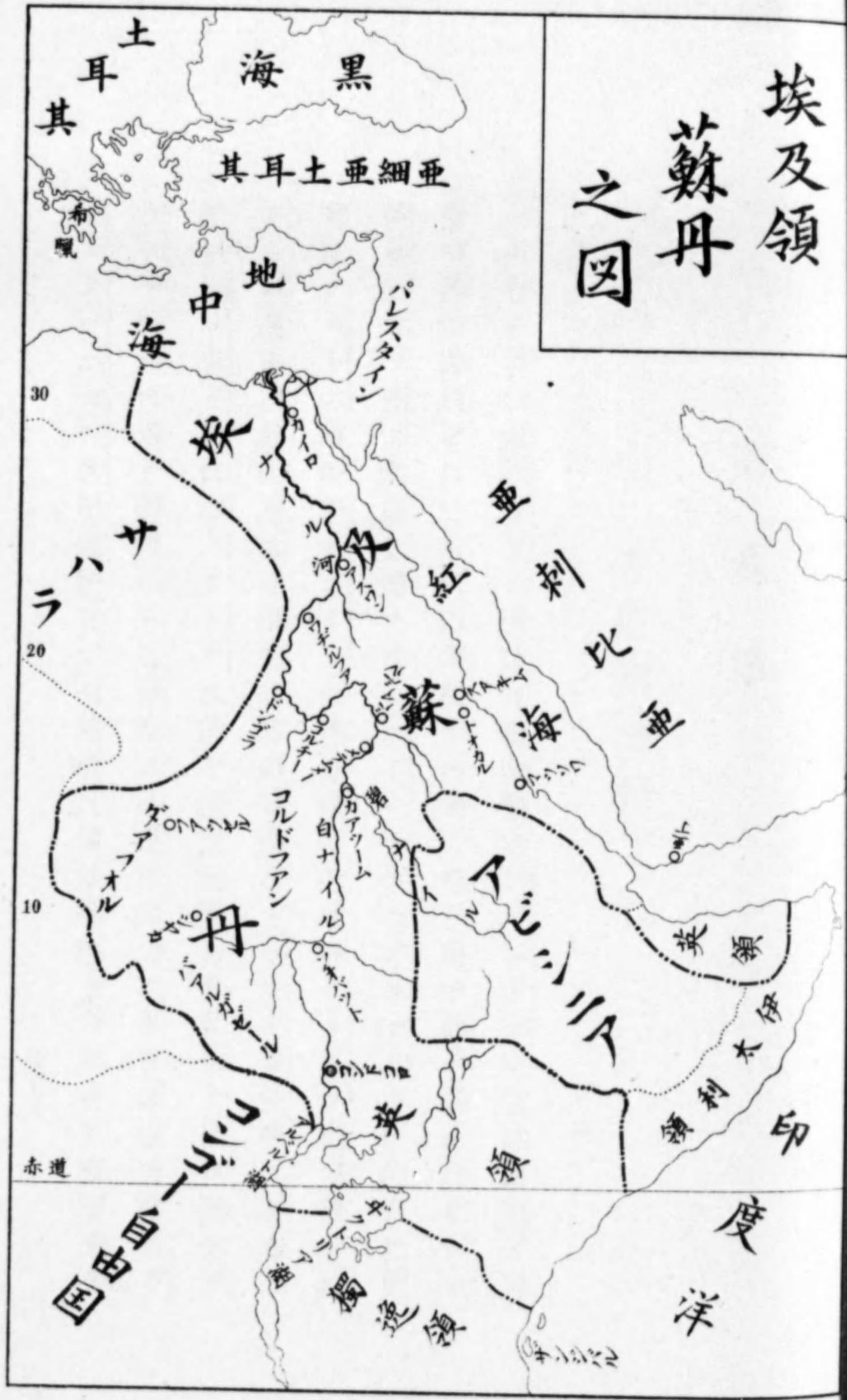
グレヴゼンドの町に住む一商人の小僧、主人のものを盗みたりとて、主人怒りて之を獄に入れむとす、小僧の母ゴルドン大佐が毎に快よく不

幸の者に助力を與ふるを聞き知り、大佐に往きて、涙ながらに其情を訴へて曰く、如何しても解しかね候、悴は是迄正直な子供にて候ひしに――此が初めてにてまた此が終りと信じ候、今一度試させ度、牢に入れば悴は到底破滅に終り可申、大佐、余も然らむことを恐る、出来る丈は盡力す可し、卿は余に何事を望まるとや、閣下、何卒悴の主人に御仲裁なされ、悴を牢にやらぬ様御諭し下さらば、御恩は生涯忘れ申さず、ゴルドン即ち行きて小僧の主人を見る、主人猶は怒烈しく、最早手許に置く事はならずと云ふ、ゴルドン其は無論卿の手許には置き難かる可し、併し卿若し彼兒を告訴せずと云ふ約束をせられなば、余彼を引受けん、或はまた悪黨を人間に仕立てる事が出来るも知れず、兎に角余に任されなば、試みにやつて見たし、夫れ程云はるゝならばと主人諾しぬ、ゴルドン謝して子供を引取り、熱心に懇切に其罪過を云ひ聞かせ、併し今一度卿を試し見るべし、卿の主人は親切に卿を宥しぬ、願はゞ上帝もまた卿を宥し

玉はん、而して卿が今後行をあらため努力せんとならば、余も卿に加勢す可し、如何にや、屹度致し申す可し、ゴルドン一年間彼を學校に入れ、ついで彼を船員となしぬ、彼は今長じて、恥かしからぬ人物となり、母と共に涙を垂れてゴルドンを説くと云ふ、

ゴルドンの住める家に、廣大なる園あり、一日貧人の其園に歩するあり、羨ましげに見廻して曰く、庭園を持つは愉快なものに候はん、私若し金満家ならば自分の馬鈴薯や青豌豆を培養致さんとしば、思ひ候、諸豆などの成長して一週々々進歩するを見るはなんぼう楽しき事に候はん、ゴルドン併し其は誰にでも出来ることならずや、卿も家つきの少々の地面を持たずや、一方碼も持ち申さず、よし、其れならば余が園の一碼を貸す可し、彼の隅に何でも卿の好きな物を植へ、出来たらば來りて收穫せられよ、彼一人に止まらず、ゴルドンの大なる庭園は、幾多の貧民に貸與して、殆んど些の空地を剩さいる程なりき、

埃及領  
蘇丹  
之圖



實にゴールドンがグレヴゼンドに住みし六年間、ヘーキ氏の記せる如く「彼は全く他人の爲に生活しぬ。彼の家は學校ともなり、病院ともなり、救貧院ともなり、工兵司令官の住宅よりも寧ろ傳道師の宅に類したり。一切の思難はひとしく彼の注意を惹きぬ。貧者、病者、不幸者は常に歓迎せられ、未だ曾て願ある人の空しく彼が門を敲けることなかりき。吾子の熱病にかゝれる時ゴールドンの懇情に預れる一巡査は曰く、グレヴゼンドは昔も今もゴールドン大佐にまさる篤信の紳士を有せず、またゴールドン大佐程青年少年に深く注意せる人に會はず」と。

ゴールドン大佐がグレヴゼンドの六年は斯くの如くにして過ぎぬ。

## 第八章

### 赤道州總督

一八七一年の末、ゴルドン大佐は歐洲協同ダニユーブ河航路保護委員會の英國委員を命せられ、六年間子の如く慈み親の如く慕はれしグゼンドの民に名残を惜まれて、ルーマニアのガラツツ市に赴きぬ。此處はブルース河のダニユーブに注ぐ處、十七年前クリミヤ戦争後ゴルドンが露土境界劃定に従事せし時の會蹤なり。ゴルドン此任にある二年ダニユーブ河口のスーリナ水道を浚渫開鑿し、容易に大船巨舶をガラツツの港に着き得可からしめたるは重に其力なりき。餘暇にはルーマニアブルガリアを遍歴して、其施政、民情、及戰略上の要害を視察せり。

クリミア戦争より十七年を経て、歐洲の舞臺は今や一變局を來し、曼佛戦争の隙に乗じたる露國は已に當年の巴里條約を破棄して黒海に船を浮べ、曾てゴルドン等が劃定したる境界も今や殆んど名のみとなり、露土の戦争再び起るも遠からざる可き形勢とはなりぬ。ゴルドンは土耳其の救ふ可からざるを知れり、曾て人に告げて曰く、土耳其人にかゝり合ふなかれ、余はよく彼を知る、彼は望無きものありと。

一八七二年の末ゴルドンはコンスタンチノーブルに起き、英國公使館にて圖らず埃及有名の政治家ヌーバルバシア(註バシアは土耳其埃及に於ける高等文武官の尊稱バシアに次ぐ)に會ひぬ。ヌーバルバシアは向ひて、埃及領赤道州(南部蘇丹總督サア、サムエル、ベーカーア英人の任期明年を以て盡くる筈なれば、貴下御相識の工兵將校の中にて其後任に當る者は有之間敷哉と問へり。  
(註土耳其の英國に於けるは、ほゞ清國の日本に於ける關係なり、埃及の英國に於けるは、ほゞ朝鮮の日本に於ける關係なり。唯朝鮮は獨立國なれども、埃及は名のみ土耳其に屬す)  
 ゴルドン其場には何とも答へざりしが、翌一八七三年の七月、書をヌー

バルバシアに寄せて、英國政府の許諾だにあらば、誰彼と云はんより自分其任に當るも差支あしと云ひ送りぬ。仍て埃及王より英政府にゴルドンを雇ひたき旨照會し來り、英政府も直ちに許可したれば、ゴルドンは一先づ英國に歸りて例の手輕き準備を整へ、一八七四年二月カイロ府に着しぬ。埃及王即ち彼を赤道州總督に任じ、年俸壹萬磅を與へむとせしむ。ゴルドン辞して、二千磅にて足れりとし、儀式的に附せられたる僕従を斥けて、飄然カイロを出發せり。ゴルドンの幕僚として擇めるは、昔クリミアにて通譯官として相識れる伊太利人ヂッシー、土木師ケムブ、米人ロング大佐、リナント兄弟、ラッセル、アンソン及びひと奴隸商にして彼地の事情に熟通せるアブー、サウードなりき。

支那より歸りて久しく脾肉生ずるの歎ありしゴルドン大佐が手腕を揮ふ可き新舞臺は開かれぬ。

蘇丹は黒人の國を意味す。埃及領蘇丹は北の方埃及より南ナイアンザ

湖に到り、東紅海アビシニアより西ダアフォルの邊疆に到る。ナイルの長江之を貫流す。河口より溯ること約一千八百哩にして、ナイルは裂けて二條となり、東を碧ナイルと稱し、溯ればアビシニアの山中に到る可く、西なるを白ナイルと稱し、溯ればナイアンザ太湖に達す。兩支流の一到に落合ふ所に、蘇丹の首府カアツームあり。カアツームより白ナイルに沿ふて溯ること約一千哩にして、ゴンドコロあり、南部蘇丹即ち赤道州の中心なりき。總じて蘇丹の經營は、一八一九年埃及中興の英主メヘンツト、アリーがカアツームを略取して此處に政廳を設け遠征の根據を据へたるに始まりたるも、埃及の勢力のカアツームの南一百哩以外に及びたるは一八五三年後の事なり。一八六三年豪華なるイスメールが王位に即くに及び、頻りに邊を開き、兵を興し、公然ナイアンザ湖に到る。ナイル水域一帶の地を併せつ。其富源を開きて、此處に中央阿布利加の一大王國を建立するの志あり。元來斯地方の産物は象牙を第一とせし

が、其後象牙にまさる黒象牙(奴隸の事)の利益夥しきより、奴隸賣買非常に盛んになりて、奴隸商人の暴富を致す者多く、就中ゼベールの如きは三十ヶ所の屯所を所有し、勢おさく、埃及王にも劣らず、其暴横を懲さんと埃及政府の派遣したる遠征隊却てゼベールの爲めに敗るゝの有様となりたれば、埃及政府も大に驚き、加ふるに歐洲諸國の催促もあり、かたくなさきには獎勵したる奴隸賣買を剿絶し、埃及政府の權威を斯處に確立せむと、一八六九年ゴンドコロ以南の地に於ける全權をサアサムエル、ベーカーに與へぬ。ベーカー其事業に着手して、未だ了らず、任期の満つるに會ふて歸國し、後任は圖らずゴルドンに落つることとなりぬ。さればゴルドンは赤道州總督(註、蘇丹本部總督はカアツームに住す名)をイスメール、ヤクープ、パシアと云ふとして、ゴンドコロ以南ナイアンザ太湖に到る暗黒の地を統轄して、混沌の中より秩序を作り、前任者の爲し剩したる奴隸賣買剿絶の事業を完成し、前任者の殆んど着手するに及ばざりし萬般の經營施設を行はざ

る可からず、勞多ふして功少なきは斯る事業の常なり、加ふるに浮華なるイスメールの心底測り難きものあり。ゴルドン王に謁して後家許に書き送りて曰く、斯回の遠征は英國人の注意を惹かんと、の眞似事なるべし、斯ゴルドンも驅られし様に覺ふと、然もゴルドンは假を化して眞となすの決意あり、また書き送りて曰く、余は斯事業を爲す可し、吾生命は塵程にも思はずと、ゴルドン此時四十二歳なりき。

ゴルドンは紅海を涉り、スアキムより上陸し、砂漠を横斷してバアベルに到り、小舟に乗じてナイルを溯り、三月十三日カアツームに着きぬ。姉に寄せし家書の一節に曰く、

總督註、イスメール、ヤクロープの事は大禮服にて君が弟を出で迎へ、生は祝砲軍樂の中に上陸致し候。其前日君が弟はずぼんを脱ぎすて、鱈は運動中の人を害せぬものに候——にも構はずナイル河に下り立ちて、舟を曳き居りし次第に候。今は一寸出るにも護衛兵がつ

いて出で申候……君が弟の尊稱は「赤道州總督將軍ゴルドン大佐閣下」に候。されば何人にて閣下の御許可なくして之を略したりする事は出来不申候云々(註、ゴルドンは閣下と呼ぶるゝを非常に嫌へり。其僕なる日耳曼人を戒めて曰く、余を閣下と呼ぶなかれ、呼ぶ時は死刑に處すと)。

カアツームに滯ふること八日、ゴルドンは一片の布令を發して、其管下の赤道州に於ける象牙賣買を政府の專賣事業とし、兵器彈藥の輸入を禁じ、個人の軍隊徵集を禁じ、旅行免狀を有せずして其管内に入るを禁じ、要するに其管内を軍法の下に置きぬ。奴隸商の當面に一大棒を下せしなり。

三月廿二日ゴルドンはカアツームを發し、千哩の南なるゴンドコロを指して小蒸氣にて白ナイル河を溯り始めぬ。船は徐々として行き、背を日に曝らす鱈魚、北行の時節を待つわたり鳥の夥しき群、巨嶋の如く淺



水を歩める河馬、劍の如く其尾を背上に佩びたる猿猴、塔の如く聳へたる豹駝、水牛、鶴の鳥、双眼鏡の覗ふを見ては忽ち河岸より逃げ行く土人等、凡百の奇観はゴールドンの眼に映じて、行旅の倦を破りぬ、家書に曰く、昨夜、三月二十六日、徐ろに月光の中を航行しつゝ、姉上方の事、此回の遠征の事、ヌーバル等の事などを考へ居候處、突然大なる藪の中より笑聲響き申候。生もむつと致したる處、豈計らんや此は鳥にて、やゝしやし不作法に藪の中より生等を笑ひ申候。此鳥は鶴の一種にて、頗る陽氣の体に有之、ゴンドコロに赴きて事績を挙げむなど思ふうつけ者もあるよと可笑しかりしげに相見へ申候。

斯あたりには、アツバと云ふ川中嶋ありて、嶋の唯有る岩穴に、其頃、マホメツト、ア、メツトと云ふ回教の行者住み居たり。十年の後、ゴールドンを攻め、亡ぼしたるは、實に斯行者なりき。然も運命の手は未だ二人を結ばず、ゴールドンの汽船はさき氣なく其嶋を過ぎて、いよゝゝ上流に溯れり。ソ

ウパツトの流に入りて、ゴールドンの一行は、デソカスと云ふ黒人種族と相識り、酋長は大禮服——實は赤裸々に襟飾一箇——にて汽船に來りぬ。其挨拶の仕方は、白人の手の甲を舐め、顔と顔と押つけ、而して唾はく真似をするなり。ゴールドンも足の接吻、唾の賜物だけは辞して、一握の南京玉を與へて其歡心を得ぬ。猶も溯れば、新開屯所の跡あり。墺地利宣教師等が布教を試みたる所にして、十三年間に十五人の宣教師は一人の信者を作らざるに風土病に斃れて、バナナ樹下に葬られ、今は一人の屯所に居住する者なし。斯くて、カアツームを出で、二十六日目、四月の十六日にゴールドンは赤道州の都たるゴンドコロに着きぬ。到れば、居民皆駭然たり。蓋道遠くして、何人もゴールドンの任命を知らざりしなり。覺悟したる事ながら、ゴンドコロに着きて、ゴールドンも聊驚きぬ。埃及領の赤道州とは全くの名ばかり、斯廣大なる土地に於て、眞の埃及領とては、ゴンドコロに三百の弱兵の成れる一砦と、二百哩南に二百の戍兵を

有するフアチコの砦ののみ、其れすら宛ながら籠城の姿にて、半哩とは無事に踏み出す能はず。埃及兵等が土人を虐げ、其家畜を奪掠し居たる爲に、土人怨恨骨髓に徹せしなり。されば無論政府も無ければ、租税徴集どころの話にあらず。土人の感情斯くの如くなるが上に、奴隸商等は更に南部西部の奥深く入り込みて、盛に其悪業を行ひつゝ、あり。兎に角赤手にては何事も行ひ難ければ、ゴルドンは唯一の伴侶たりしロング大佐を名代としてゴンドコロに残し置き、カアツームよりバアベルに下りて、同所に滯ふり居し幕僚従者及び輜重を率ゐて再びカアツームに上り、蘇丹總督ヤクープが二枚舌をつかへるを譴責し、六月更に上つてソウバット河に復へり、此處に留る二ヶ月、屯所を設け、シルルク種族の土人を懐け、また奴隸賣買の魂胆を見破りて、迅雷耳を掩ふに違わらざる打撃を加へぬ。先づ附近にありける三個所の奴隸商屯所の住民に立退を命じ、其中の一屯所よりゴルドンの領分外あるナイル河畔フア

シヨダの知事に宛て、二千の牝牛及び其他一切の物(奴隸の事)を引連れて下らひとする由を報じたる書翰(註埃及王は奴隸賣買勸絶を宣言したる同腹なりき。ゴルドンの困難知る可きなり)ゴルドンの手に落ちたれば、突然と其屯所を襲ふて之を毀ち、其居民をば盡くカアツームに追ひやり、奴隸は盡くもとへ返へし、二千の牝牛は原所有者分明ならざるより盡く之を沒收しつ。他の奴隸商は其と聞き知り、遠まわりしてゴルドンを出し抜かむとしたるも、ゴルドンは其行動を探知して、忽ち中途に差押へ、其奴隸商を二週間の禁錮に處し、然る後宥して之を用ゐぬ。寂寥の極、不健康の至りなるソウバットも奴隸賣買を遮断するには倔強の場所にて、而してゴルドンが奴隸商等の奸策を摘發する耳目は物馴れたる税關吏よりも捷かりき。往々舟のゴンドコロより來り下るあり、象牙と木材を積むで毫も怪む所なきに似たり。然もゴルドンは忽ち嗅ぎつけ、差押へて、木材を取りのくれば、果然舟底には奴隸を隠せり。即ち二つながら沒收し、奴隸は手許

にどいめ、象牙は政府の歳入を増しぬ。土人には即ち懇切の限りを盡しぬ。到る處、或は穀類を與へ、或は仕事を與へて賃銀を拂へり。また貨幣の用を教へぬ。先づ仕事の賃銀として幾箇の南京玉を與へ、次ぎに半ピアストル(註、約貳錢)の錢を與へ、然る後其錢と引かへにまた幾箇の南京玉を賣れり。斯くして土人も程なく貨幣の用を解したれば、ゴールドンも種々の物品を土人の買用に供し、宛ながら一の店を開きぬ。中央阿布利加のゴールドンは、依然たるグレヴゼンドのゴールドンなりき。其日記の一節に曰く、

八月三日 一ヶ月前余は可憐老骨袋を吾營に伴ひ、彼女を養ひ居たるが、昨日穩やかに(天に)取り去られぬ……余は想ふ、彼女もエリザベス、女皇もひどしく人生の一位を塞ぎしなり。

八月四日 昨日暴風の中に(病衰せる)土人の女を助け、小屋に入れ置けど、手下の者に命じ置きぬ。此夜暴風雨烈しく、眠をさませばおりく

柵内の余が小屋近く孩兒の啼聲を聞きたり。起床の時に到り何事なりしかを見むと出で行きけるに、門を過ぐるどて(昨日助けし)君及余の黒き姉妹が血泊の中に死して横はれるを見ぬ。黒人の同胞等は其邊を頻と往來しながら、ふりかへりて見る者もなし。余は行きて、彼女を葬るべく命じ、且つ過ぐるに、長草の中に一歳ばかりの孩兒捨てられてあり。夜一夜雨に曝され、其母に捨てられしなり——子供は兎角邪魔者なるよ！余は之を抱きて小屋に連れ行き、且彼死骸の未だ其まゝにありしあるを見て、人を呼び寄せ、葬らんとて赴きたるに、驚く可し、駭く可し、彼女は生きてありき。非常の面倒を見て、余は黒人の同胞等をして彼女を泥中より擡げ、少許のブランデーを其咽にそゝぎ、其見へざる眼より泥を洗ひ落させ、火ある小屋に運ばせぬ。彼女は十六歳には過ぎざる可し。……孩兒は一日に玉蜀黍幾千と云ふ相談にて他の家族に預くることゝなりぬ。

八月五日 君が黒き姉妹は本日午後四時此世を去りぬ。深く哀むものは余のみ。黒人の同胞等は、彼女を邪魔者と思ひて、左程哭きもせざりし。今朝行きて彼女を見舞へる時、小屋の彼方に何者かの啼聲を聞き、其方へ廻り見れば、此世界に來訪してより十ヶ月乃至十二ヶ月位經たる我々と同種屬の一個が泥溜の中に横はり居るなり。またも捨兒よと云ひつゝ、之を拾ひ上げぬ。後に到り、其母來りたれば、余は穩やかに彼女を戒しめ、蛙の子には、泥が適當なれど、人間には、泥は宜しからざる旨を云ひ聞かせたり。云々。

ゴルドンの同情は寧ろ斯等矇昧ある土人に傾きたり。日記の一節に曰く、余敢て云ふ、一日また一日一食だにせざる斯等悲惨の土民の中にも、却つて我英國の中等社會にまさるの幸福ありと。黒人等は一擲の玉蜀黍を得て喜び、至大の不愉快中に生活す。彼等は身を掩ふ可き一片の布だに有たず。然も幾多の英國人士の様に、無意味につまらぬ宴會とか歡

樂とかに耽りて、しかも終日つふやきうある様な事はせざるなりと。

九月の初ゴルドンはソオバットを發して、ゴンドコロに歸りぬ。土人を懐け、兵士を耕耘の事に従はしめ、郵便の制を創め、奴隸商の消息を探知して手當り次第に嚴重の處分を施すなど、日々忙また忙をきはめぬ。時まさに降雨期に入りて、暴雨日々瀑の如く、四近は須臾に一面の沼澤となれり。さきに何人か斯土の悲惨を想像し得んや、年が年中日となく夜となく唯熱と蚊のみと云へる土地は、今恐る可き暴雨を添へて、冷濕の惡氣骨を侵し、マラリア菌は煙の如く浮游せり。營中は一大病院となりぬ。幕僚の中、アンソンは已に病死し、ゲツシー病み、ラツセル病み、カムベル病み、デ井ツト死し、リナント危篤に迫り、其他從僕概ね病めり。獨りゴルドンは依然たり、或は醫師となり、看護夫となり、一切の會計自ら見、凡百の細件親しく之を司どり、赤道州總督は一個下まわりの技師役人となり、時としては職工となりて働けり。九月の末に到り、ゴルドンは十六

哩上流なるラギーフ瀑の下に其天幕を移しぬ。斯處は土地や、高爽にして、ゴンドコロよりはまされり。然も幕僚は猶概ね病臥してリナントも終に死しぬ。加ふるにゴルドンが毒を以て毒を制する心算にて、埃及より連れ來りしもとの奴隸商アブー、サウードしばく、ゴルドンに叛きて、隱謀を企て、幾回か寛せしも、終には大事を仕出さんとするに到り、是非なく其職を剝ぎて追拂へるあり。またゴンドコロに残し置きつる地方官吏が、三百六十弗の賄賂を受けて、一千六百の奴隸を密かに輸送せるあり。埃及王は頻に奴隸賣買を速やかに勦絶せよと督促し、埃及官吏は概ね奴隸商と結托す。ゴルドン奈何ぞ自由に其手腕を揮ふを得じ。其家書に「余は無事なり、但余は非常の氣短にありぬ、余に逆ふ者はわざわひなるかな」と書けるは、怪しむに足らず。

十二月に入りて、ゴルドンは全くゴンドコロを放棄し、此回は十二哩の下流なるラドに政廳を移し、此處を赤道州の新都となしぬ。此處は沼澤の上に聳へたる高地にて、衛生上遙にゴンドコロにまされり。然も其如何なる「都」なるかは、左の記事によりて知る可し。

昨夜、暴風雨の中、家近く人の叫ぶ聲、銃の響起りて、眼をさましぬ。余は事の由を推し、走り出で見るに、果然、僕從等が水汲む爲に河岸を截り下げ置ける所より三頭の象上陸せんとせしを、哨兵が認めて追拂ひしなり。

年は暮に近づきて、四邊いよ／＼寂寥たり。幕僚の中、或は病死し、或は病の爲に去り、カイロ府を距る二千餘哩の斯阿布利加内地の本營には、歐人として赤道總督とケムブと唯二人を残せるのみ。寂寥無聊云ふ可くもあらず。ゴルドンは手づから一種の藥劑を發明して、肉体の病を防ぎ、また間斷なく活動して精神の寂寥を慰しぬ。曰く、悲哀若し避く可からずんば、余は懶惰に費やす生活よりも寧ろ悲哀の中の生活を採らん」と。また述懐して曰く、此處は四十以下の人の來べき所にあらず、……

然らば何故に余は此處に來りしか……蓋し余の如き意見を懐く者は、マルタ嶋の守備を勤め若くは本國の軍隊に勤務するには、あまりに不羈なるを感せしなり。恐らくはまた、若し上帝の旨にかかはり、斯土に裨益す可き或ものを余自ら有すと感せしかり、何となれば上帝は余に大なる根氣と健康と、また少許の常識とを與へ玉ひしが故なり。著者云、斯數句は以てゴールドンの一生を説明す可し、其兎角本國に落つかず、支那に、蘇丹に、好むで外に出でたるものは、他なし、斯不羈なる魂あり、爲す有るの自信あり、而して故國には活動の餘地なく、普通軍人の規律課程に縛せらるゝは其煩悶に堪へざる處、從つて海外に活動の自由郷を求めしかり、蓋しゴールドンは千荆万棘に手腕をふるふ開拓者、他人の田地をあらすが如きは其耐へ得ざる所なりしなり。

また曰く、

上帝の聖旨により、余は斯土に成す所多かる可きを信ず、要は正しく、

直截に、何人も恐れず、何人の言も恐れず、假令此が爲め損する所ありども、凡そ一切の躲避一切の婉曲を避け、而して吾に順はざる者には手強く當るにあり、斯等は爲にくき所なるも、然も余が見當は此處にあらざる可からず、著者云、ゴールドン生涯の處世方針は實に斯數句に盡く、直進は衝突と相伴ふ、故にゴールドンの生涯は常に戰鬥の生涯ありき、即ちゴールドン將軍は大なる意味に於ての軍人也。

また曰く、

今は斯世界に一物として余が貴重する物あり、世間の榮譽乎、是れ虚偽のみ、世間の小間物か、是れ亡び易き無用の物のみ、余が生活する限り、余は上帝の恩賜——健康を貴重す、已に健康を有せば、此世界にありては、是れ已に富めるあり。

斯くて一八七四年は暮れぬ、天然、人事、内外百般の妨礙を乗り越して、ゴールドンの精力と伎倆とは、斯混沌の中より次第に秩序を作り出しぬ、已

にラギーフよりカアツームまで千有餘哩にわたるナイルの地圖を完成し、カアツームより太湖地方に到るまで點々連續せる屯所を設け、また設けんとし、またロング大佐を并クトリア太湖の附近ウガンダ國王メテサに遣はし、同國の附近に到るまでナイル水路の航す可きものあるを知りぬ。幕僚の一人は此際ゴルドンの事業を總計して曰く、ゴルドンは斯土に來りし以來實に可駭的事業を成しぬ。僅々十ヶ月前、彼が來着せし時は、ゴンドコロに唯數百の兵ありて、パリス種族の敵對故に、兵器を携へ隊伍を組まざれば敢て一百碼と外に路み出す能はざりき。ゴルドンは斯等の兵もて、ソウバット、ラタシヤム、ボオル、ラド、ラギーフ、フアチコ、ダフフリ、マクレイン等八個の屯所を固めさせぬ。前の赤道總督ベーカーアの遠征は埃及政府に約一百二十萬磅の費用をかけたれ共、ゴルドンは其遠征の經費一切——昨年既費の分のみならず、本年の豫算の分をも——を拂ふに足る程の金額を已にカイロに送りぬと。

一八七五年二月ゴルドンは河を下りて、瘴癘の氣深きソウバットに到りぬ。其經書は、此方角に於ける屯所の整定に八ヶ月を費やし、然る後河を溯りてフアチコに到り、所謂太湖地方の探險を遂げむとするにありき。ゴルドン曰く、余が管内の北部は沼澤と砂漠、無用の地のみ、豊沃の地は太湖地方にありと。彼は太湖地方よりナイルの流に由りてカイロ府に到る航路の、遠くして且不便極りなきを憾み、阿布利加の東海岸ザンシバル嶋の北に當るモムバザ灣は并クトリア太湖の東岸を距る四百哩に過ぎざれば、之を略取して太湖地方より同港に出で其れより海路蘇士に到る路を開き、以て阿布利加内地を開かむと欲し、已に埃及王に建言する所ありき。たましく報あり、ウンヨロ(註、ウガンダに接し、兩太湖の間にある)國王カバレガ奴隸捕獲者等と力を戮せて、フオエイラの屯所(註、ウンヨロの附近にある)を襲はむとすと云ふ。ゴルドン即ち名のみ今猶埃及王の御用人なりける奴隸捕獲者を呼び下し、其五十人をカアツームに追ひやりて其連れ來

れる奴隷を没收し、またウシヨロ王は之を其王國より追ひ出して他の王を以て之に代へんと欲し、かたく、ナイル湖航、太湖地方の探險を取り急ぐことゝなりぬ。

赤道州の新首府ラドより太湖地方に到らむには、河には瀑布あり、瀨あり、河岸には仇なす土人の種族あり、首尾よく達せむは中々容易の事にあらず。ゴルドンは先づ斥候として、約一百人の兵を率ゐて、ラギーフの上流三十哩のケルリーに進みぬ。斯途中にて、ゴルドンは危き一命を拾ひぬ。家信に曰く、今日烈しき雷雨中、天幕の側面をのばし居たるに、雷光一閃、余は恰も強力なる電氣器械の與ふるにひとしき劇しき震動を感じしぬ、よくものがれしかな」と斯くてゴルドンはケルリーにとゞまりて土人を懐け居れる時しも、部下の兵士等土人寄せぬと騒ぐを機會に例の奪掠を始めぬ。流石のゴルドンも勘忍袋を破りて、家書に斯く罵れり「卑法、懦弱、うそつきの畜生、斯の亞刺比亞人！蘇丹人！……誰か彼

等が頸を一にして縊むる者はなきか……風土にあらず、土人にあらず、余が大嫌ひは彼兵隊也」と程なく一百の兵來りて此處に屯所を作りたれば、ゴルドンは一先づラドに下りて、カアツームより來る可き川蒸氣及び兵士を待ちぬ。ゴルドンが暫らく居ざりし間に、ラドの事情散々なりければ、ゴルドンは同所の知事ラウーフバシア及び始末にいけぬふる兵者等を早々にカアツームに追ひ下しつ。其處分已に終れど、汽船猶到らず。無聊にたへかねたるゴルドンは、ベーカーがゴンドコロに残し置きしふるき園用唧筒を手づから花火筒に作りなし、袂時計掛時計を修繕し、くるひたる自動樂器を修覆してウガンダ國王に送りなどして、わづかに汽船を待つ間の悶々を遣れり。彼の腹中には、絶へざるの火あり、物を焼かざれば、自ら焼く。曰く、人は仕事を失ふまでは兎角仕事の有難味を知らぬ者なり。仕事は健康と一般、これある間は、其恩恵を看過し易し。余には、懶惰はと恐ろしきものなし」と。カイロ府との書信往復は



頻繁なりき。ゴルドンは例の作らず飾らず、ありのままの事實を埃及王に報告し、赤裸々たる意見を述べぬ。彼は免職を覺悟したり、曰く余は吾才力の能ふ限り埃及王の爲めに全力を盡し、何人に向つても正しからむことを努めぬ、假令免せらるゝも何をか憂へん……尤も河流を開いて未だ太湖に到らずして去らむは殘惜しき感なきにあらざるも、余が之を成就せざるは上帝の聖旨と思へば、其感はやがて消へ去らんのみと。然れどもイスメール王は毫もゴルドンを免するの意あかりき。彼は種々の讒を斥けて、ゴルドンに聽きぬ。曾て清國政府が信任せし如く、イスメール王は斯不思議ある男の深く待ひ可きを知れり。

延引又延引せるカアツームの汽船は終にナイルを溯り來り、其汽船を區分して載せもて急灘激瀬を溯る可きナイル河特用小艇の用意も整ひたれば、八月三日を以て逆流溯航は始まりぬ。ナイルはまさに漲溢期に際して、名にしれふグリーンキーが瀬の流るゝ水勢は矢の如く、岩を衝き、

渦を巻きて、見る人の膽を寒ふす。ゴルドン其姉に書き送りて曰く、

生は眞實疲れ果て申候——肉体よりも寧ろ心の上に、今日は實に恐ろしき日にて、小艇の一艘は已に沈みかけ候。如何にも恐る可きは劇しき渦に候。曳手に些少の失策あれば、最早駄目なり。君が弟は、曾て支那に於て城壁の崩れ目を攀づる兵士のたゆたふ毎に之を祈り上げたる様に、小艇を祈り上げ候。併し幾回かく、繩がきれて、何もかも遣り直す事に候……時としては、小弟に何か吾儘の舉動ありし其爵かども思ひ候——兵士等ひどく生を惱ませば……實に斯る事業こそは、人の銳氣を消磨し、人の齡を加ふるものに候。

斯る苦心の中にゴルドン一行は斯一關門を過ぎて、ムーギー屯所豫定地に着し、暫らく此處にラドより來る可き援兵を待てり。

是より先き沿岸の土人は、頻りに騒ぎ立ちて、女子供の少許の財産携へて逃げ行くあれば、晝は丘上に槍もつ土人の姿あらはれ、夜は咀の篝火

紅く空を焦して、如何にも不穩の形勢なりしが、果して、大舉してゴルドンが占め居れる屯所の次の屯所を襲ひ、またゴルドンが僅か二十名の部下と共に宿し居れる天幕に矢をば射込みぬ。さきにゴンドコロにて病死せるリナントの弟、ゴルドンの許を得て、土人を威嚇せむと、約四十人を率ゐて河を渡りしに、土人の圍む所とあり、彈藥盡きて、僅かに四人を除き、盡く土人の矢に斃れぬ。リナントも眼さましき赤しやつを着たるために、土人に狙はれて、落命せり。ゴルドン即ち三十人を引いて河を渡りぬ。土人等大將と見て、包圍せむとす。ゴルドン宥めて和せむとしたれど、聽かずしていよく、來り迫る。兵器は槍と弓矢なれど、激烈ある銃撃を恐れず、四つばひになりて攻め寄する勢中々侮る可からず。ゴルドン即ち近々と彼等をおびき寄せ、一齊射撃をもて之を追ひ散らし、匆々に人數をまとめて、兎角して河を下り、次の屯所に退きぬ。幸に土人の追撃をば免れたれど、敵の一人、何々道師なと云ふ者にや、一高巖の頂に立

ちて、頻りにゴルドンの一行を罵り阻ひてやまず。ゴルドン手にライフルをとり、彼の岩の上は、あまり健全なる演壇にはあらずと云ふかと思へば、道師は身を翻して岩より墜ちぬ。土人の處置はゴルドンの心を病ましめぬ。家書の一節に曰く、

我儕は自己の獨立の爲めに戦ふ慙む可き黑人を嘲りぬ、而も神は今彼等に勝利を與へ玉へり。生が書簡には何と書きあるとも、あへて斷言す、生は真に彼等に同情すと。土人は云ふ、我々は反物も入らず、南京玉も入らず、卿等は卿等の行く處に行け、我々は我々の行く方へ行かん。我々は卿等のバシアを見るの要なしと。土人は云ひぬ、此土は我々の有かり、決して卿等に渡さじ、其パンも、其牛羊も渡さじと。憐む可き者よ、君は云ひ玉はん、汝は撞着をきはむと。生は實に撞着せり。君もまた然り。我儕は、實行の際になれば、全然言葉に反したる事のみ爲す。朝の祈には、吾が人の罪を恕す如く、吾罪を恕し玉へと云ひて、さてそこ

く、に朝飯を濟しては、前日の喧嘩をつい、

義理の一念、ゴールドンに於て殊に強かりき。是は是非は何處までも非、己れが所謂文明人なりとて、相手が野蠻の土人なりとて、乞食なりとて、小見なりとて、ゴールドンには何の相違もなかりき。其書翰の一節に曰く、

白人の主義は左の如し、

「土人若し文明至極の行動をなさざる時は、しかく爲さざるの罪を罰せよ。但、我々白人の舉動となれば、其は土人の風習に循へ——即ち奪掠は一切罪にあらずと認めよ」

彼等は蒙昧なる土人の行爲を判するには、自家の法典を用ひ、土人に對して行ふには即ち隣人の物を奪ふ強者の權を認むる土人の法典を用ひ、嗟乎、余は斯輩を厭ふ。文明の必要は、黑人にあらずして、斯る白人にあり。著者云、願くば各一通を寫して、去年北清の野に美しき文明の光を發揚せる某某某の強國に呈せむ。

されば土人の處置にはゴールドンも非常の苦心をなしぬ。己むを得ずして嚴重の處置を施す時は、心戚々焉として樂まざりき。余は眞に斯る仕事を悪くむ。船一たび太湖に浮ばし、余は直ちに去らんとは其中心より出でたる嘆聲なりき。

已にして汽船援兵を載せて來着したれば、即ち敵對せる土人に對し懲の一隊を出すこととなりしが、ゴールドンの命によりて懲罰隊は一人を殺さず、二百の牝牛、一千五百の羊、及び會長の女を収めて歸れり。ゴールドン即ち其家畜をかへし、また衣服を與へて會長の女を其父の許に送り戻しぬ。ゴールドン傳の一著者バットラル氏の曰く、ゴールドンが野蠻人半開人の支配者として成功せる秘訣は簡單なるものなり、即ち殆ど相反せる二個の資格を有したるが爲めなり、一方に於ては彼等が生活一切の需用及事業に對して痛切の同情を注げる事、一方に於ては肉体の勞働に於て能く彼等に匹敵するに足るの体力辛抱力を有せる事、婦人

の心の如くに柔らかなる彼の心は緊切に彼等の苦痛を感じ、如何なる永き労働にも耐へ得る彼の肉体は彼等の福祉の爲に努めて倦むを知らずと。

斯くてゴールドンの一行を載せたる汽船及小艇は次第に溯りて、赤道を去る三度のダフフリーに着きぬ。ゴールドン日記に大書して曰く、萬事已矣と。蓋しダフフリーの邊二哩ばかりが間、白ナイルの流はフォラ諸瀑布を初め夥しき瀬をなして、到底豫算通り舟船を通ず可くもあらず、其間は是非共汽船も小艇も引揚げて一切陸路によりて運搬せざる可からざりしなり。然るに其陸路は、今や人馬の頭を没する熱帯地方の長草大海の如く波うちて、寸歩も行く可からず。ゴールドン已むなく草のもゆるを待ちてダフフリーより數哩を隔てしファセリーに一先づ足を駐めぬ。ラドゴンドコロに比すれば、地は一層の幽、氣は一層の瘴を加へて、何處を見るも長草荆棘眼界を限り、終年烈日と強雨とかはるく、灸り

且腐らし、日没より五分間もたゝずして恐ろしき冷濕の氣立のぼりて人の髓に滲入す。アルベルト、ナイアンザ湖には猶七十哩を隔て、井クトリア、ナイアンザ湖は二百哩の彼方にあり。十月には、通譯官を兼ねし醫師病んで死し、身近く使へる僕も死し、ゴールドン又瘡を病み、ついで肝臓を病みぬ。然もゴールドンは病に得たる休養の時日を利用して、施政上の經營をなしぬ。奴隸捕獲者をば已に手當り次第に夷げ、ダフフリーに潛み居たる殘黨もカアツームに追ひ下しぬ。蘇丹よりダフフリーに到る屯所の連鎖は已に大略出來し、郵便も定期に來着し、白ナイル一帶の地殆ど靜謐に歸しぬ。ゴールドンが暗黒大陸の中央に過せる第二年の事業は略右の如くなりき。斯くて一八七五年は寂寞として暮れぬ。

一八七六年正月ゴールドンはウンヨロ國王を處分するの目的を以て、ファセリーを發し、ナイルに由らず、道を東にどり、ファチコを経てフォエイラに赴きぬ。ダフフリーよりフォエイラに到るの間は、寂寥たる大澤

の地、濕氣骨に透り、限りなき千荆万棘にゴルドンの着たる衣服は寸裂せられ、小敵には夥しき蚊子の軍あり、巨象またしばく道に當れり。ゴルドン瘡疾未だ癒へず、夜は殆ど睡らざりしも、氣を鼓して進み、終にフイエアに達しぬ。其と聞知せるウンヨロ國王カバレガは匆々に出奔したれば、ゴルドン即ち先の赤道總督ペーカアの目代なりけるリオンゴを以て王とし、諸處に戍を置き、二月ダフフリーに歸れり。ゴルドンは殆んど寂寥を感じる間もあき程に多忙なりき。河を上下して、ラドヨリダフフリーに到る屯所の組織を更め、郵便制を改正し、土人を愛撫するの勞はもとより、彼に代る可き下まわりの役人なければ、糧餉の輸送分配、會計簿の整頓、兵卒及び兵器の世話、水陸百般の細務細件、さては汽船小艇の修覆までも自づから手を下し、朝も第一に起き出でてなまけ勝なる部下の眠を貪るを呼びさましぬ。

左る程に困難を極めし汽船の陸上輸送やうく終り、フオラ瀑布の上

流にて區分せる汽船の組立も出来たれば、アルベルト太湖はさわりなく到る可き時となりぬ。ゴルドンはアルベルトの初週航の榮譽を慕僚ゲツシーに譲りつ。四月末に到り、ゲツシーは週航を終へて、報ずらく、アルベルト湖は想の外に小さく、東西五十哩、南北百四十哩、南端は沼澤にして、沿岸の土人は敵心をさしばさめりど。已にしてゴルドンはダフフリーを發して、細かに附近の地理を觀測しつゝ、徐ろに溯りぬ。彼は種々の觀察をなせり。土人の服裝の事につきては即ち曰く、アルベルト湖に到るまでのナイル河畔の種族は全然裸体なり、此處を過ぐれば申譯に少しばかり衣物を覆へるの地あり、ついで全然衣服を纏へる種族に會ふナイル種族の一奇質とも云ふ可きは、毫も裸体を羞ぢざるに拘はらず、身体も風俗も甚だ清潔なりと。

七月二十八日ゴルドンの乗れる十馬力の小蒸氣は、ババイラス草其他あらゆる浮草の茂れる川淀小嶋を縫ひて、一碧鏡の如きアルベルト太

湖に及び出で、やがて井クトリア、ナイル(註、井クトリア湖よりアルベルト湖へ流るる川)の落口に到りぬ。是れより十月に到るまで、ゴルドンは太湖地方を縦横に舟行徒歩して、地圖を作り、屯所を設けぬ。地もど高原、河流之を鑿つて恐る可き大壑を作り、高原には長草荆棘野葡萄其他あらふる蔓草茂り、水邊には水草夥しく茂りて殆んど幾哩も眞の河岸に達し難し。止水夜マラリヤを吐き、烈日と暴雨はかはるく、行客の頭上より注げり。ゴルドン家信に認めて曰く、蕭條凄慘の地、夥しき冷露到る處に浸入す……其寂けさ寥しさ、君が想像も及ばざるなり。上帝の扶助し玉ふにあらずんば、誰かよく耐ふるを得んや。實にいのちどりとば斯事あり。感謝す。生は頗る健全、病臥は至て稀にて、其も唯暫時の事のみと。アルベルト湖の北端より東の方フオエイラの屯所へ約七十哩。ゴルドンは汽船を井クトリア、ナイルのモルチン瀑の下に乗りすて、降りしきる強雨を冒し、大壑を陟り、密林を穿ち、野葡萄葛藟の網をくぐり、八日を経てフオエイラ

に達しぬ。其れより井クトリア、ナイルを溯りてフオエイラを距る七十哩。ウンヨロの首府ムルリー屯所を檢分し、更に陸路をどつて井クトリア太湖の方へ進む八十哩。一には使者の報告によつて其地利の甚だ佳からざるを知りたる爲め、二には太湖に瀕するウガンダ國王(註、王は

年有名なる阿布利加大探險家スタンリーに説かれて基督教信徒となれる由を宣言せり。さきにゴルドンがウンヨロ王を追拂ふやウガンダ王は書をゴルドンに送りて之を宥め、且つ君は舟をナイルに浮べて西北をされ、余は東南をさらん、斯く)と争ふを欲せざりてウンヨロを中間に置いて、互に和親の交をなさんと云へり

し爲め、井クトリア太湖の附近に屯所を設くるの經綸を中止し、歩をかへしてマングンゴ屯所に到りぬ。其管下赤道州の最南部なる太湖地方の探險、測地、屯所整頓の事業は、こゝに於ては、終を告げたり。

十月六日ゴルドンは太湖地方を發し、カイロ府を指して北歸の途に上りぬ。自ら其心事を列擧して曰く、

肉体之安樂氏——至て倔強の紳士也——曰く、卿はよく爲たり、十分爲たり、歸るべし、歸りておどなくして、最早危を冒すなかれ。

理屈君曰く、斯様なる政府の爲に此上土地を開くも何の益あらんや。現に今有つ土地にても已に彼等の手にて扱ひきれぬ程なり。今退隱せよ、而してムテサ(註、ウガンダ王)や傳道會社との喧嘩を避けよ。

然るに無名氏——余は其何者なるやを知らず——は曰く、將來の出來事には眼を閉ぢよ、其は上帝に打任せ、全く彼土を兩湖に至るまで開くべき事業を爲せ、埃及王の爲めにせず、埃及政府の爲めにあさず、盲目的になせ、信仰をもて之を爲せ。

託宣もまた曰く、決斷は埃及王の傾向次第にせよ。王とハまれと望まば、即ちとハまれ。冷淡あらば、猶豫なく辭し去れ。

十二月二日、ゴルドンはカイロ府に着し、首相セリフバシアまで辭職の意を漏らし、基督降誕祭の夕倫敦に歸着せり。

ゴルドン傳の一著者フオルブス氏の曰く、ゴルドンが赤道州を治めたる(三年未滿の間)に、其成就したる所は、ハ左の如し。彼はカアツームよ

り、并クトリア、ナイアンザ湖の附近に到るまで、白ナイルの地圖を作りぬ。彼は白ナイルに於ける奴隸貿易に殊死の打撃を加へぬ。彼は、ナイル谷の土族の中に信任と平和とを復し、今や彼等は臆面なく牛肉、玉蜀黍、象牙などを各屯所に持來りて賣るに到れり。彼はゴンドコロと太湖間の水運を開きぬ。彼はウガンダ王と満足なる關係を作りぬ。彼は行政區を作り、また互に安全なる交通を有する堅固の屯所を建てぬ。彼は埃及王の大藏省に一廉の歳入を寄せぬ、而して此歳入は壓制を用ゐずして得たる所なり。長髮賊の亂は、ゴルドンの將才を發揚し、赤道州は、ゴルドンが博愛的、並に實際的施政の才を明證す。

## 第九章

## 蘇丹總督

赤道州總督の三年間、地方經營、奴隸勦絶、及ぶ限りの力を竭せるにも拘はらず、ゴルドンは毎に思ふまゝに手腕を揮ひ成績をあぐる能はざるを齒痒く思ひぬ。蓋埃及王はゴルドンを信任せざるにあらざるも、カアツームにはゴルドンと仲悪しきイスメイル、ヤクープが蘇丹本部總督として躡れるあり、其他中央地方の別なく埃及の官僚多くゴルドンを妒み奴隸賣買に加擔する者あれば、此が爲に掣肘せられ、水さゝれて、折角の手腕も伸ぶるに由なかりしなり。されば赤道州經營の一と先づ終れるを機として、退かむと欲し、英國よりカイロ府に打電して、辞任を請

ひぬ。然もイスメイル王はゴルドンの頼む可きを知りたれば、肯はず、折角、卿と寡人と蘇丹にやりかけし事業を成就せずして此まゝ退かむとは情無し、是非に歸任せられよ、と返電しつ。ゴルドンも思案を定めて、一八七七年一月盡日、五週の滞在の後英國を發してカイロに赴き、王に謁して陳情する所あり。王即ちイスメイル、ヤクープを免じ、ゴルドンを以て蘇丹全部の總督となし、與ふるに其土に於ける全權を以てし、書を賜ふて曰く、

寡人は卿が尊敬す可き品性と熱誠と既に寡人に盡せるの大功勞を諒とし、こゝに蘇丹、ダアフォル、及赤道諸州を合して一大省とし、卿を總督として治めしむることに決しぬ。斯くて卿が治む可き邦土は極めて廣大なるに由り、卿の下に副總督三人を置く可し。蘇丹本部一人、ダアフォル一人、紅海沿岸及東部蘇丹一人………こゝに卿が注意を促さんと欲する二件あり。第一は奴隸勦絶、第二は交通機關の改良。猶



アビシニアは蘇丹と境を接すること頗る長きに渉るを以て、卿が到らむ時宜しく仔細に事情を視察す可し。寡人は卿に與ふるに、事宜によりアビシニア政府と談判を開き、彼我爭論の件につき協定するの權を以てす。

三年の赤道州經營に終りて、三年の蘇丹經營は始まりぬ。前三年の舞臺は白ナイル上流一帯の地に限られしが、後三年は赤道州を唯一部分と做して、其管轄の區域は、東の方紅海及アビシニア境より西はコルドフアンダアフォルの古回々王國に到り、北はヌビア沙漠より南は太湖地方に達し、東西一千二百哩、南北も長きは一千二百哩の上に出でたり。水の赤道州は舟の支配なりき。沙漠の全蘇丹は駱駝の背より治めざる可からず。

幾個の難題は新總督を待ちて横はりぬ。(一)アビシニアとの葛藤。ゴールドンが赤道州に埋れ居りし間に、埃及王は英國に蘇士運河株を賣りて得

たる四百萬磅の金を懐にして、アビシニア境のボゴスを併せ、更に進むでアビシニアを侵せし爲に、アビシニア國王ジョン二世と衝突し、埃及の遠征軍は勇敢なるアビシニア人の爲に非常の大敗北をとり、輜重兵器は素より夥しき金貨を棄て、走り、あまりに其金貨の夥しき爲め、アビシニア兵は賈貨なるべしと思ひ、數十枚の金貨を一枚の銀貨に換ふる程なりき。埃及王大に氣色を損じ、更に雪辱の軍を出せしも、再び大に敗れぬ。ボゴス王ワラド、エル、ミカエルは一たびアビシニアにつき、また翻りて埃及につきたるも、反覆はかり難きものあり。此ボゴスの處分をつけ、アビシニア國王と敗餘の談判を首尾よく行はむは、一朝夕の勞にあらず。加ふるに、埃及軍の大敗は、鼠火の如く蘇丹全州に走りて、土耳其人恐るゝに足らず。亞刺比亞人の日再び到來せりと云ふ感を爆發させ、(二)ダアフォルに一大叛乱起りて、埃及政府より派遣しある諸處の戎營を圍むこと急なり。(三)其南方の奴隸窟には、奴隸大王ゼベールの王スレ

「イマンが大軍を擁して今にも叛かむずる氣色を示せるあり。而して時恰も露土の戦争に際し、埃及よりも本國土耳其に援兵を出したれば、蘇丹の成も至て薄ふなりぬ。新總督は如何にして斯難題を解かむとする乎。ゴルドンの曰く、余は唯獨り行く、無限全能の上帝余を指揮し、余を導き、玉ふ喜ぶ可し、上帝を信じて何事をも恐れず、成功の確かなるを感ずること。」

一八七七年二月、ゴルドン大佐は先づアビシニアの件を處理せむと、カイロ府を立ち、紅海を過ぎて、マツソフより上陸せり。已にボゴスの首府近くなれば、騎歩兵二百人出で迎へ、鼓樂舞蹈の歡迎の中に蘇丹總督はケレンに入りぬ。質朴なる總督は擧聲して曰く、

余は鄭重至極の護衛を附せらる。今余が坐し居る此樹の六碼四方には、六七名の番兵あり、其番兵の周圍には他の者共環をなす。併し彼者共はやがて眠りて仕舞ふことなれば、余もひづからずして居るなり。

眞實何人も余の如く高き地位に押上げられたる者はなからん。うるさきと限りなし。余が駱駝より下りむとすれば、八人十人して病人の如く余を扶け下ろす！余が歩行すれば、何人も下乗して歩行す。それ故、余は脆然再び駱駝に上る。

ゴルドンボゴス王と會見して、協定する所あり、之を二三種族の知事に任じて、屬邦の義を固ふせり。時にカアツーム以西の形勢甚だ急なるの報に接したれば、アビシニア王が一二屬地の會長と戰鬥まさに酣にして、當分埃及領に攻め入る氣遣なきを幸ひ、書を王に送りて休戦を約し、駱駝に乗りてボゴスを發し、過る所の屯營毎に、令を下し、書翰を書き、請願を聽きつゝ、カアツームに向ひぬ。時は四月の末、一年一度斯地方を濕す強雨期未だ到らず、地は燥きて、日中は岩に影なく、拭へども汗は駝背にしたゞりつ。ゴルドン行くく、其前途の困難を想ひ、斯く認めぬ。「上帝の攝理により、可恐的刻苦を以てせば、余も二三年間には、相應の陸

軍と、歳入と、平和と、増加せる貿易とを有する一個の好領土を作るを得、  
 奴隸劫掠を禁止するを得んか。然る後余は歸國して寢に就き、毎日正午  
 迄は起きず、一哩の上は歩まざる可し」と。

斯くてゴールドンはカアツームに着きて、五月五日祝砲聲中に蘇丹全州  
 總督就任式を行ひぬ。新任總督は、就任演説をなすの先例あり。ゴールド  
 ンの演説は極めて簡單なりき、曰く、天祐に依り、余は權衡を平らに握ら  
 びと欲すと。民皆大に喜ぶ。蘇丹總督は、勢殆ど埃及王に亞ぎて、總督府は宏  
 壯美麗を極め、僕從二百人に及べり。ゴールドン任に就きて、カアツーム政  
 府の空氣頓にかはりぬ。新總督は、貧民を賑はし、三日の内に、私財千磅の  
 餘を散じぬ。先代には一日に鞭刑を受くる者十五人に下らざりき。新總督  
 は之を全廢し、揚言して曰く、一大苦痛斯土より除かる。——鞭笞の代は  
 已に止みぬ」と。先代には、總督に謁するに、下まはりの者に賄賂を要し、一  
 官一職皆賄賂と引かへに與へられぬ。新總督は盡く之を禁止せり。ゴル

ドンバシアが民を愛してよく訟を聽くと云ふ評判は、ゴールドンが赤道  
 州にありし頃より已に斯地に高かりき。今や其人を得て、從來無告の民は  
 先を争ふて來り訟へぬ。新總督は便宜の爲、總督府の戸前に一の大なる  
 陳情函を出し置き、一切の請願嘆訴を投入せしめ、一々自ら檢して速や  
 かに處分を下しぬ。良民を苦しめ、國境を成りながら奴隸商隊を看過せ  
 る〔註、土耳其の不規則兵にして現今支那に於ける董福祥の兵の如きもの〕六千人を解散しぬ。カ  
 アツームの兩ナイルの合流地にありながら、飲用水に乏しく一々遠方  
 より運び來るの不便を見て、速やかに良水供給の設計を立てぬ。就任以  
 來僅に二週間、新總督は疾風の如く改革又改革を斷行して、蘇丹の首都  
 を且つ驚かし且つ悦ばしぬ。憚びざりしは、傲岸奸黠終にゴールドンに黜  
 けられし副總督のハリッドバシアと、兄イスノール、ヤクープの免官を  
 憤りて總督府の窓百三十を盡く打破り、ある程の臥榻を寸々に劈きて  
 去りたりし前總督の妹と、私を營む奸官汚吏の輩のみなりき。

カアツームに在ること僅かに半月、五月十九日新總督は駱駝に乗じて、西の方ダアフォルの叛乱地に向ひぬ。三ヶ所の戍營の圍を解かむ爲め、二ヶ月前已に一隊の援軍を遣はしたりしが、今自ら叛乱の中心に乗り込みて、一舉に掃蕩せむとするなり。六月七日には、已に四百哩の砂漠を踏破して、ダアフォルの境に入りぬ。途中書を家郷に寄せて曰く、

若し生命だにあらば、本年は五千哩の騎行をするつもりなり。余は全くのひとりなり、余は之を好む。余は世人の所謂大宿命論者になりぬ。然も余は上帝の余を率ゐてあらふる困難を通過せしめ玉ふを信ず。寂寥たる砂漠の大は、人をして人力の如何に空しきかを感じしむ……余は今駱駝に慣れぬ。驚く可き動物、足踏静かにふわりとして、乗心地いと好し。

乗手が恐ろしき氣早の總督なれば、駱駝も非常の逸物にて、刺繡せる土耳其都督の美々しき正服を着て新總督が疾風の如くフオギアに乗り

込みし時は、隨行の護衛兵も秘書官も遙かに後れ、歓迎はおろか、守門の兵士が銃を捧ぐる暇もなかりき。同行の土會は「まるで電信」と云へり。ゴルドン傳の一著者バットラル氏の曰く、

埃及史ありて以來、未だ曾て斯くの如き異常なるバシアの振舞を見ず。フオギアの知府、其餘の官吏、皆全く間にあはざりき。實は總督の一行近づきたらば直ぐ知らせよと數名の見張を出し置きたる次第にて、フオギアの四圍は漠々たる平原、非常の遠距離までも見通しなれば、決して不意をうたるゝ氣遣なしとせられしなり。斯る處に突然、銳き亞刺比亞眼は東の方幾哩の彼方に二個の斑點を認めぬ。好々、此は先觸れの者ならん。今一時間もたちて知府はゆるく、禮服を着用す可く、兵卒一同は日没頃にゆるく、隊伍に就けば可ならん。偕彼二斑點は次第に近づき、近づきぬ見れば、先きなる駱駝は、美々しき軍服着たる色蒼白き人をのせ、次ぎなる姿はカバプ族の會長なり。全體此は

何事ぞ、何でもなし、唯此廣大悲寥の地に、一個の新人が入り來れるなり、十九世紀の最も激烈なる精靈が、土耳其最高武官の美服着て、阿布利加奴隸制の堅城に迅雷の打撃を加へんとて來れるなり。

ゴルドン已に叛乱の中心に入りぬ。手下には唯其處此處より寄せ集めたる五百の弱兵あるのみ。土族の中には、稀に心を寄するものあれど、其れすら素より待みにはなり難し。ゴルドンの書翰は其衷心の苦を表す、曰く、余は切に祈りぬ。然も刻下の状態は吾心を痛ましめぬ。余は死を恐れず、然も吾信仰の乏しきより、死後の結果——全地の蜂起せむことを恐る。然も死中活を見出すはゴルドンの常なり。彼は斯大難題を解く可き幾條の緒を認めぬ。ダアフォルの種族も、奴隸商も、齊しく叛旗を掲げたれど、兩者の間は互に相反目せること一なり。ダアフォルの叛乱は埃及人の秕政、バシバゾク兵の乱暴に因ること多きを以て、其因を正して其果を濟ふの望あること二なり。ダアフォルは砂漠の地、三十哩乃至

六十哩を隔て、綠樹青草に圍まれたる井水あり、井を占領すれば以て附近の死命を制するに足ること三なり。必しも豫め三慮を費やさず、局に臨むで咄嗟に手段を定むるゴルドンは、右に恩を揮ひ、左に威を提げ、斯處に行いては圍を解き、彼處に走せては井を占領し、彼種族をば温顔以て慰撫し、此種族をば威嚇し、奴隸を解放しては、兵士に訓練し、三年俸給を受けずして寇盜化せる戍兵を解散し、例の早足の駱駝は、六月より九月に到るまで、蠡斯の如く、ダアフォルを八方十方に駆け廻はりぬ。六月ダアフォルの境に入りて、七月の初十二日が間にオスチヤンガより一百六十哩を南に馳せて、首府ダラに到りて、六ヶ月の圍を解き、八月の中旬には、一百三十哩を西北に馳せて、エルファッセルに到り、九月一日には、再び、一百三十哩を東南に馳せて、ダラに復へり、其九日には、ダラを發し、一百八十哩を東南に馳せて、赤道を去る十度のシヤカに到れり、北にありと思へば、已に南にあり、東に向ふと見れば、西に見出す疾風迅雷

の運動に氣を吞まれ、よく撃ちよく撫する其手腕に覆はれて、ダアフォルの叛乱は三月が間に息を屏め、奴隸商も愕然として堅睡をのみぬ。戦争と饑饉と暴れたるダアフォルの惨状は言語に絶せり。人畜の死骸は路傍に悪臭を放ち、生けるも草を食ふて腹部のみ徒らに大に手足は骨になれる者少なからず。就中奴隸群の婦人小兒の砂漠に棄て置かれて、餓渴に苦む者夥しきを見て、ゴルドン慘爾として曰く、余は肅むて云ふ、斯等の民の苦痛を救はん爲には、あへて吾生命を捨てん……成程余は馬鹿ぢらん、然も余は斯等の民の一人の苦痛をも涙無しに見る能はざるなりと。

ダアフォルの叛亂を鎮定し終りて、總督は専ら奴隸商の處分にかゝりぬ。奴隸大王ゼベールは目下君士丹丁堡にあるも、其子スレーマンダアフォルの南に虎踞して、儼然王の如き威勢を振ひ、已に一たびゴルドンの嚴令によつて恭順の一書を送りたるも、反跡掩ひ難く、今また大軍を

提げてダラに迫るの報あり、其報を聞く、とひどしく、ゴルドンは駱駝に飛び乗り、八十五哩を一日半にうたせて、蕩地にダラへ乗り込みぬ。例の如く些少の護衛兵は數哩の後に落ち、駭きたるダラの民はやゝ久しくたちてわづかに祝砲を放てり。ゴルドンの書翰の一節に曰く、氣の毒なる吾護衛兵よ、何處にぶらつき居るぞ、想ひても見たまへ、垢だらけの赤顔の男が唯ひとり蠅だらけの駱駝に打乗りて、突然廳衝に着きたる光景を、ど、スレーマンの大軍は陣を張つてダラを距る僅に三哩の地にあり。ゴルドンは如何に此間に處したる乎。

九月二日ダラに於て

長馳の後、食事もなさず、併し夜は穩かに過して、苦を忘れぬ。天明余は起きて、埃及王の與へし黄金の鎧を着け、出で、余が兵を見、然る後馬に上り、吾バシバゾク賊の護衛にて、三哩隔てし他の賊の陣に到る。ゼベールの子出で迎ふ、二十二歳の立派なる若者なり、伴ふて賊の隊中

を騎過す。賊勢約三千人——大人若者をあはせて。余は陣中の一天幕に乗りつけぬ。頭領一同余が乗込み來れるを見て呆氣にとられて居たり。余は水一盃を喫したる後、ゼベールの子に眷族同道余が廳に來れど命じ置きて歸りぬ。

彼等一同來り環をなして座したれば、余は一種別誂の亞刺比亞語にて、余の考を云ひ聞かせぬ。即ち彼等は謀叛を企て居る事、余が之を知り居る事、今最終條件を彼等に與ふる事、即ち兵器を棄て、解散す可き事、彼等は默然として聞き、然る後余が言を勘考せむとて去りぬ。彼等は今しかた書を送りて恭順の意を述べたり。余は上帝に感謝す。毎に先手を取つて氣を以て克つ。ゴルドンは斯回も亦きはどき勝を制しぬ。ゼベールの子は其夜總督を夜討にかけむと欲したるも、他の頭領多くは聽かず。ゴルドン早く其機を察して、諸頭領と人別談判を開き、巧みに羽翼を殺ぎたれば、傲岸なるスレーマンも是非なく屈して、三日の後南に去れり。ゴルドン家信の一節に曰く、

ダラには弱兵二千あり、兵怯若弱、戦争とあらば寸毫も勝利の見込なかりき……敵勢は約四千人……斯等武装せる者共を處するの困難は幸に想像し玉へ……一方には粗惡の要砦、畏縮せる守備兵、がた／＼震はぬ者は一人もなし、一方には軍馴れたる剛健にして思切つたる者共、射術精妙にして野砲二門を有す、斯る情態にて奴隸商等が戦ふ可きか否歟疑問中にありし三日間、生は五百磅献上しても非奴隸協會(英國の)をダラに置きたかりし。其時非奴隸協會が何と云ひたる可きか、聞きたきものなりし。斯く云ふは生が自負にあらず、生も此世の中、一切の干繫、一切の快樂、名譽、光榮には最早死して、年久しきことなれば、生が心配は自己の生命の爲ならずして、ダアフォル其他の地方に於ける吾羊(民)の爲なる事は、神知り玉ふ。白狀すれば、生も斯談判其他云々の長きには聊倦みたり。併し、一個可愍の黒皮に彈

丸の穴明かむより、倦憊疲勞は、まだくまされり。

尙其上に斯様な事あり、生が全く信任し多額の俸給を與へ置きし黒人の書記、彼此と生を動かす爲め三ヶ月内に三千磅以上の賄賂を受けぬ、云ふまでもなく、報は彼に落ちたり。

ダラの一齣に引つゝいて、更に危険あるシヤカの一段は來りぬ。シヤカは奴隸大王の根據地、其奥には更に六千の奴隸商あり、凡そ殺人犯、盜賊其他あらゆる悪党の寄り集りては奴隸劫掠を行ふ巢窟なり。ゴルドンはスレーマンの招に應じ、其地に於て親ら各頭領の恭順を受けむと、大胆にも少々の兵をひいて、九月九日にダラを立ち、百八十哩を六日に過ぎて、九月十五日シヤカに着きぬ。スレーマンは各頭領を従へて出で迎へ、ゴルドンを父と稱して、其家に請せり。此は獅子の窟に入るなり。然もゴルドンは其請を容れて、二日の間スレーマンが家に眠食しぬ。スレーマンはさきに總督の爲に威伏されしを如何にも口惜く思ひ、美麗の禮

服をぬたり、知事の官を要求しなご、種々の難題を持出しては總督を悩ましたるも、ゴルドンは彼に告ぐるにカイロ府に行きて埃及王に謁見し十分に忠實の誠意を表したる上ならでは、其要求に應じ難きを以てし、徐に其強頂を抑へぬ。ゴルドンは寧ろ此粗剛野鄙なる若者を好み、熊の兒々々々と彼を呼べり。滯留中、ゴルドンは家郷に書き送りて曰く、

余は今ゼベールが子の家にあり。彼は從來何人をもれのが前にては坐せしめざりしことなれば、余がすべての者を馴々しく待つを嘸奇怪に思ふなるべし。彼は今廊下に坐してあり——蓋し余が憐愍を惹起さむとなるべし。併し些ばかりの喫辱は、彼が爲に毒にはならじ。あゝ彼は如何ばかりの面倒を余にかけすべての人にかけてしぞ。

また曰く、

彼は頓斗行儀と云ふものを知らず、躰を崩しつ、欠伸しつ、素足を撫で、見つ、裏店の子供の様なものいひをなす。過去の事をば素知らぬ顔



して、彼は歸途の費用を要求す！如何にひどい言を云ひても、彼は平氣なものなり、

不敵の總督は熊穴に飛び込みて、斯く熊の兒を叱りつ、撫でつ、二日の後、悠々ど此處を立ち出でぬ。ゴルドンの勇氣は兇暴なる奴隸商等を痲痺せしめて、滯在中はあへて、發せざりしも、實は彼を俘にせむと隠謀し居たる由は、後に到りてあらはれぬ。ゴルドンは實に再び虎口をのがれしなり。

第一回ダアフォル征伐こゝに終り、九月十七日ゴルドンはシヤカを發して北歸の途に上りぬ。さきに赤道州を治めし時、其千辛萬苦の水泡に歸する所多きを見て、斯地方には何の好事も成し難し、寧ろ遠征なかりしに、苦かむやと歎せしが、今砂漠をわたりつゝ、駝背につくづく四ヶ月の経過を思ひ、奴隸制の根深くして、從て殆れば從つて生じ、限りなき苦心經營も宛ながら砂漠の足跡の消へて痕なきが如くなるを感じ喟然

として曰く、

余は人間の力にて之を廢止す可き道を知らず、吸墨紙に染みしイン

キの再び落ちあむ時にこそ、奴隸の制も斯地に止まむ。

彼は英人の眞實奴隸問題に注意するもの少なきを憤りて曰く、

余は卿等を信せざるなり……世間の所謂基督教は冷淡無味なるものにして、何人の益にもならず。英吉利の民は何よりも食事が大事あり……「いや困つたものですよ、さあもつと鮭を召上りませんか」位なものなり。

故國の民は冷淡にして、斯土の積弊は山の如く抜く可からず、徒らに勞しまた勞して、終に何を成さんとする耶。曰く、

余は力の及ぶ限り直往す、余は自己の弱きを感じ、全能の上帝を仰ぎ、過度の心痛をなさず、事の成行を上帝の聖旨に委ぬ。

彼はイスメールの知遇に感じて、何處までも盡さんと欲しぬ曰く、

何等のものを勸めらるゝとも、余は斯政府を見すてざる可し。其は實に卑怯なればなり……余は一命を擲つて、彼註イスマール王王を扶けん。

彼は唯一人なり、而して唯一人なるを好みぬ、曰く、

請ふ余が爲に斯る人物を見出せ、即ち錢名、榮譽を眞に塵芥の如く思ふ人、再び故國を見ながらぬ人、善の源惡の制裁者として、上帝を仰ぐ人、身軀健全、精神活潑、而して死は苦界を脱する所以と觀する人を見出せ、余はこれを助手となさん。若し見出す能はずば、幸に余に一任せよ。自身を携帶するだけにて、已に十分なり、余は此上に荷物を加ふるを欲せざるなり。

十月中旬、ゴルドンはカアツームに歸着せり。ダアフォルに於ける新總督の驚く可き評判に舌を捲きたるカアツームの官民は「總督來」の呼聲に、肅然と容をあらためぬ。總督はカアツームに一週間とゞまりて、緊急

の事務を捌き終り、此回はワヂ、ハルファよりドンゴラへ鐵道を延長して、埃及及蘇丹の連絡をつくるの件につき、親しく其地に赴きて設計の如何をも見繕はむと、カアツームを發して已にドンゴラあたりまで下れる折から、アビシニアの軍東蘇丹を襲ふと云ふ飛報に接して、電馳カアツームに引きかへしぬ。引かへし見れば、アビシニア入寇は虚報なりしが、例のボゴス王のワラツド、エル、ミカエルがまた國境にむたゝを始めしなりければ、氣早の總督は直ちにカアツームを立ちて、ボゴスに到り、十人の兵を帥ゐて、ワラツドが七千人を擁してふくれかへれるヘルラル山中に乗り込み、何時々々までもどちらつかずにあらんより寧ろアビシニア王に罪を謝してもとの通りになれよかしと勸めたるも聽かざれば、月一千磅の約束にておとなしくさせ、其れよりマツツワに到りて、此處にアビシニア王まで申込み置きし媾和條件の返事を待ちけるに、王の分別容易に定まらずと見へ久しく音の沙汰もなければ、即ち

スアキムバアベルを経て一先づ歸途につきぬ。斯くて一八七七年も行旅に暮れぬ。斯一年の間に、ゴルドンは約四千哩の砂漠を度りて、一人の力には不可思議とも云ふ可き事業をば成したり。骨折は非常なりき。家信に曰く、(駱駝に乗りづめありし爲め)余は心臓肺臓を搖り亂しぬ……余は別處に在らんよりは寧ろ斯地に在るを好めど、斯生涯を送らんよりは寧ろ死なんことを欲すと。

蘇丹總督の第二年、一八七八年の初、ゴルドンはバアベルよりカアツムに歸らむと已にナイル河畔のセンチデーに到れる時しも、埃及王より電報かゝりぬ。曰く、速やかに來りて寡人を助けられよ。差迫りたる困難の場合、卿ならでは忠實に寡人を助け得る者なしと。差迫りたる困難は、他なし、豪奢なるイスメール王が借り散らしたる負債の實を結び、英佛の策士が貸金攻の方略首尾よく圖に當りて、埃及政府は今や首も廻はらぬ有様とありけるなり。報に接して、蘇丹總督は直ちにカイロ府に

向ひぬ。途中にして彼は自ら六千磅の年俸を三千磅に、きり下げ、三月七日カイロに着するや、停車場より旅衣のまゝに王宮へと請せられ、イスメール王は彼を宴席に於て己が右に坐せしめ、外來の帝王皇族の用に設けられたるカスレル、クラーサの離宮を以て彼が宿所に宛てぬ。ゴルドンを肩を擧めて曰く、余の従者は皆呆然、余も呆然、却て吾駱駝をなつかしく思ふと。イスメール王の意は、ゴルドンを埃及財政調査委員長たらしむるにあり。ゴルドンも其意を諒して、盡さむと欲する所あり。其宿せる離宮の一室

(註、此は莊麗を極たる離宮の大廣間なり。四壁明鏡を列ねすばらしき金燭臺あり。斯會議より七年半を経て、カアツムを死守せるゴルドンを救はむと援軍英國よりカイロに着せし時、埃及王は斯室に於て大に將士を宴し、燭照り酒流れ興高く湧きて、遅くも五月にはゴルドンと打連れて歸らむ、いや五月を待たじと皆々意氣盛に昂れる折し

も、凄じき響あり廣間の一端忽ち暗ふなりぬ。一吹の風も無く、近寄る者も無きに、大理石臺に鑄つけたる百枝の大金燭の忽然根より折れて微塵に碎けしなりき。一座眼を見合はしぬ。而して援軍は再びカイロに歸りしも、ゴルドンは終に歸らざりしなり。ゴルドンが埃及を破産滅亡より救はむと苦心して敗れたるは此室あり。怒罵嘲笑の重圍に陥りて、何人も余を笑ふ、然も余は關せざるなり。余はいたく憊れ、安息(死)を希ふ、然れども余が上帝の命に給ふ事業を成し了るまで、其安息は來らざるべし。余は滅多に人にも會はず、最期の來るを希ひ希ひつゝ、濫々此處に留まる」と書きたるも此室なり。

にゴルドン蘇士運河開鑿者レセツブ、其他の委員相會して種々協議を凝しぬ。ゴルドンの提議は極めて簡單なりき。(一)一切の税源より入る可き眞の収入を精細に調査する事。(二)斯調査は、數ヶ月を要す可し、調査中は從來猶太人及び歐洲株主に暴利を拂ふ爲多くは、無俸給にて棄て置

かれし官吏雇等に俸給を渡す事。(三)調査中は、期限の利札仕拂を停止し、結局一切の負債の利子を七分より四分に減する事。ゴルドンは已に英國官吏の夥しくカイロに入り込みて、貧困ある埃及政府に夥しき俸給を拂はするを慨き、先づ自から俸給を半減して、無言の教訓を與へぬ。(註、

前年一月の家信に曰く、王陛下は生か爲にリヤ、ハルファまで一隻の流船を遣はし玉ひたれば、生は其費用として八十磅ばかり拂ひぬ。斯くするはカイロに於ける新來の雇英人等に俸給を食ふなけれ云々を聞せん爲なり。英人の多くは一年三千磅を得、或ものは五千磅を受く。生は斷言す、我々は埃及の血を吸へるなり、我英人は非常に強慾なり云々)止めよ、止めよ、直性漢よ、欲を知らぬ不通者よ、卿は餘りに眞面目なり、熱心なり、卿の腸はあまりに奇麗なり、卿の心はあまりに涼し、卿は至緊至要の利の一字をば忘れたり、英國人としてあまりに埃及の爲を計りたり、ゴルドンの一言は忽ち群議沸騰の相圖となりぬ。カイロ府註在英佛外交官雇外人、蘇士運河株及び埃及國債債券所有者、内外諸新聞、果ては我國を憂ふること一外人のゴルドンにだも若かざる埃及のバシア連中までも、或は馬鹿らしと嘲り、外交の魂胆を知らぬ奴かちと笑ひ、愛國

心なしと罵り、著者云、朝鮮顧問となりし日本人にして、防穀令を辯護し、京釜鐵道の利益を専ら朝鮮政府に占めしめむとする場合を想ひ見よ我々に損せよと云ふかど憤り、取る可き俸給は取らねばならずと躍起となり、抗議、隠謀、攻撃の限りを盡して、埃及王を刺戟し、一ヶ月たゞざるにゴールドンを蘇丹へ追ひかへしぬ。ゴールドン苦笑して曰く、

埃及王は最後の場合となりて、全く余を棄て玉ひぬ。然も余は怒るどころか、却て此が爲に夥しき面倒を免れ得たるを喜ぶ……余は此狂言を笑ふ。余は何の禮遇も受けず、瀛車實を拂ひて、普通列車にて、カイロを立ちぬ。梟々として上りたる太陽は深き闇中に沈みぬ。余の失敗後は王陛下も余に壓さ果て、余を見るだに厭はしき容子を、あたりの者は直ちに見てとれるなり。余はカイロに於て、吾位置を鞏固にせむにはあまりに忌憚なく言つてのけしとあれば、此末如何に成り行くか知り難し。人若し、一個の人間に維れ頼る時は、一片の乾酪、一個の無花

果も、其人の消化に變化を來し、從つて氣分に變化を來すものなり。

また曰く、余は今一に民を裨益せむことをのみ思ふと。

斯くて埃及政府は滅亡の道に、ゴールドンは蘇丹の道に、相別れて、おの／＼其行路を辿りぬ。ゴールドンは其管内ある最東南の地を檢分せむと欲し、カイロより紅海を航して、亞丁の對岸セイラより上陸し、二百哩内地のハラアルに到り、此處にも亞刺比亞へ奴隸の運送盛なるを知りて之を打止むるの策を劃し、また此處の知事ラウフバシアは先年ゴールドンがゴンドコロより追ひやりし男にて、相もかはらぬ悪政を施し居たれば、また／＼放逐處分を施しぬ。カイロの一件以後は、ゴールドンも流石に忿々の氣抑へ難く、奸官汚吏の輩にいらひどく當り散らし、一ヶ月内に配下の師團長三人、旅團長一人、中佐四人まで追ひ出せり。

五月ゴールドンはカアツームに歸着して、漸く此處に腰を据へぬ。去年就任以來、西征東行雜れ日も足らずして、専ら政務を遂行する能はざりし

爲め、萬般の機關に狂ひを生じ、前年度の決算は二十五萬磅の歳出超過を示し、本年度の豫算は七萬二千磅の歳入不足を示せり。カイロ府よりは頻りに「金、金」と督促す。七月には去年ゴールドンの爲に威伏されし「熊の兒」スレーマン終に叛旗を掲げて、ダアフォルの南なるバアル、ガゼルの地方を蹂躪せり。刻下の事情カアツームを離れ難きを以て、ゴールドンは直ちにスレーマンが父ゼベール一家の財産を没収し、赤道州以來幕僚として信頼せるゲツシーを遣はしてスレーマンを伐たしめぬ。九月にはゴールドン熱病にかゝりぬ。其書翰に曰く、

廣々としたる淋しき家に、余は唯獨り病みぬ。余は家内を彼方此方ぶらつきて、幾時間も考へ、また考ふ。病に際して少しも死を恐れざるは、余にとりて大なる慰なり。余は此二晩程（熱にうかされて）吾腦中に無用の仕事を爲したることなし。まぼろしの請願書來る。返答す。また來る、また／＼來る。終には人をして惱亂せむとするに到らしむ。

病は痊へぬ。然も四邊の光景はますます／＼黯慘。スレーマンが叛乱はいよ／＼蔓延して、まさにダアフォルに及ばむとす。ゴールドンは乏しき兵を分つてゲツシーに援軍を送り、猶埃及に援兵を求むれど、埃及政府は援兵を送らずして、却て金を送れど答ふ。然も蘇丹の財政は困難を極めて、五十磅の調達も容易ならず。幸にボゴス王ワラッド、エル、ミカエルがアビシニア王に降服したる爲め、ゴールドンは一箇の厄介拂をなし、アビシニア王と其所謂「蘇丹の史丹」の間には聊か感情の疏通ありて互に使者を送り、和を結びたれど、境界問題は未だ容易に落着せず。ナイルの水に落日の影消へて暮雲千里平あるを望みつゝ、カアツームの官邸に唯一人座す夕は、殊に寂寞の身を壓するを感じぬ。曰く、退屈殆ど忍び難し、讀む可き書も乏しく、同僚とても無ければ、事務の上ならでは人に面會すること稀なり、余は殆ど絶へず嘔せむとす。病めるにはあらざるも、一種の嘔氣を催ふすと、斯くて此年の千辛万苦もナイルの川の水と流れてか

へらぬ一八七八年は暮れぬ。

蘇丹總督の第三年、一八七九年二月、ゴルドンは蘇丹の事に關し訊問の廉ありとてカイロ府に呼ばれたるも、前年度の租税を徵集しスレーマンの叛乱を鎮定するまでは是非とも蘇丹に駐まらざる可からずと陳じて、赴かず、同三月、ゲツシーを援けて、叛乱地を掃蕩せむと、ゴルドンはカアツームを立つて、ダアフォルに向ひぬ。またしても駱駝旅行は始まれり、はげしく駱駝を乗り廻はして、わづかに民を治むとは其述懐あり、三月は蘇丹の土用、暑氣の絶頂、過ぐる所は往々二百哩四方一滴の水無き地あり、三月廿七日、昔のコルドファンとダアフォルの境に達すれば、心あての井戸は殆ど涸れたり、四十頭の駱駝に十分の水ある可き豫算をせしに、二頭分にも足らず!!最近の井も一日半の行程を隔つ、而して駱駝は已に疲れぬ、徹夜進むで熱を避けざるべからず、疲勞は言語に絶しぬ、然もゴルドンは説意して行く、奴隸商等が引率し來る奴隸

隊を遮り、之を解放せり、奴隸の臭がするぞ、其木蔭を捜し、見よと或朝ゴルドンは隨行の書記を顧みぬ、書記は「否」と答ふ、捜し見れば、果してパンバゾク兵等が駆りて來れる一組の奴隸長草の中に隠れてありき、ゴルドン「パンバゾク」を鞭ちて追ひやり、奴隸を救ひ出しぬ、然も此は一枚のたまを以て一川の魚をすくはむとするなり、其書に曰く、九ヶ月足らずの間に、余等が差押へたる奴隸の數は二千にあまれり、然も此は全体の奴隸隊の五分の一にも達せざる可しと、奴隸の中には、三歳の子あり、裸体の婦人あり、慘狀殆ど名狀す可からず、ゴルドンは深夜駱駝の背に跨り、如何にして奴隸貿易を打止む可きか、とつくつく思案を凝しぬ、一たびは脾を拊つて名案を得たりと喜びぬ、思へらく、阿弗利加の西南地方より來る奴隸の蘇丹に入るには、必ずダアフォルを經——赤道州の通路は已に閉しぬ——ることなれば、(一)ダアフォルの住人は悉く居住免許を受けざる可からざる事(二)ダアフォルへ若くはダアフォルより

旅行する者は、自己及び其所屬者の爲に一々旅券を受けざる可からざる事(三)此規則違反者は禁錮に處し財産を沒收す可き事と云ふ法令を實行せば、奴隸貿易に大打撃を加ふるを得むと。然もゴルドンは此名案も、終に名案に終る可きを知りぬ。何となれば、埃及王の勅令は現に奴隸商を罰するに五ヶ月乃至五ヶ年の禁錮を限り、埃及隨一の政治家ヌーバル バシアはつい此頃も埃及に於ては奴隸の賣買は法律違反にあらずと云ふ電報をゴルドン宛に送しにあらずや。野蠻黑人のある限り、奴隸制を豫期する回々教のある限り、其回教徒の埃及王埃及政府が蘇丹を領する限り、百人のゴルドンが千人のゼベールを幽し、ゼベールは目下カイロに幽せられてあり、万人のスレーマンを殺すも、奴隸貿易は盡くる時ある可からず。ゴルドン歎じて曰く、奴隸賣買を撲滅するを得ば、今夜銃殺さるゝも遺憾なし。余が熱望する所實に斯の如し。されど如何に努力するも余は一向に此惡弊を制するの望あし。借こゝに一の疑問あり。

余は果してよく生命を犠牲としてコルドフアン及ダアフォルに留まる乎。若し覺悟を固めてかゝらば、余は斯貿易を撲滅し得べしと思ふ。貿易の根原は實に斯地方にあればなりと。然り、埃及國王にゴルドンあり、埃及内閣にゴルドンあり、而して蘇丹總督にゴルドンあらば、何事も思ふまゝに行はれむ。然れどもゴルドンは唯一人蘇丹にあり。蘇丹のゴルドンは手足を縛られつゝ、成し得る丈を成さざる可からず。

一行進むで先年スレーマンの虎口を遁れしシヤカに到るの前日、ゴルドンは勇壯なるゲツシーが寡勢を以て大にスレーマンの軍を破り、叛乱の勢日に盛まれるの報に接して、大に心を安んじ。翌日シヤカに着して、斯汚窟を一掃し、埃及官吏を残らず引揚げぬ。曰く、

斯等遠隔の地にある埃及人の政府は最劣等の盜賊政府にて、到底改善の望なければ、余は唯一の手段として彼等に退去を命じぬ。余は知事連の譴責を止め——無益なれば——カイロへ送りやることゝせ



り……奴隷貿易禁止を差措かば、斯地方の民には亞刺比亞人の知事が適當にて、歐洲人より寧ろ此方を快よく思ふは余が斷言するに躊躇せざる所なり。著者云、斯一句は六年の後に照應を見出す可し。五月初旬ゴールドンはシヤカよりカラカに到り、更に二百三十哩北へ返りてフアスセルに達し、また二百哩西に轉じてコルコルに到り、六月五日再びフアスセルに返へり。偶イスメール王より電報あり、事態重大、速やかにカイロに來り、寡人を救へ、どの意なり。さきには衆口に叫び立てられて蘇丹へ追ひやりたるも、まさかの時には、滿朝の臣僚にもカイロに雲集する外人にもゴールドンにまさる相談相手を見出し得ざりしなり。ゴールドンは即時に歸装を整へぬ。忽ち奴隷商とダアフニルの叛會ハラウンが徒と聯合まさ成らむとするの警報あり。即ち南に馳せて、六月十八日トオシアに入りぬ。

余はトオシアに着きぬ。奴隷商も奴隷も見へず。一切無之とアベル、ベーは云ふ。然も大脅迫を以て、間もなく奴隷商一百名、驢馬駱駝五十頭、奴隷三百人を差押へぬ。途中、鬪體の數夥し。此回の征伐中差押へたる奴隷の數は一千七百人に及ぶ。大抵女子供にて、皆々喜び合へり……ウムチャンガよりトオシアまで、約一週の間に、余等が差押へたる奴隷の數は五百乃至六百に下らず。過る一年半乃至二年の間、毎週々々此路を通過し居たる奴隷の數も大抵此に準すべし。而して此は皆余が在任中の事なり。今しがた差押へたる奴隷は、四五日も水を喫せず、恐ろしき慘狀をきはめたり。一八七五年——一八七九年中ダアフオルに於ける死亡を算するに、埃及人一萬六千、ダアフオル土人五萬之に加ふるにバアル、ガゼルに於ける死亡約一萬五千を以てすれば、總計八萬一千に達す。而して此は奴隷貿易の死亡者を除外せるもの、此(奴隷の死亡)は八萬乃至十萬にも上る可し。

ゴールドンはトオシア附近に夥しく落ち散りたる奴隷の鬪體を山の如

く積まじめ、奴隷商の所行を永く土人の記憶にとどめぬ。

トオシアに於てゴールドンはゲツシーに會して、大に其功を褒し、其勞を犒ひ、更に彼を遣はして今は袋の鼠となれるスレーマンを窮追せしめ、斯くてゲツシーはいよく敵を窮追して、九月に到り終に之を降し、軍法會議にかけて、スレーマン及び頭領十人をゴールドンの令によつて銃殺の刑に處したり。ダアフォルの事もまた憂ふるに足らざるを以て、直ちにカイロに赴き、イスメール王の爲に一臂を揮はせしむ。トオシアを立つて七月一日フオギアに到れば、カイロより電報あり、イスメール王位を退き、其子チウフイック埃及王の位に上れる由を告げ、其旨蘇丹全州に布告す可しとの訓令なり。ゴールドンは直ちに辭職の決心をなしぬ。しばし喧嘩をばしつれども、ゴールドンはイスメール王に對して知己の感あり、イスメール王もまたゴールドンの眞に頼る可きを知りたりき。さればイスメール王が、わが播きし種子を蒔るとは云ひながらも、内外上

下の強迫を受け、隠謀にかゝりて、心にもあらぬ退位をなせるを傷みて、ゴールドンは書翰の一節に認めて曰く、憐む可き吾イスメール王が如何ばかり苦心せしかを思ふて余は痛苦の感に堪へずと。斯くてゴールドンはダアフォルの叛會ハラウンが戦死し餘衆散じて其地いよく平穩に歸したるの報に接したれば、カアツームを發して八月カイロに入りぬ。新王は別仕立の流車と離宮をゴールドンの用に供せり。前者は辭し、後者も辭して旅館に赴かむとせしも、あまりに新王に禮を欠くも如何と枉げて之を受け、さて新王に謁して、蘇丹には再び歸るの意なき事、併しマツソフに赴きてアビシニアとの談判を片付け然る後歸國の心算なるを告げぬ。新王は必しもゴールドンを嫌はざりき。ゴールドンの書翰に曰く、新王は余の敵等が父王にも新王にも余の免職を促したりと云ふ事、余の事につきては恐ろしき苦情を聞き居れりと云ふ事を語られたれば、余は打笑ひ、新王も笑ひ玉ひぬと。斯くてゴールドンは内閣員中若し留守に自

分を悪する者あらば、自分は死刑相當の刑罰として其者を蘇丹總督に任せられんとを請ふ可しと戯れつゝ、カイロを發し、マツソフに着きて見れば、ボゴス王はアビシニアの大將に幽せられ、ボゴスは殆どアビシニア人の占領する所となり居りて、割讓不割讓どころの騒ぎにあらず。然して、埃及王よりは更に追かけて決して寸地も割讓す可からず、斷じて戰爭を避く可し、との電訓あり。此間に板挟みとなりしゴルドンは、先づ峻坂を上りてグーラに到り、アビシニアの大將軍アルーラに會しぬ。アルーラ先づ曰く、貴下は英人、貴國人は我々の同胞なり(註、アビシニア人はセミチック人種に屬し、一神教を奉せり)。然もゴルドンは自分は單に埃及王の使節にして、當分の所は回々教徒と見做されたき旨を答へ、冷遇きはまるアルーラの仕打を物ともせず、兎に角自分ゴルドンの不在中は決して埃及領を侵さずと云ふ誓詞をとりて、こたひはアビシニア國王其人に會せむと、國都に向ひぬ。とて、アビシニアには侵入の望なき

を思ひ知らせむと、本道を隠して、わざと難路より導かれたれば、ゴルドンは深壑に下り、高山に上り、十二日の辛酸を経て、漸く國都ゴンダアルに近きデブラ、タボルに着き、國王ジョーン二世に謁しぬ。王は高位に坐して大に虚勢を張り、ゴルドンの椅子は低く下座に設けたり。ゴルドン謁見の間に、入るより早く、其椅子をどつて、つかゞと上段に進み、王と押並ひて座し、對等の會見を要求す。愕然たる王はやうく己にかへり、聲色を厲ふして曰く、ゴルドンバシア、卿は朕が意一つにて此場に卿を殺し得ることを知れりや。ゴルドンは答へぬ。陛下、其儀はよく存じ居り候、聖意どあらばとく殺させ玉へ、覺悟はとくに仕りぬ。王は驚きぬ。何、殺さるゝ覺悟をしたりと申さるゝや。正に左様に候、拙者事は毎々死ぬる覺悟を致居候、殺し玉ふが恐ろしきどころにては無之、殺し玉ふは却て有り難き仕合はせに候、仔細は、拙者事も宗教上の遠慮ゆへに自殺をば致さる位なれば、陛下の御手に殺し玉は、其れこそ今後一切の困難

不幸より拙者を救ひ玉ふ次第に候。シオン王は眼を瞪りぬ、然らば朕が威力は少しも恐ろしからずと申さるゝや。頓斗恐ろしく思ひ申さず。アビシニア王は呆然として、しばしゴールドンの顔を眺めぬ。斯くて其翌日の會見に於て、アビシニア王はボコス、マツソワ、アブーナ等過去十年來埃及の侵略せる土地の還附を要求し、ドンゴラ、バアベル、ヌビア、セナアル等(註、此等はアビシニアの領を離れて已に七百年に及べるものなり)も實は要求する權あれ共、其丈は勘辨す可しと云ふ。ゴールドンは其要求を書面に認めむことを請ひ、且つ埃及王に六ヶ月の返答猶豫を與へむことを要求し、且つ一己の考にては右の要求は所詮埃及王に於て承諾すまじき旨を陳じ、滞留數日にして十一月八日歸途に上りぬ。立つに臨むで、王の使者埃及王への親翰と、一封の賜金を齎らしたれば、ゴールドンは其金を返へして其書を受取り、行くこと少時、親翰を披き見てあまりに短かきを怪しみ、通譯官に讀ますれば、

マホメット、チウフイックへ

朕は爾が彼者に持たせ遣はし書狀を受取りぬ、朕は爾と秘密の媾和をなすを欲せず、爾若し媾和を願はば、歐洲の史丹等に請へ。

ゴールドンが使命の結果は、たゞ此のみなりき。

徒勞せる使者の一行は、十一月十四日アビシニアの門なるシヤア、アムバに達して、こゝに小憩の天幕を張り、ゴールドンは斯高原の端より西北に一大バハラマを展べたる蘇丹の大平原を眺めて、坐るに三年の苦心經營の如何に空しかりしかを默想せる時しも、一隊の騎兵突然駈け來りて一行を差押へ、頭領と覺しきがアビシニア王の璽ある一書をゴールドンに差示しぬ。カッサラへ直行は相許さず、引返へしてマツソワの方へ出づ可しとなり。ゴールドンは是非なく俘になりて、引かへしゝが、途中竊に埃及王に宛てゝ一通の暗號電報をうち、兵隊若干大砲二門をのせて一隻の軍艦をマツソワへ急派せむことを請ひつ。偕ゴンダアルまで引